



イギリス会計思想史序説 : ピール(1553)からクロンヘルム(1818)まで

中野, 常男

(Citation)

研究年報. 経営學・會計學・商學, 37:37-146

(Issue Date)

1991

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004161>



イギリス会計思想史序説*

— ピール (1553) からクロンヘルム (1818) まで —

中 野 常 男

I. 簿記理論化の試みと仕訳規則

— イギリスへの複式簿記の伝来と初期簿記書の分析 —

I. 1. ロンバード通りと複式簿記の伝来

— ボロメオ商会ロンドン支店の元帳 —

I. 2. 仕訳帳アプローチと仕訳規則の定立

— ピール簿記書を中心として —

I. 3. 仕訳規則の拡張と限界

— ダフォーン簿記書を中心として —

II. 資本主理論的簿記論の萌芽

— 18世紀スコットランド簿記書の分析 —

II. 1. スコットランド啓蒙と実学教育の伝統

— 18世紀スコットランド簿記書の背景 —

II. 2. イタリア式貸借簿記の理論化と近代化

— マルコム簿記書を中心として —

II. 3. イタリア式貸借簿記の標準的教科書の出現

— メイア簿記書を中心として —

III. 資本主理論的簿記論の登場

— クロンヘルム簿記論の解明 —

III. 1. 産業革命とイタリア式貸借簿記の革新

— ブース簿記書を中心として —

III. 2. クロンヘルム簿記論の構造

— 均衡の原理と二勘定分類 —

III. 3. 簿記教授法の変遷と資本主理論的簿記論

— 簿記教授法としての資本主理論の登場 —

* 16～18世紀当時の簿記書は、例えば、John Mairの簿記書の標題が、*Book-keeping Methodiz'd: or, a Methodical Treatise of Merchant-Accompts, According to the Italian Form.*…… (1736) と表記されていたことからわかるように、一般的にかなり長い標題を付されていることが多い。しかし、以下、本稿で、各簿記書の標題に言及する場合には、紙幅の制約もあるので、上記の例では、*Book-keeping Methodiz'd* と略記するというように、原則として原標題の冒頭の数語を用いた省略形で表記しておくことにする。

また、単語の綴り方それ自体も今日と異なっていることが多いが、この点については、当時の雰囲気をもそのまま伝えるという意味からも、以下では、標題だけでなく、簿記書中の語句や文章等を引用するにあたって、できるだけ原綴りのままで表記しておくので御注意いただきたい。

さらに、本稿において、「イギリス」と表記する場合には、現代国家としての「連合王国」(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)の意味ではなく、むしろグレート・ブリテン島とアイルランド島を中心とした「イギリス諸島」(British Isles)という程度の地理的意味あいを用いているので、御注意いただきたい。ただし、言及する地域を特に限定したい場合には、イングランド、あるいは、スコットランド、アイルランドというように具体的に表記することにする。

本稿の目的は、イギリス人自身の創意に基づく最初の複式簿記の解説書であった James Peele の *Maner and Fourme* (1553) から、工業化に向けての急速な社会的・経済的変革運動であった「産業革命」もほぼ一段落をつける19世紀初頭に出版された Frederick W. Cronhelm の *Double Entry by Single* (1818) に至るまでの時期に現れたイギリスの簿記書に主たる手がかりを求めて、もっぱら文献史的に、以下の二つの課題に焦点をあてながら、イギリス会計の歴史的系譜の一断面について史的考究を進めることにある。すなわち、Peele 以降のイギリス簿記書の多くに共通してみられる一般的な簿記教授法であった仕訳帳アプローチと、例外的ながら、これに対する批判として登場した Alexander Malcolm による元帳アプローチ、さらに、Malcolm の萌芽的教示を超えて、Cronhelm によって本格的に展開された資本主理論的簿記論の構造などを概観することによって、16～18世紀当時に支配的であった仕訳規則や記帳例示の機械的な暗誦・暗記を主体とした簿記教授法から脱却し、複式簿記の拠るべき基本をまず明らかにし、学習内容をできるだけ論理的に説き明かそうとした、簿記教授法革新に向けての初期の試み、つまり、複式簿記の教示の側面における理論化・体系化の過程について検討を加えることを主要な課題とする。さらに、副次的な課題として、これらの簿記書に説かれていた教示内容から、日記帳——仕訳帳——元帳からなる三帳簿制（単一仕訳帳制）の採用、あるいは、特定商品勘定や航海勘定のような個別的な商品勘定の利用、さらに、帳簿の不規則的な締切といった、Luca Pacioli の簿記論（1494）に代表されるイタリア式貸借簿記（＝ヴェネツィア式簿記）に見出される古典的特徴が、その後の社会的・経済的環境変化の中で、今日の簿記教科書で説かれているような形態のものへとどのように変遷していったのか、つまり、複式簿記の技術的側面における近代化過程について跡づけることにある。

I. 簿記理論化の試みと仕訳規則

——イギリスへの複式簿記の伝来と初期簿記書の分析——

I. 1. ロンバード通りと複式簿記の伝来

——ボロメオ商会ロンドン支店の元帳——

わが国からヨーロッパに向かうとき、その玄関となる都市は新規航空路線の開設により増加しつつあるが、しかし、最も主要な玄関となるのは、Charles Dickens の『二都物語』(*A Tale of Two Cities*) の世界ではないが、やはりパリとロンドンという二つの都市であろう。前者が、芸術や文化の玄関口とすれば、後者は、銀行・証券・保険といった経済の側面における玄関口として、われわれを迎えてくれる。そのロンドンのシティ (The City) と呼ばれる、わずか1平方マイルほどの地域は、古代ローマの時代にテムズ川岸の砂礫の段丘に築かれたロンディニウム (Londinium) の昔から、グローバル化した国際金融システム上の一大センターとしての今日に至るまで、繁栄するロンドンの中心地としての役割を担っている。

ウェストエンドの繁華街にあるオックスフォード・サーカス (Oxford Circus) 駅から、ロンドンを網の目のように結ぶ地下鉄 (Uderground) の路線の一つ、セントラル・ライン (Central Line) の電車に乗り、五つ目のバンク (Bank) 駅——この駅名は、銀行 (bank) に由来するのではなく、すぐ南側を流れるテムズ川の川岸 (bank) に由来するといわれる——で下車すれば、そこはもうシティの心臓部である。交差点の北側には、スレッドニードル通りに面してイングランド銀行 (Bank of England) が、また、このイングランド銀行から道路を隔てた斜め向きには、シティの市長 (Lord Mayor) の公邸であるマンション・ハウス (Mansion House) が、さらに、交差点の東側には、「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則 (Gresham's Law) で有名な Thomas Gresham の創設になる王立取引所 (Royal Exchange) が、それぞれコリン

ト様式の列柱を聳やかせながら建っている。

このバンクの交差点から七つの方向に通じる街路、例えば、チープサイドの大通りを西に歩めば、ゴシック様式とルネサンス様式が美しく融合されたセント・ポール大聖堂 (St. Paul's Cathedral) に、また、南東に伸びるキング・ウィリアム通りに沿って歩めば、1666年のロンドン大火の記念塔 (The Monument) を経て、ゴシック建築のサザーク大聖堂 (Southwark Cathedral) を川向こうに配したロンドン橋 (London Bridge) にたどり着くことができる。

ロンバード通り (Lombard Street) も、スレッドニードル通りやチープサイド通りなどと同様に、バンクの交差点から七方向に伸びる街路の一つである。シティの金融街の中心にあるこの比較的幅狭い通りは、その名前が物語るように、ミラノを中心としたロンバルディア地方からの商人達に代表されるイタリア商人がかつて商業や金融業の店舗を構えていた通りでもある。

14世紀の終わり頃に Giovanni Borromeo によりミラノに設立され、1430年に孫の Filippo に継承された Borromeo 商会 (Filippo Borromeo e comp.) は、ミラノの本店の他に、14～15世紀当時における北欧商業と地中海商業の接点であった南ネーデルラントのブリュージュに支店を設け、さらに、このブリュージュ支店に従属する二次的な支店をイギリスのロンドンや、スペインのバルセローナに設けていた¹。ロンドン支店の正確な所在地については不明であるが、同商会の発祥地からみて、ロンバルディア商人が集まったロンバード通り、あるいは、その近傍にあったものと推測されている²。

Borromeo商会ロンドン支店の主要な業務は、自己ないし共同の計算、または、第三者からの委託で行った羊毛や毛織物、綿花、絹など、多種にわたる商

1) Kats [1926a] p. 91; cf. Pirenne [1963], pp. 125-126; 石坂他 [1980], 37-38頁。

2) 小島 [1971], 37頁; cf. [1978], 123頁。

品の売買活動であり、その他に、信用の開設、為替手形の振出、国内または海外との帳簿上の振替といった金融活動に携わっていた³。そして、このロンドン支店においても、13～14世紀にイタリアの地で誕生したと考えられるイタリア式貸借簿記、つまり、複式簿記が利用されていたのであり⁴、このことは、ロンドン支店の今日に残る元帳（1435～1439）から実証されている⁵。

3) Kats [1926a], pp. 92, 94.

4) 複式簿記誕生の時期や場所に関しては、史料的制約や、複式簿記の本質規定をめぐる論者間での差異もあって、明確に一致した見解を見出すまでには至っていない。しかしながら、複式簿記が、「おおむね13世紀初頭から14世紀末までの間に、イタリアで、商業と銀行業の簿記実務のうちに生成発展し、15世紀に体系的組織を確立した・・・」という点では、多くの研究者の間に一応の合意が認められるようであり、このような基本的構造がひとまず確立された15世紀段階での複式簿記を世界ではじめて印刷教本の形で紹述したのが、Luca Pacioli の簿記論であった。彼は、1494年にヴェネツィアで出版した数学の百科全書 *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* の第1部第9編 論説第11 Particularis de Computis et Scripturis において、複式簿記、特に15世紀末のヴェネツィアで用いられていた商業簿記（＝ヴェネツィア式簿記）を合計36章にわたって解説していたのである。そして、この Pacioli 簿記論に代表されるようなヴェネツィア式簿記（イタリア式貸借簿記）には、爾後の簿記解説書に長くその伝統として受け継がれてゆく、今日の簿記教科書と比較しての三つの古典的特徴が見出される。すなわち、(1) 日記帳——仕訳帳——元帳からなる三帳簿制（単一仕訳帳制）が採られていたこと、(2) 商品名を付された特定商品勘定や、相手先の地名を付された航海勘定など、複数の個別的商品勘定（＝冒険商業勘定）が利用されていたこと、(3) 帳簿の締切が一年に一度というような規則性をもって行われずに、もっぱら帳簿の更新時などに不規則的に行われていたことである。なお、複式簿記の生成とヴェネツィア式簿記の特徴等の概要については、例えば、中野 [1990a] を参照されたい (Cf. 小島 [1987], 第2章～第4章；片岡(泰) [1988], 第1章～第7章)。

5) Borromeo 商会ロンドン支店の会計帳簿の詳細については、小島 [1971], 第2章；[1987], 第11章第1節を参照されたい (Cf. Kats [1926a])。

なお、Christopher W. Nobes によれば、外国商人によるものではあるにせよ、イギリスにおける現存する最古の複式簿記帳簿とみなされるのは、Borromeo 商会ロンドン支店の元帳よりもさらに1世紀余りも前に作成されていた、フィレンツェと同じトスカナ地方の商業都市シエナの Gallerani 商会ロンドン支店の会計帳簿（1305～1308）であるといわれる (Nobes [1982], pp. 303-309)。

もっとも、この Borromeo 商会ロンドン支店の会計帳簿の存在をもって、ただちに15世紀前半当時のイギリスに複式簿記が伝来し、かつ、ある程度までその普及をみていたと結論づけることはできないであろう。なぜなら、イギリス商人自身の手により複式簿記が完全な形で利用された最も初期の例は、現在のところ、Borromeo 商会ロンドン支店の元帳よりも1世紀あまり後の、先に言及した Gresham が、「毛織物輸出商組合」(Company of Merchant Adventurers)の一員として、かつてのブリュージュに代わって16世紀に国際商業の中心地となっていたアントウェルペン(アントワープ)との貿易に携わっていた若き商人時代に作成した仕訳帳(1546~1552)であるからである⁶。

複式簿記の知識が、いつ、どのようにして、イギリスに伝来してきたのかという問題については、複式簿記の起源にかかわる問題と同様に、明確な解答は提示しえない。しかし、それは、上記したことからも推測されるように、おそらくは、当時のイギリスに居留していたロンバルディア商人をはじめとする外国商人との商取引、あるいは、逆に、ネーデルラントや、スペイン、フランスなどの海外に進出していたイギリス商人による外地での商取引などの過程を通じて、複式簿記による進んだ簿記の実務を垣間見る機会がもたらされ、このことが、イギリス商人の間に複式簿記という複雑ではあるが優れた簿記法を習得しようとする気運を醸成させた実際の端緒になったものと思われる⁷。

さらに、複式簿記に関する世界最初の印刷教本とされる Luca Pacioli の簿

6) Winjum [1971], p.149; [1972], p.138 ; Yamey [1977], p.17 ; cf. 越智 [1969], 119-130 頁 ; 石坂他 [1980], 78-82頁。

7) Winjum [1972], pp.40-44 ; cf. Ramsey [1956], pp.185-186 ; Yamey [1956a], p.9.

Greshamの仕訳帳とはほぼ同じ時期に、他のイギリス商人によって作成された会計帳簿、例えば、Thomas Howell の元帳(1522~1528)や、John Johnson の元帳(1534~1538)、John Smythe の元帳(1538~1550)、Thomas Laurence の旧

記論 (1494) に遅れること約半世紀後に出版された Hugh Oldcastle の簿記書 *Profitable Treatyce* (1543) を嚆矢として、徐々にではあるが出版されるようになっていった複式簿記解説書の登場もまた、イギリスにおける複式簿記の伝播とその漸次的普及に大きな力があつたものと考えられる⁸。次節以降では、初期のイギリス簿記書にみられる教示上の特徴を中心に、その内容を概観することにしよう。

I. 2. 仕訳帳アプローチと仕訳規則の定立

— ビール簿記書を中心として —

イギリスにおける最初の複式簿記解説書は、前節でも言及したように、Oldcastle の *Profitable Treatyce* である。しかし、当該簿記書はまた、現在のところ一冊も発見されていない「幻の書」であり、その内容は、これを修正・拡大した John Mellis の *Briefe Instruction* (1588) を介して推測されてい

元帳 (1565~1569) とこれに対応した仕訳帳 (1565~1566)、および、彼の新元帳 (1573~1581)、William Calley の元帳 (1600~1606) が残存している。これらの帳簿は、完全な形で複式簿記を利用していた Laurence の新元帳と Calley の元帳を除けば、複式記入の体裁は一応採られていたが、結論的にいえば不完全な形でしか複式簿記の技法を運用できていなかった。しかしながら、彼らがいずれも海外との貿易に携わっていた商人、例えば、Howell と Smythe はスペイン、Johnson はフランス、Laurence と Calley は、Gresham と同様に、「毛織物輸出商組合」の一員としてネーデルラントとの貿易に携わっていたことを考えるならば、このような初期の段階にあって、海外に進出した先取的なイギリス商人の活動が、複式簿記のイギリスへの導入に大きな影響を与えたことは、その後、John Weddington や Richard Dafforne といった外国に居留した経験を有する商人によって初期の複式簿記解説書のいくつかが出版されたことと相まって、否定できない事実として受け入れられるであろう。上記の16世紀から17世紀初頭にかけてのイギリス商人の会計帳簿の詳細については、Winjum [1972], Chap. VIII を参照されたい (Cf. Connel-Smith [1951]; Ramsey [1956]; Vanes [1967]; Winjum [1971])。

8) Winjum [1972], pp. 44-45.

るにすぎない⁹。この Oldcastle 簿記書に続いて、*Notable and Excellente Woorke* (1547) が出版されるが、これは Oldcastle 簿記書の出版と同じ1543年に、ネーデルラントのアントウェルペンで刊行されていた *Jan Ympyn* の簿記書 *Nieuwe Instructie* の英訳版であった¹⁰。

このような Oldcastle や Ympyn の簿記書がいずれもヴェネツィア式簿記の影響下にあった外国簿記書の翻案ないし翻訳にすぎなかったと考えられているのに対して¹¹、James Peele の *Maner and Fourme* (1553) は、その影響

- 9) Mellis は、*Briefe Instruction* の「読者へ」(To the Reader) と題した序文の中で、この簿記書の出版に関連して、次のような記述を行っている (Mellis [1588], To the Reader, A2-A3 ; cf. 小島 [1971], 73-78, 223-239頁)。

……And knowe ye for certaine, that I presume ne vsurpe not to set forth this worke of mine owne labour and industrie, for truely I am but the renuer and reuiuer of an auncient old copie printed here in London the 14. of August, 1543. Then collected, published, made and set forth by one Hugh Oldcastle Scholemaster, who as appeareth by his treatise then taught Arithmetike, and this booke in Saint Ollaues parish in Marke Lane. ……

(ただし、下線は筆者追加)

- 10) Ympyn 簿記書には、上述した1543年出版のオランダ語版と、1547年出版の英語版の他に、オランダ語版と同じ1543年に出版されたフランス語版 *Nouvelle instruction* という、合わせて三つの版が存在する。これら三つの版の相互関係について、英語版のタイトル頁や、「読者へ」(To the reader), あるいは、本文の第1章によれば、イタリア語の原本からまずオランダ語に翻訳され、次いで、このオランダ語版からフランス語に、さらに、フランス語版から英語に訳出されたものと記されている。ただし、同じ英語版中の「著者の序言」(The prologue of the auctor) においては、Juan Paulo によるイタリア語の原本からまずフランス語に翻訳し、そこからオランダ語(フランダース語)に訳出した旨が記述されている。(Ympyn [1547], Title Page ; To the reader ; The prologue of the auctor ; The first Chapter)。

なお、Ympyn 簿記書英訳版の詳細については、小島 [1971], 第4章を参照されたい。(Cf. Kats [1927])。

- 11) Oldcastle の簿記書は、既述のように、「幻の書」であるが、後年これを修正・拡大して出版された Mellis 簿記書の分析を通じ、当該簿記書の原典について、それは、Paciolo 簿記論の翻訳であるとか、Paciolo が依拠したものと同じマニユスクリプトに拠ったものであるとか、その他種々の推測が行われている。同様に、Ympyn 簿

を紛れもなく受けているが、とにかくイギリス人自身の創意によって著された最初の複式簿記解説書であった¹²。しかも、そこには、爾後のイギリス簿記書に長くその伝統が受け継がれてゆく簿記教授法上の重要なアプローチ、つまり、仕訳帳アプローチ (journal approach) — 仕訳帳における取引の貸借分析の教示に重点を置き、これを援助するための仕訳規則を取引例や帳簿の記帳例示とともに提示することにより、各種取引の仕訳パターンを経験的に学習させる手法 — が既に見出されるのである¹³。

すなわち、Peele は、複式簿記の教示にあたり、仕訳帳への記入法を説明する部分に本文 (The Instruccion) のかなりの紙面を割き、さらに、取引仕訳の説明をより良く理解させるために、従来の Paciolo 簿記論などにはみられ

記書についても、その原典は Paciolo 簿記論に改訂を施したマニュスクリプトをイタリア人から入手したものであろうとの推測等が行われている (小島 [1971], 85, 99, 233-234, 279頁; Yamey [1975], p. 68; cf. Brown (ed.) [1905]; Woolf [1912] (片岡 (義)・片岡 (泰) 訳 [1977]); Geijsbeek [1914]; Kats [1926b]; [1927]; Murray [1930]; Penndorf [1933]; de Roover (R) [1937]; Yamey [1963a]; [1967]; [1975]; [1979]; Bywater and Yamey [1982])。

- 12) 小島 [1971], 33, 133頁; [1987], 213頁; cf. Yamey [1963a], p. 162; Bywater and Yamey [1982], p. 51.

なお、Peele の *Maner and Fourme* の詳細については、小島 [1971], 第 5 章を参照されたい (Cf. Kats [1930])。

- 13) Cf. Littleton [1931], p. 33; [1961], p. 567; Jackson [1956], pp. 288, 293; Yamey [1974], p. 153; Edwards (J) [1989], p. 71.

なお、Analías C. Littleton によれば、簿記教授法の発展は、本文中で言及した仕訳帳アプローチから、元帳アプローチ (ledger approach)、さらに、貸借対照表アプローチ (balance sheet approach) への変遷として捉えられている。このうち、元帳を教示の中心にすえた元帳アプローチは、19世紀半ば頃から本格的に展開されるようになり、従前の仕訳帳アプローチに取って代わったといわれるが、その嚆矢は、Alexander Malcolm の *New Treatise of Arithmetick and Book-keeping* (1718) などに既に見出される。なお、この Malcolm 簿記書の詳細については、II. 2. で改めて検討するので参照されたい (Littleton [1931], pp. 33-34; [1961], pp. 567-568; cf. Jackson [1956], pp. 303-306; Mephram [1988c], pp. 108, 112, 121, 184-185)。

なかった仕訳処理の統一的指針としての仕訳規則、特に「受け取った物ないし受け取った人は、引き渡した物ないし引き渡した人に対して借方である」という文言によって代表される、物の受渡しと人的関係とを絡めた擬人的受渡説に基づく仕訳規則を提示している¹⁴。

かかる仕訳規則は、本文の第4章において、財産目録記載項目と日常的取引の仕訳処理に関する説明の最後に、これらを総括する形で、会得しておくべき一般規則として、以下のように示されている。すなわち、

14) Paciolo 簿記論にあっては、仕訳処理の教示は基本的に取引例に基づく仕訳帳への個別的記入法の解説にとどまっており、仕訳規則の定立はみられない。特定の取引仕訳に対応する個別的規則でない、仕訳に関する一般的規則定立に向けての最初の試みは、ドイツの Johann Gottlieb の簿記書 *Ein deutsch verstendig Buchhalten* (1531) に見出され、イタリアの Domenico Manzoni の *Quaderno doppio* (1540) においても、Paciolo 簿記論にはみられなかった帳簿の記帳例示とともに、仕訳処理の一般的規則を定めようとする試みが見出されるといわれる。ただし、かかる仕訳規則のより一般的な適用ないしその可能性を示したのは、上述した Peele の *Maner and Fourme* であった。(Yamey [1980b], pp. 83-88 ; cf. Bywater and Yamey [1982], pp. 38, 41, 52)。

また、勘定の人格化、つまり、擬人化 (personification) の手法は、個人間の貸借関係から取引の貸借分析を容易に説明できた人名勘定に加えて、現金勘定や商品勘定などが導入された際に、これらの勘定を抽象化して財産の一構成部分として把握することができず、むしろ、これら非人名勘定についても人名勘定と同様な人的関係 (= 貸借関係) を擬制し、かかる観点から取引の貸借分析を統一的に説明しようとした試みの産物であった。このような勘定の擬人化は、既に Paciolo 簿記論にも見出されるが、特にイギリスにおいては、イタリアの簿記書を翻訳する際に、厳密に対応する語が英語に存在しなかったため、“debito”や“credito”を擬人的に意識し、より人的意味合いを有する“oweth”や“trust”という語を充てたり、あるいは、イギリス中世の荘園会計にみられる会計責任 (accountability) の設定と解除にかかわるチャージ・ディスチャージ (charge and discharge) の形式とも結びつくことなどによって、深く簿記教育の場に根づくようになり、その伝統は19世紀末で根強く残存することになったといわれる (Jackson [1956], pp. 295-296 ; Chatfield [1977], pp. 218-220 ; Edwards (J) [1989], pp. 71-72 ; cf. Geijsbeek [1914], p. 61 ; Littleton [1933], Chap. IV (片野訳 [1978], 第4章) ; 久野 (秀) [1979b], 第1部第2章)。

...your generall rule before taught, whiche is to make the thinge or thinges receiued, debitour to the thyng or thynges deliuered, or the receyuer debitour to the deliuerer, you cannot mysse ¹⁵.

(ただし、下線は筆者追加)

Peele はまた、仕訳帳の記帳例示の冒頭に掲げた詩文形式による「守るべき規則」(Rules to be obserued) の一部にも、本文中で示した仕訳に関する一般規則を、脚韻をふむ形で若干表現を変えて再提示している。すなわち、

Rules to be obserued

If that in this accompt, these preceptes ye obserue,
than I you wel assure, no part therof shall swerne.

To make the thinges Receiuyd, or the receiuer,
Debter to the thinges deliuered, or to the deliuerer.

And to receiue before you write, and write before you paye,
So shall no parte of your accompt, in any wyse decaye.

15) Peele [1553], The Instruccion, The iiiii Chapter.

Peele はまた、元帳記入の方法を説明する第5章においても、上記の仕訳規則を、次のような形に修正して記述している (Peele [1553], The Instruccion, The v Chapter)。

You shall understande, that every one parcell in the Jornall, ought to bee twoo in the Ouaterne, and the cause is, that every of them dooeth include or contain twoo properties, wherof thone is a Debitour, or borrower, and the other is a Creditour or lender. The borrower, or the thyng borrowed, is become Debitour, by reason that it dooeth retain and possesse : and the lender, or the thyng lent, is the Creditour, by reason that it is dispossessed.

(ただし、下線は筆者追加)

なお、上掲した文章に類似の表現は、Peele の *Maner and Fourme* に先行する Ympyn の簿記書にも見出される (Ympyn [1547], The ix Chapter ; cf. Yamey [1980], pp. 86-87)。

Obserue wel these few rules, your Iournall boke throughout,

So shall you make sure worke, of that you go about ¹⁶.

(ただし、下線は筆者追加)

実際の取引仕訳からおそらく帰納され抽象化されたと考えられる一般的仕訳規則の提示、あるいは、かかる一般規則を援用して学習者に仕訳のパターンを容易に暗誦・暗記させることにより、複式簿記学習の基本的要素ともいえるべき取引の貸借分析に関する知識を教授しようとする手法、つまり、仕訳帳アプローチの展開は、イギリスでは、上記の *Maner and Fourme* を嚆矢とするのであるが¹⁷、このような手法は、当該簿記書にとどまらず、これに続く Peele の第二の簿記書である *Pathewaye to Perfectnes* (1569)、さらに、先に Oldcastle の簿記書に関連して論及した Mellis の *Briefe Instruction* などにも継承されてゆく。

すなわち、Peele の新著 *Pathewaye to Perfectnes* にあっては、複式簿記の基本が教師と生徒との問答形式（対話形式）によって解説されており、仕訳規則は、かかる本文の問答の中で、教師により、取引例を用いた仕訳処理の説明に先立って、暗記により、また、理性によっても習得されるべき規則であり、かつ、取引を仕訳帳に記入するすべての場合に実践されるべき規則という形で、次のように説かれている。すなわち、

Scholemaster. Yt is a certayne rule to be learned by rote, and also by reason, and to be practised in all causes of entring percelles into the Journall …… All thinges receaued, or the receauer, must owe to all thinges deliuered, or to the deleuerer ¹⁸.

(ただし、下線は筆者追加)

16) Peele [1553], Rules to be obserued.

17) 小島 [1974], 120頁 ; cf. [1987], 222頁。

18) Peele [1569], A Dialogue betwene the Scholemaster and the Scholler.

さらに, Peele は, 前著 *Maner and Fourme* の場合と同様に, 仕訳帳の記帳例示の冒頭に掲げた韻文形式による注意事項中にも, 以下のような一般的仕訳規則を, その一部として掲げている。すなわち,

To make eache thinge receaued, or the receauer,
Owe to eache thinge deliuered, or the deliuerer ¹⁹.

同様に, Mellis 簿記書においても, これに先行する Peele の簿記書からおそらく借用されたものとの推測がなされているが ²⁰, 先に述べた *Pathewaye to Perfectnes* の本文中にみられるものとはほぼ同一表現による仕訳規則が提示されている。すなわち,

……there is a Rule, which beeing well understood, will aide you greatly : which Rule is to bee learned as well by rote, as by reason, which is thus.

All things receiued, or the receiuer must
owe to all things deliuered, or to the deliuerer ²¹.

(ただし, 下線は筆者追加)

もっとも, 上記のような教師の教示に対して, 生徒の側は, 暗記によってこの規則を答えることはできるが, しかし, その理由を自分は理解していないと述べており, このような教師と生徒との対話からも, その当時の簿記法の教示が “how to” 中心の解説であり, “why” の側面の説明を欠いていたことがうかがえる (Peele [1569], *A Dialogue*; cf. 小島 [1974], 120頁)。

なお, Peele の *Pathewaye to Perfectnes* の詳細については, 小島 [1971], 第7章を参照されたい。

19) Peele [1569], *The Journall or daiyle Booke of letter A*.

20) Mellis の *Briefe Instruction* は, 既述のように, Oldcastle 簿記書を修正・拡大したものであるがゆえに, そこにみられる仕訳規則も, 既に Oldcastle 簿記書に含まれていたものであるとの推測がなされている。しかし, Paciolo 簿記論にはこのような仕訳規則の記述はみられず, しかも, Peele の説く仕訳規則とほとんど同一であるところから, Peele の *Pathewaye to Perfectnes* から借用したものであらうと考えられている (Kats [1926b], pp. 484, 487 (Note14); cf. 小島 [1974], 121頁)。

なお, Mellis 簿記書の詳細については, 小島 [1971], 第8章を参照されたい (Cf. Kats [1926b])。

21) Mellis [1588], *Briefe Rvles*, The ix Chapter.

また、時期的にやや遅れるが、John Carpenter は、その著書 *Most Excellent Instruction* (1632) において、上述の Peele と Mellis の簿記書で提示されていた仕訳に関する単一の包括的規則を、以下に掲げるように、貸借二つの要素に分解した形で示すとともに、かかる定義こそが彼の簿記書の基底をなすものであると述べている。すなわち、

By the Charge, or Debtor, is meant the Account that oweth.

By the Discharge or Creditor, is meant the Account that due to have.

The Debtor, or debtors, being the Charge: and the Creditor, or Creditors, being the Discharge, are in every parcell to equall one the other, whether there bee many Debtors, and but one Creditor ; or sundry Creditors, and but one Debtor.

Generally: All things received, or the Receiver, are to be charged or made Debtor.

Contrarily: All things delivered, or the Deliverer, are to be discharged, or made creditor, whether they bee simple or compound.

And these definitions are foundations on which this worke is grounded ²².

このような Peele や Mellis の簿記書などに見出される簿記教授上のアプローチ、つまり、仕訳帳における取引の貸借分析の教示に重点を置き、これを援助するために、記帳例示とともに、物の受渡しと人的関係とを絡めた擬人的受渡説に基づく、しかも、各種取引の貸借分析に共通するような一般的で包括的な性格をもつ仕訳規則を提示しようとする手法は、Paciolo の簿記論が、教示の理論化に意を用いることなく、ただ15世紀当時のヴェネツィアで利用され

22) Carpenter [1632], *An Exact Instrvction for keeping Merchants Accovnts*, pp. 1-2 ; cf. 小島 [1971], 294頁 ; [1974], 121頁 ; [1987], 280頁。

なお、Carpenter 簿記書の詳細については、小島 [1971], 第9章を参照されたい。

ていた商的企業複式簿記を単に紹述する段階にとどまっていたことと比較するならば、少なくとも簿記法教授の側面における大きな工夫ないし進歩であったと考えられる。また、仕訳規則それ自体も、帰納的観点に立っての簿記実務からの基本的部分の抽出とその定式化とみるならば、簿記教授上における初期の理論化の試みとして評価することができるであろう。しかしながら、かかるアプローチを採る限り、より多様な形態の取引に対応できるような普遍性を当該規則に付与しようとするほど、仕訳規則はより抽象的なもの、したがって、個々の取引仕訳に対する具体的指針としての性格が稀薄になり、逆に、具体性をもたせようとするほど、規則それ自体が拡張され、かつ、細分化ないし個別化されてゆくという矛盾を生じることになる。次の I. 3. においては、17世紀前半の Richard Dafforne の二つの簿記書を中心に、細分化・個別化という仕訳規則の新たな展開について考察してみよう。

I. 3. 仕訳規則の拡張と限界

—ダフォーン簿記書を中心として—

初期のイギリス簿記書のほとんどが薄幸な運命をたどったのに対して²³、Dafforne の *Merchants Mirrour* (1635) は、イギリスの複式簿記解説書としてはじめて数版を重ねるに至った書物であり、その意味において好評を博した簿記書であったといえるであろう²⁴。

この *Merchants Mirrour* は、基本的には従来からのイタリア式貸借簿記(=ヴェネツィア式簿記)の伝統を踏襲しながらも、Dafforne 自身がネーデ

23) 例えば、Oldcastle の簿記書は、既述のように、現在のところ一冊も発見されておらず、また、Ympyn 簿記書英訳版は一冊、Peele の *Maner and Fourme* も二冊、さらに、これに続く John Weddington の *Breffe Instruction* (1567) も一冊が、それぞれ残存するのみであるといわれる (Cf. 小島 [1971], 133頁)。

24) Geijsbeek [1914], p. 137 ; Yamey [1963a], pp. 167, 170 ; Bywater and Yamey [1982], p. 96 ; cf. Thomson [1963], p. 205.

ルラント、具体的には、スペインに対する抵抗運動の中から首尾よく独立を達成し、17世紀前半に「黄金時代」を迎えるオランダ（ネーデルラント連邦共和国）の中心都市として、また、アントワープに代わる国際的な仲継市場（entrepôt）として興隆してきたアムステルダムに滞在した商人であったことを反映してか²⁵、その当時のネーデルラントに現れた簿記書の影響を受けて²⁶、従来の Peele や Mellis などのイギリス簿記書にみられた統一的処理指針としての一般的・包括的仕訳規則を提示するやり方と異なった、個々の取引形態に応じた多数の、しかも、詳細な個別規則を仕訳処理の指針として示す手法が採用されている。

すなわち、Dafforne は、*Merchants Mirrour* の本文（An Introduction to Merchants Accompts）において、Peele の *Pathewaye to Perfectnes* で採用された問答形式を取り入れ、複式簿記を教師と生徒との対話による 250 問の設問と解答という形式で解説するとともに、さらに、その中で、商人が遭遇するであろう各種の取引を想定し、これに対応できるような貸借各15組、合計30項目の仕訳規則を、書物なしで習得すべき、かつ、取引の継続に必須の「援助規則」（Rules of Aide）という形で提示したのである。すなわち、

25) Bywater and Yamey [1982], p.96 ; cf. 栗原 [1969], 125-134頁 ; 石坂他 [1980], 83-87頁。

26) ネーデルラントの簿記書ではじめて仕訳規則を説いたのは、Elcuis Edouardus Leon Mellema の *Boeckhouder na de conste van Italien* (1590) であったといわれ、その中で、Mellema は、取引の貸借分析と仕訳処理のために、「1. 受け取った人ないし受け取った物は借方、費やした人ないし費やした物は貸方である。…」など、合わせて4項目の規則を提示している。このような仕訳の処理指針として複数の仕訳規則を提示するやり方は、彼以後のネーデルラントの簿記書にも受け継がれ、例えば、Passchier Goessens の簿記書 (1594) では6項目、また、Martin vanden Dycke の簿記書 (1598) では10項目の仕訳規則がそれぞれ示されており、さらに、17世紀に入って出版された Jacob van der Schuere の簿記書 (1625) や Johannes Buingha の簿記書 (1636) では、貸借各12項目、合計24項目の仕訳規則が提示されていたのである（小島 [1987], 136-137, 141, 246-247, 261-262, 268頁）。

Rules of aide, very requisite in Trades continuance,
to be learned without booke.

1. Whatsoever commeth unto
us (whether Mony, or Wares) for
Proper, Factorage, Company ac-
count, the same is

_____ Debitor.

2. Whosoever Promiseth, the
Promiser is _____ Debitor.

3. Unto whom wee pay (wheth-
er with Mony, Wares, Exchanges,
Assignations) being for his owne
account : that man is

_____ Debitor.

..... (中 略)

15. When wee lose by gratuities
given, whether great, or small, or
howsoever, then is Profit and
Losse

_____ Debitor.

1. whatsoever goeth from us
(whether Mony, or Wares) for
Proper, Factorage, Company ac-
count, the same is

_____ Creditor.

2. Unto whom wee Promise,
the Promised man is — Creditor.

3. Of whom wee receive (wheth-
er Mony, Wares, Exchanges, Assig-
nations) being for his own account
: that man is

_____ Creditor.

15. When wee gaine by gratuities
received, whether great, or small,
or howsoever, then is Profit, and
Losse

_____ Creditor. ²⁷

27) Dafforne [1635], *An Introduction to Merchants Accompts*, pp.19-20 ; cf.
小島 [1987], 286-287頁。

なお, Dafforne の *Merchants Mirrour* の詳細については, 小島 [1971], 第10
章を参照されたい。

さらに、貸借仕訳の訓練とその習熟を目的として著された Dafforne の第二の簿記書 *Apprentices Time-Entertainer Accomptantly* (1670 : ただし、初版は1640) においては、前著 *Merchants Mirrour* でみられた多数の細分化された仕訳規則、つまり、仕訳処理の具体的・個別的指針として、各種の取引形態に対応するような形で、それ自体が半ば取引例化した個別的仕訳規則を提示する手法は一層押し進められ、彼の説く「援助規則」(Rules of Aid) は、貸借各30組、合わせて60項目という、前著の二倍にまで拡張されるに至っている。すなわち、

The Rules of Aid.

Now follow the 60 Rules of Aid, depending upon the Premises.

The Debtors in the Rules of Aid.

1. The mony that we have at the taking of our Inventory is entred by the name of Cash

————— Debitor.

2. The Commodities that are remaining unsold in that Ware-

house ————— Debitor.

2. The Commodities formerly shipt unto another Land, or Town, to be sold for Proper or Company accompt; whereof all, or part of them are yet unsold.

Voyage to Roan, consigned to Jean du Boys ————— Debitor.

The Creditors in the Rules of Aid.

1. Stock ————— Creditor.

2. Stock ————— Creditor.

2. Stock ————— Creditor.

2. The Houses, Lands, Rents, Legacies, Ships-parts; each name severally _____ Debitor.	2. Stock _____ Creditor.
3. People of whom we ought to have; each name severally _____ Debitor.	3. Stock _____ Creditor.
4. Stock _____ Debitor.	4. People unto whom we owe; each name severally _____ Creditor. ²⁸

..... (以下、省略)

上記の Dafforne の二つの簿記書に見出される、仕訳規則をあらゆる取引形態に対応できるような具体的・個別的指針と位置づけ、かかる目的のために細分化された個別規則を提示してゆこうとするやり方は、18世紀の末まで一般に採られていたといわれるが²⁹、それはまた同時に、先に述べた Peele 流の統一的・包括的处理指針としての単一の仕訳規則を提示しようとする手法と結合されて、多重構造をもつ仕訳規則、具体的には、まず最初に仕訳処理に関する包括的な一般規則を示し、次に、これを受けて各種取引形態別に定立された

28) Dafforne [1670], The Rules of Aid.

Dafforne は、*Apprentices Time-Entainer Accomptantly* において、合計60項目に及ぶ援助規則(仕訳規則)を提示するとともに、これらの規則を要約したものととして、先の注26)で言及した van der Schuere と Buingha の仕訳規則そのものを掲記しており、Dafforne の教示した援助規則は、当時のネーデルラントの簿記書の著述家達によって展開された仕訳規則の内容をイギリス商人にわかりやすく拡張ないし普遍化したものというべきであろうとの推測がなされている(小島 [1974], 121頁; cf. Jackson [1956], pp. 289-290)。

29) Jackson [1956], p. 290; cf. Littleton [1933], p. 181 (片野訳 [1978], 277-278頁)。

多数に及ぶ詳細な個別規則を提示するという方向へと展開されてゆく³⁰⁾。

例えば、17世紀末に出版された Edward Hatton の *Merchant's Magazine* (1665) においては、Dafforne 的な取引形態別の詳細な個別的仕訳規則は、次に示すような擬人的受渡説に基づく一般規則と組み合わせられ、

General Rule.

Any thing whatsoever is received either by the Merchant, or any way for his Accompt by his Servants, whether the same be Money or Wares: I say the thing so received for, or upon his Accompt, is in the Ledger (which shall be spoken to by and by) made Debter to the Person received from, or thing for which it is received.

Also every thing whatsoever is delivered from the Merchant upon any Accompt, whether Money or Wares, the thing so delivered by the Merchant, or any way for his Use or Accompt, is in the Ledger made Creditor By the Person to, or thing for which the same is delivered³¹⁾.

(ただし、下線は筆者追加)

以下に掲げるような総計74項目に及ぶ取引事例の各々に対する仕訳処理の具体的指針という形で教示されているのである。すなわち、

30) 多重構造をもつ仕訳規則の提示は、イギリスの簿記書のみならず、その影響を受けた19世紀のアメリカの簿記書にも見出される。例えば、資本主理論的簿記論をイギリス簿記書ではじめて体系的に説述した Frederick W. Cronhelm の簿記論をアメリカに導入・移植しようと試みた Benjamin F. Foster の簿記書 *Concise Treatise on Commercial Book-keeping* (1836) においても、Cronhelm 的観点に立っての複式簿記の基本原理解説の後に、三重の構造をもつ仕訳規則、つまり、全般的かつ包括的な一般規則、次いで、かかる規則を人名勘定、財産勘定、および、資本勘定の分岐たる損益勘定のそれぞれに適用する場合の概括規則、さらに、これらの規則を各種形態の取引に適用する場合の詳細かつ多数に及ぶ個別規則という三種のものに分けて提示されているのである (Cf. Foster [1836], pp. 38-46, 62-66)。

31) Hatton [1695], p. 137.

Definition. Proper Accompts in Domestick business is, when the same is wholly managed by the Merchant or his Domestic Servants ; as in the Cases following.

Case 1. When Money is received for a Debt.

Rule. [Cash Debtor] To him for whole Accompt it was paid.

The paying Man's Accompt, Creditor, by Cash.

Case 2. When present Money is received for Wares.

Rule. [Cash Debtor] To the Wares sold, the Summ received.

Goods sold Creditor by Cash for the same Summ.

Case 3. When Mony is paid for Wares, presently, as soon as bought.

Rule. [Wares bought, Debtor] To Cash for what paid.

Cash Creditor. By Wares bought, in the same Summ ³².

..... (以下、省略)

また、Charles Snell も、*Rules for Book-keeping* (1701) において、上記の Hatton の場合と同様に、一般規則と個別規則という二重構造をもった仕訳規則を提示していたのであり、特に後者の個別的仕訳規則は合わせて70項目にわたっている。すなわち、

A General Rule.

That Accompt into which any thing comes, is to be charged with it Debtor.

That Accompt from whence it comes, is to be discharged of it Creditor.

Receipts.

I . When you Receive Mony of any Person who already stands

32) Hatton [1695], pp.142-158.

Debtor for it upon you Ledger, or when you Receive Mony of another upon his Accompt, or by his order, you enter it on the Debtor side of your Cash-Book, as follows,

To A-B-, (viz. the Person who already stands Debtor for it upon your Ledger,) then the other necessary Circumstances of the Article.

II When you Receive Mony of any Person, or by the Order of any Person, not for a Debt due to you, but only to keep in your Hands till further Order from the Proprietor, you enter it on the Debtor side of your Cash-Book, as follows,

To Cash Accompt of A-B-, (viz, Proprietor) ³³.

..... (以下、省略)

もっとも、あらゆる形態の取引に対応できるように仕訳規則を具体的かつ個別的に示そうとすれば、結果的に、提示されるべき規則の、いわば無限大への拡張とそれ自体の取引例化をもたらすという大きな限界に突き当たる。すなわち、仕訳処理全体に通じる理論的枠組みを論じることなく、ただ単に取引例化した複雑かつ多数に及ぶ個別的仕訳規則を提示し、これらを機械的な反復練習によって記憶させようとすることは、学習者を個別的な取引例の暗誦、暗記にのみ走らせて、複式簿記の真の構造を理解させることにつながらず、結局のところ、簿記の習得を援助するという仕訳規則定立の本来の目的ないし趣旨に反するばかりでなく、かえって、複式簿記の学習そのものを退屈で非効率的なものとしていったに違いない³⁴。

33) Snell [1701], pp. 1-11.

なお、Shell は、簿記の歴史よりも、監査の歴史、特に1720年の「南海泡沫事件」(South Sea Bubble Case) にかかわる Sawbridge 商会の監査で有名である。この点については、例えば、Hasson [1932] を参照されたい (Cf. Snell [1720])。

34) Cf. Yamey [1974], p. 153.

かかる状況に対処すべく、18世紀に入って、従来の仕訳帳アプローチから脱却した新しい教授法、つまり、複式簿記を、多数の個別的仕訳規則の集合として盲目的ないし機械的に暗誦・暗記させることにより教示するのではなく、その拠るべき基本をまず明らかにすることにより、簿記の学習内容を理論的・体系的に説き明かそうとする簿記教授法の近代化が、比較的少数の著者達によってではあるが、試みられはじめるようになった。この点については、次のⅡで改めて検討することにしたい。

Ⅱ. 資本主理論的簿記論の萌芽

—18世紀スコットランド簿記書の分析—

Ⅱ. 1. スコットランド啓蒙と実学教育の伝統

—18世紀スコットランド簿記書の背景—

スコットランドは、グレート・ブリテン島の北部、全体のおよそ $\frac{1}{3}$ を占め、中南部を占めるイングランドとともに、複合民族国家としてのイギリス、つまり、「連合王国」(United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland)を構成する主要地域である。ただし、ケルト人を主流とし、同じ国教会(Established Church)でも「会員相互間の自由と平等」を主張する長老会派(Presbyterian)中心のスコットランドは、ケルト人とローマ人との混血であるブリトン人を主流とし、「国王の至上権」を主張する監督会派(Episcopalian)中心のイングランドとは、民族的にも宗教的にも異なっている。また、「連合王国」を構成する他の二つの地域、つまり、ウェールズが16世紀にイングランドにより直接的な併合を通じて植民地化され、スコットランドと同じケルト人主流の北アイルランドも16～17世紀にイングランドによって植民地化されたのに対して、スコットランドは、少なくとも1707年のイングランドとの合併による「連合王国」形成に至るまで独立国としての地位を保持してきた。こ

のようなスコットランドの地域的独自性は、現在でも同地にあるスコットランド銀行 (Bank of Scotland) 等の三行が、法貨ではないが、「地域通貨」として独自の銀行券を発行・流通させていることにも示されるであろう³⁵。

もっとも、スコットランドは、イングランドとの合併当時においてさえ、「褐色のヒースと草ぼうぼうの森林の国」³⁶といわれたように、やせた土地と中世的な農業方法のゆえに貧しく、イングランドあるいは海外との間に取るに足る貿易もなかったので、南の隣国との経済的格差は著しかった。しかも、このような劣勢な状態は、合併に先立って1603年に両国の間に生じた「王冠の統合」、つまり、イングランドにおけるテューダー家最後の国王 Elizabeth I の死去に伴う、スコットランドのスチュアート家の国王 James VI によるイ

35) 北 [1985], 3-5, 9-10, 39頁。

36) Trevelyan [1961], p. 421 (松浦・今井訳 [1983], 346頁)。

37) イギリスの歴史家 George M. Trevelyan によれば、1603年にスコットランドの James VI, つまり、イングランドの James I が、ホリールードからホワイトホールに移り、彼の一身に二つの王国が統合された後も、両国の国民、議会、法律、教会、商業組織はさらに世紀の間かつてのように分離し異なったままであった。「王冠の統合」により、両国の間に交わされた三百年にわたる周期的な戦争は終息させることができたが、しかし、両国の国民は、本国にあっては、平和になった国境をはさんで互いに睨み合い、海外においては、両国の商人は相変わらず商売敵であり、富を誇るイングランド人がどこでも優位を占め、力の限りを尽くしてスコットランド人を海外市場、植民地から締め出していた。したがって、スコットランドの経済状態は「王冠の統合」によって何ら改善されることなく、名譽革命後の1689年の時点でさえ、農業の方法はロージアン三州の肥沃な土地においても中世的であり、排水工事がなされないために、最上の土地の多くが水びたしで利用されず、逆に、不毛の丘陵斜面まで耕されるという有様であった。土地はきわめて短期の賃貸契約で貸し出され、保有期間の保証がなかったので、農業改良も不可能であったし、地主や借地農も土地につき込む資金を持ち合わせていなかった。原始林は既に消滅していたが、近代の植林や生垣・塀が吹きさらしの風景の単調さを破るには至らず、貧弱な羊や牛が寒風に震えていた。商工業の発展も依然としてほんの小規模規模であり、グラスゴウには未だ海運業は栄えておらず、もっとも大きくかつ富裕な都市であったエディンバラの目抜きハイ・ストリートにおいてさえ、ガラス窓は稀であるという状況にあったといわれる

ングランド王位の継承に基づく「同君連合」の形成によっても解消されることはなかった³⁷。むしろ、イングランドが市民革命を経て議会主義的重商主義を確立し、17世紀末からの経済発展を示しはじめたのに対して、逆に、18世紀初頭のスコットランドでは、17世紀以来の穀物不作から生じた食料飢饉が続き、イングランドの重商主義的政策下での関税の強化や、海運法（Act of Navigation — 航海条例）による外国船の植民地市場からの排除に遭遇する中で、イングランドの東インド会社に対抗してアフリカや西インドとの貿易を企図して設立されたダリエン会社（Darien Company — Company of Scotland trading to Africa and the Indies）が破産の憂目に会い、また、イングランド銀行に対抗して設立されたスコットランド銀行もそのスタート直後から危機に瀕するなど、重大な経済的破局に直面していた。このような経済的窮地から脱するために、イングランドの工業化に対抗できるより一層の貿易の振興や、地域産業の育成、先進のイングランドの資本と技術を導入しての新工業の発起などが待望され、結局、スコットランドは、こうした理由のゆえに、一般に「経済的合併」ともいわれる、1707年のイングランドとの合併を受け入れることになる³⁸。

（Trevelyan [1961], pp. 207-208（藤原・松浦訳 [1971], 174-175頁）；[1958], pp. 400, 480（大野監訳 [1974], 131, 207頁）。

38) 北 [1985], 39-41頁；cf. 天川 [1966], 224-225頁。

イングランドにとっても、スコットランドとの合併は、スペイン継承戦争を戦っていた当時、敵国フランスと結ぶ恐れのある裏口を効果的に閉ざすという政治的理由があり、さらに、長期的にみれば、かかる合併によって、18世紀に入り伝統になれ沈滞気味のイングランドに、スコットランド人の活力を経済の担い手として加えることによって、60～70年後に到来するイギリス産業革命の政治的前提条件を形成することができたのである（天川 [1966], 188頁）。

なお、スコットランドとイングランドとの合併問題、特にその原因や経過、結果等については、天川 [1966], 第5章において、Daniel Defoe 研究を通じて詳細に論じられているので参照されたい。

かかる合併により、スコットランドは、独自の議会を失うが、それと引き換えに、イングランドの市場および植民地における完全な提携関係を獲得し、同地に永遠に続いてきた赤貧状態をついになくす機会を開くことになった³⁹⁾。もっとも、イングランドとの合併がもたらす恩恵は、一世代ないしそれ以上の間、遅々として現れなかった。合併による政治・商業組織の合同の結果として、ハイランド地方の社会改革、スコットランド人によるイギリス帝国への植民、綿花やタバコを主として取り扱う大西洋横断貿易（＝北アメリカ・西インド貿易）によるグラスゴウやクライド川流域全体の商工業地帯への変貌等が進行するのは、農業方法の改良とともに、主として18世紀も後半に入ってからのものであった⁴⁰⁾。

そして、この18世紀後半に至って、スコットランドは、長年にわたって惨めな生活を強いてきた貧困から解放され、突然の輝きを放つ時代を迎える。特に

39) Trevelyan [1961], p. 418 (松浦・今井訳 [1983], 344頁)。

40) Trevelyan [1961], pp. 418-419, 450-462 (松浦・今井訳 [1983], 344, 370-380頁)。

イングランドとの合併は、少なくとも即時的にはスコットランドに利益をもたらさなかった。イングランドとの間の関税障壁の除去は、スコットランドの産業を、先進イングランドの産業との激しい競争にさらし、特に織物業は致命的な打撃を受けた。塩税の増大はオランダとの競争関係にあるニシン漁業を阻止し、イングランドの貿易統制はスコットランドの羊毛輸出を禁止した。フランス貿易の喪失に代わってやがて現れてくる植民地貿易は合併の直後には効果を示さなかった。合併の時にスコットランド産業振興基金が設けられ、特に漁業と亜麻・毛織物業の奨励が行われたが、その効果は直ちに現れるものではなかったし、漁業はついに立ち直ることができなかった。このような不満が、1715年と1745年の二度にわたるジャコバイト（1688年の名誉革命で亡命したスチュアート家の James II とその子孫の王位回復を図る人達）の反乱に多くのスコットランド人を参加させることになったのであろうといわれる。事実、合併からおよそ半世紀が経過した時点で公刊された Samuel Johnson の英語辞典 *A Dictionary of the English Language* (1755/1756) の第2巻に含まれた「からす麦」(Oats) の項目で、「イングランドでは一般に馬に与えられる穀物であるが、スコットランドでは庶民の主食になっている」と解説されていたことから想像されるように、18世紀半ば頃においてすら、両地域の間には大きな経済的格差が存していたのである（水田 [1968], 12-13, 56頁；cf. Johnson [1756], "Oats")。

文化的側面をみるとき、そこに「スコットランド啓蒙」(Scottish Enlightenment)⁴¹⁾と呼ばれる、スコットランドの文化的黄金時代が到来するのである。すなわち、社会科学の分野において、Adam Smith や David Hume, Henry Home (Lord Kames), James Steuart, Adam Ferguson, Dugald Stewart など、非凡な個性と知的能力を合わせもったスコットランドの人達はその当時のヨーロッパに啓蒙主義思想の範を示すとともに、医学や数学、農学、化学、地質学等の自然科学の分野でもスコットランド人が世界をリードするような多大な貢献をなした。さらに、このような学芸復興の波は、Walter Scott や Robert Burns, Allan Ramsey らの詩や文学作品をも育み、スコットランド人の心を全ヨーロッパないし全世界に印象づけることになった⁴²⁾。

また、このような文化的成熟を支えるかの如く、18世紀後半のスコットランドは、折からイギリスに自主的に発生した伝統的な農業社会から近代的な工業社会への急速な転換の過程、いわゆる「産業革命」(Industrial Revolution)が進展する中で⁴³⁾、「18世紀のイギリス産業革命は文字通りイングランドの

41) 「スコットランド啓蒙」は、1730年代にその開始期が求められ、1750年代～70年代の最盛期を経て、18世紀末から1810年代にかけてその解体期を迎えるといわれている(田中(敏) [1989], iii頁; cf. Mephram [1988b], p. 151)。

なお、「スコットランド啓蒙」に関しては、イギリス本国や他の欧米諸国では思想的アプローチとともに、社会史を中心としたきわめて多面的な研究が行われているが、わが国ではもっぱら経済学史ないし社会思想史研究、特に Adam Smith 研究を中核にすえた、経済学ないし経済思想の形成との関連について詳細な研究が行われてきている。かかる研究の系譜上にあって、しかも、最近の欧米の動向をふまえて深化・拡大させた新しい研究成果として、例えば、田中(正) [1988]; 田中(正)編著 [1988]; 田中(敏)編著 [1989] 等があるので参照されたい(Cf. 水田 [1968])。

42) Trevelyan [1961], pp. 418-419 (松浦・今井訳 [1983], 344頁); cf. Mephram [1988c] pp. 13-15.

43) 柴田 [1970], 5-6頁; cf. 大河内 [1977], 162頁; 村岡・川北編著 [1986], 55-56頁。

なお、イギリスの「産業革命」の詳細については、例えば、Ashton [1948] (中川訳 [1953]); Mantoux [1959] (徳増他訳 [1964]) 等を参照されたい。

産業革命ではなかった。……スコットランドの産業革命ともいうべきものであった」⁴⁴といわれるように、「工業化」(Industrialization)を機軸とした経済的・社会的変革運動の主体的担い手となった Joseph Black や James Keir, James Watt ら多数の科学者や技術者、あるいは、James McGuffog や James M'Connel, John Kennedy といった多くの産業資本家や企業家を輩出し、スコットランドのみならず、イギリス全体の経済的發展に重要な役割を果たしたのである⁴⁵。

このように、スコットランドが、イングランドと比べて経済發展で大きく立ち遅れた状況に置かれていたにもかかわらず、1707年の合併の後、特に18世紀後半に至って突然の輝きを放つようになった要因の一つには、経済的貧困の中にあっても教育には力を注ぎ、また、貧富の差にかかわりなく能力主義による教育機会を開くという、563年創設のケルト教会に附属する修道院での神学教育にはじまる、スコットランド特有の宗教的土壌に根ざした教育の歴史的伝統があった。しかも、そこには、かかる歴史的伝統に加えて、1560年の John Knox によるスコットランド宗教改革以後の実学教育の確立が融合的に反映されていたのであり、例えば、中世以来の古典教科の思弁的教育に限られ、実学的課題から離れたオクスフォードとケンブリッジのイングランド二大学に対して、科学的研究とその実際の応用を目指した実学中心のスコットランドの四つの大学、つまり、グラスゴウ、エディンバラ、アバディーン、セント・アンドリュースの各大学は、医学、自然科学、社会科学の分野で、その当時のヨーロッパの最

44) 天川 [1966], 188-189頁。

45) 天川 [1966], 188-191頁; cf. Ashton [1948], pp. 19-20 (中川訳 [1953], 20-22頁)。

46) 北 [1974], 51-58, 60頁; [1985], 4, 278-282, 284-286頁; cf. Ashton [1948], pp. 19-20 (中川訳 [1953], 20-21頁); Trevelyan [1961], pp. 365-366 (松浦・今井訳 [1983], 303頁); 天川 [1966], 190頁; 水田 [1968], 第3章; Sheldahl (ed.) [1989], pp. 94-97。

高水準に達しつつあった⁴⁶。

また、スコットランドの教育制度で特に注目されるのは、アカデミーと称される各種の専門学校 (academy) の存在である。イングランドでは非国教徒専門学校 (dissenting academy or dissenters' academy) として知られるアカデミーは、国教会に反発する非国教徒子弟のための私立専門学校であったが⁴⁷、スコットランドのアカデミーは、宗教次元では地域内での国教会の強制とこれに対する反発の関係は軽微で融合的な状況にあり、むしろ教育次元での自治都市のグラマー・スクール (grammar school) における古典的カリキュラムへの反発から、実学的な商業・科学に主題を置いて設立された。スコットランドにおける最初のアカデミーは、1761年創立のパーズ・アカデミー (Perth Academy) であり、そこでは、奇しくも18世紀のスコットランドないしイギリス全体を代表する優れた簿記書の著書であった John Mair と Robert

なお、19世紀後半に至るまでのスコットランドにおける教育制度の史的展開の概要については、例えば、北 [1974] ; [1985], 補論第1章等を参照されたい。

- 47) イングランドにおける非国教徒専門学校としてのアカデミーは、Charles II 時代の非国教徒弾圧政策のために学校から追放された非国教徒教師によって、非国教徒子弟のための私立の専門学校としてはじめられた。また、この種の非国教徒専門学校の授業科目は、国家や社会に有用であるべきとする功利主義的実学主義の観点から、自然科学、化学、物理、商業、簿記・会計、速記などが加えられ、その後の産業発展に対応できるような商工業向きの実際教育に向けられていた。まさに新興ブルジョワジーの教育要求に合致していたのである。それゆえに、従来からのグラマー・スクールが眠り、既存の大学が不毛の時代にあって、非国教徒専門学校は完全に活気があり活動的であったので、かかる非国教徒専門学校が成功を収め評判を得ると、次第に国教徒のブルジョワジーの子弟も入学するようになり、地域産業に対応しつつ多様なアカデミーが地方商工業都市に設立されたといわれる (北 [1974], 59頁 ; [1985], 285-286頁 ; cf. Ashton [1948], pp. 20-21 (中川訳 [1953], 22頁) ; Sheldahl (ed.) [1989], pp. 81-91)。

なお、18世紀末に至るまでのイングランドにおける教育制度の史的展開の詳細については、例えば、Sheldahl (ed.) [1989], Chap.1を参照されたい。

Hamilton が相次いで校長を務めていた⁴⁸。このような実学指向のアカデミーは、その後1830年までの間に16校が設立され、しかも、これらの学校は、スコットランドの教育組織体系の中で孤立することなく、従来のグラマー・スクールのカリキュラムにも自由主義・実学主義の影響を与え、ときにはグラマー・スクールを包摂したり、逆にグラマー・スクールがアカデミー的な高等学校に上昇・転化したりして、スコットランドの実学教育の興隆に貢献し、産業革命期に多数の科学者や技術者、実業家を産み出す「産室」の役割を果たしたのである⁴⁹。

48) 北 [1974], 55頁 ; [1985], 282頁 ; cf. Murray [1930], pp. 341-342.

1761年に創立されたバース・アカデミーは、既にエア・グラマー・スクール (Ayr Grammar School) の校長を務めていた John Mair を初代の校長として招聘している。Mair は、後の注86) で改めて言及するように、エア・グラマー・スクール在任中に、スコットランドにおける実学教育の必要性に対応した教育プログラムの抜本的改革に携わっており、また、同じく在任中の1736年には、伝統的なイタリア式貸借簿記のもっとも完全に精細な解説書として評価されている *Book-keeping Methodiz'd* を上梓している。この簿記書は、その後増改訂を加えられながら版を重ね、彼が死亡する直前の1768年には、徹底した改訂により、標題も新しく *Book-keeping Moderniz'd* と変更されたものが完成されていた (ただし、出版は彼が死亡した後の1773年に行われている)。また、Robert Hamilton は、1769年に Mair の死後空席になっていたバース・アカデミーの校長に任命されており、1777/1779 年には、複式簿記の解説を含んだ有名な商業書 *Introduction to Merchandise* を公刊している。彼は、その後、1779年にアバディーンのマリシャル・カレッジ (Marischal College) に移り、自然科学や数学の教授を務め、1813年には、これまた有名な国債に関する書物 *Inquiry concerning the Rise and Progress, the Redemption and Present State, and the Management of the National Debt* を出版している。なお、Mair と Hamilton の両者が最初期の校長を相次いで務めていたバース・アカデミーは今日においても存続している (Murray [1930], pp. 344-345 ; Mephram and Stone [1977], pp. 128-129 ; Bywater and Yamey [1982], pp. 164, 185 ; Mapham [1988c], pp. 68-77, 91-97)。

49) 北 [1974], 55-56, 75頁 ; [1985], 282頁 ; cf. Bywater and Yamey [1982], pp. 164, 185.

このような大学やアカデミー等の教育組織にみられるスコットランドの実学教育重視の伝統は、上記のように、イギリスの「産業革命」を主体的に担った有為の人材を輩出するのであるが、それはまた、簿記・会計の領域にあっては、アカデミーやグラマー・スクールその他の学校で利用される教科書としての簿記書に対する需要を喚起した。そして、かかる需要こそが、「スコットランド啓蒙」とほぼ時を同じくする18世紀に、「スコットランドの優越」(Scottish Ascendancy)⁵⁰と呼ばれるような現象、つまり、スコットランド人によって優れた内容の簿記書が相次いで出版されるという現象を生み出したのである⁵¹。

50) Yamey [1963a], p. 170 ; cf. 片岡訳 [1990], 581頁。

51) 「スコットランドの優越」といわれるように、18世紀のスコットランドで多くの優れた簿記書が出版された理由、逆にいえば、同じ「連合王国」を構成するもう一方の主要地域であり、しかも、経済的にも、簿記書の出版においても、先進地域であったイングランドで、この時期、なぜ優れた簿記書の輩出をあまりみなかったのかという当然の疑問については、必ずしも十分な答えは見出されない。しかしながら、例えば、Michael J. Mephams の見解によるならば、その当時にイングランドでも優れた簿記書は出版されているが、その代表例と考えられる Roger North (A Person of Honour) の *Gentleman Accomptant* (1714) や、James Dodson の *Accountant; or, the Method of Book-keeping* (1750) は、いずれも土地等の財産管理のための会計、いわゆる “Estate Accounting” に教示を集中しており、よく著述され興味ある簿記書ではあったが、II. 3. で取り上げる Mair の *Book-keeping Methodiz'd* ほどの人気を集めることはできなかった。なぜなら、簿記書もまた経済財であり、その出版も需要と供給により決まるとするならば、解説の対象が比較的狭い範囲にとどまる傾向にあった当時のイングランドの簿記書に比べて、土地等の財産管理にかかわる会計について言及することはあっても、もっぱら伝統的な商人の会計を中心に簿記を解説していたスコットランドの簿記書の方が、より広くアピールでき、より大きな市場にアクセスすることができたのであろうといわれる。しかも、18世紀当時の出版事情からみても、エディンバラの方がロンドンよりもコスト的に優位にあり、イギリスにおける出版の中心地になっていたことも、「スコットランド啓蒙」が社会を進歩させるための手段として出版物を重視し、あらゆる種類のアカデミックなテキストの出版を奨励していたことと合わせて、スコットランドにおける簿記書の出版を大いに促進したものと考えられている (Mephams [1988c], pp. 368-369, 512 (note (5)) ; cf. [1988b], pp. 164-165)。

なお、「スコットランド啓蒙」と、簿記・会計の領域、特に簿記書の側面に現れた「スコットランドの優越」との関連については、Mephams [1988c] (Cf. [1988b]) において詳細に分析・検討されているので参照されたい。

それゆえに、以下においては、I. 2., 3. で検討した James Peele や Richard Dafforne のような会計実務に従事した経験を有する人々ではなく、もっぱら各種の学校等において簿記の教育に携わっていた教師達によって著述された18世紀スコットランドの簿記書、特に Alexander Malcolm と、先に言及した Mair によって著された簿記書を中心に取り上げ、16~17世紀のイギリス（イングランド）の簿記書にはみられなかった大きな特徴、つまり、簿記教授法の側面における新たなアプローチの展開と、そこには見出される教示内容の近代化・体系化に向けての種々な試みについて考察してみようと思う。

II. 2. イタリア式貸借簿記の理論化と近代化

— マルコム簿記書を中心として —

スコットランドにおいてはじめて複式簿記を説いた簿記書は、1683年に公刊された Robert Colinson の *Idea Rationalia* である。イギリス、より正確に言えばイングランドにおける最初の複式簿記解説書が、I. 2. でも言及したように、Hugh Oldcastle の *Profitable Treatyce* (1543) であったことを考えれば、そこには約1世紀半近くの遅れがみられる。このことは当時のスコットランド経済の後進性を物語るものとも考えられるが、ただし、そのことが直ちにスコットランドへの複式簿記の伝播の遅れを反映しているとはいえないであろう。なぜなら、国境を接していた南の隣国イングランドとの経済的つながりは、当然に、スコットランドの商人達に、イングランド商人との取引を介して、あるいは、イングランドで出版された簿記の解説書を通じて、複式簿記に接する機会をもたらしただろう。また、北海をはさんだ対岸のオランダ（＝北ネーデルラント）との貿易もまた、スコットランド商人に複式簿記の知識を伝播する重要なルートであったように思われる⁵²。

52) Cf. Parker [1974], p. 358 ; Bywater and Yamey [1982], p. 131 ; Mephram

この Colinson の簿記書以降、前節で言及したようなスコットランドの社会的・経済的興隆とともに、スコットランドでは次第に複式簿記の解説書が出版されるようになる。とりわけ1718年には、Alexander MacGhie の *Principles of Book-keeping Explain'd*, John Drummond の *Accomptant's Pocket-Companion*, Robert Lundin の *Reason of Accompting by Debitor and Creditor*⁵³,そして、Malcolm の *New Treatise of Arithmetick and Book-keeping* が相次いで出版されている⁵⁴。これらの書物の中で、特に Malcolm の著書は、乖離しがちであった理論と実務との融和を図るとともに⁵⁵、簿記

[1988c], p.19.

18世紀初頭におけるスコットランドの貿易上のパートナーは、北ヨーロッパ、特にオランダであり、オランダとの強い経済的結びつきは、スコットランド商人の間でのイタリア式貸借簿記のより広汎な普及に貢献したといわれる。すなわち、オランダでの商業的トレーニングは、17世紀を通じてスコットランドにおける商業教育の主要形態であった本国での徒弟奉公的訓練 (apprenticeship) に次第に取って代わっていった。上述のように、スコットランド最初の複式簿記解説書を著した Colinson もまた、オランダに滞在し貿易に携わっていた商人であり、彼によれば、アムステルダムは、簿記が同地に伝えられて以来その優れた育成地になっており、この街には、年に400～500クラウンを簿記係に支払っている商人達や、簿記に関して著述している著者達がいるし、あらゆる人が自国の貿易の様式に合わせてこれを用いている。それゆえに、簿記は、すべての会計人 (Accomptants), 特に商人にとって、取引の大小にかかわらず、絶対的に必要なものであると述べて、簿記の重要性を、オランダの状況にかかわらせながら強調している (Mephram [1988c], pp.8-9, 19; Colinson [1683], p.1)。

なお、Colinson 簿記書の詳細については、小島 [1987], 第15章第1節を参照されたい (Cf. Parker [1974]; 小島 [1977]; Mephram [1988c], Chap. 7 (7. 2))。53) Colinson の簿記書以降、18世紀末までにスコットランドで出版された主要な簿記・会計関係の文献の個別的な概要については、Mephram [1988c], Chap. 7 を参照されたい。

なお、MacGhie 簿記書の詳細については、小島 [1979]; [1980a]; [1987], 第15章第2節の1 (Cf. Kojima [1980]; Mephram [1988c], Chap. 7 (7. 7)) 等を、また、Drummond と Lundin の簿記書の詳細については、小島 [1978]; [1987], 第15章第2節の1～3 (Cf. 小島 [1980b]; Mephram [1988c], Chap. 7 (7. 4, 7. 5)) 等を参照されたい。

54) Malcolm (1685~1763) は、エディンバラ大学を卒業した後、*New Treatise*……のタイトル頁に、エディンバラの算術と簿記の教師と記されていたように、同地で数学と簿記の教師を務めていた。また、1721年には、音楽に関する著書 *Treatise of Music* を著しており、これは、スコットランドで出版された音楽理論に関する最初の重要な書物として評価されている。その後、彼は、アバディーンに教師の職を得て、そこに移り、同地に居住している間に、*New System of Arithmetick, Theoretical and Practical* (1730) と、*Treatise of Book-Keeping* (1731) という、先の *New Treatise*……で取り上げた数学と簿記のそれぞれについて、独立して解説を加えた二冊の書物を著している。そして、彼は、これらの書物の出版後ほどなくして、当時のスコットランド人の多くと同様に北アメリカに渡り、教師や牧師を務めた後、独立革命がはじまる前の1763年に死亡している (Bywater and Yamey [1982], p. 157; Mephram [1988b], pp. 153-155; Mephram [1988c], p. 44)。

なお、Malcolm の伝記的叙述については、Mephram [1988c], Chap. 3 を参照されたい。また、彼の *New Treatise*……と、*Treatise of Book-Keeping* の概要については、小島 [1987], 第15章第3節の1 (Cf. Mephram [1988c], Chap. 7 (7.6, 7.10) を、特に後者の詳細については、渡邊 [1983], 第Ⅱ部第1章をそれぞれ参照されたい。

55) Cf. 小島 [1987], 335頁。

Malcolm は、*New Treatise*……の「読者への序文」(Preface to the Reader)において、同書の解説対象の一つである算術について、次のように述べている。すなわち、それは他のすべての科学 (Sciences) と同様に理論と実務を有しているが、それまでの数学書には、一方において、理論は数学の研究者向けに著述されたというようなまでに完全に説明されているにもかかわらず、その実例 (Demonstrations) はほとんどが代数関係か、あるいは、普通の用途にとっては余りにも簡単すぎて理解し難い方法によっているものがあり、他方において、素人向きに規則と例示 (Rules and Examples) の中に実務が示されているが、その根拠についての説明を欠いているものがある。このように指摘した後に、彼は、理論と実務の両方を兼ね備えた論文こそが必要であると主張する。この場合に、理論とは、数学を知らない人にも理解できるようなものであり、一般的な真理以外の原理を知らなくてもよいような、もっとも平易で簡単な実例を必要とする。論文それ自体も、科学の自然的秩序に従い、最初のもっとも簡単な事柄からはじめて、その目的に向けて一つ一つ積み重ねてゆくように理論を包含すべきものであると説く。また、規則の真の根拠を知ること、それ自体純粋な喜びであり、われわれの世界にとっても非常に価値のあることであるが、その便益は実務にとっても非常に大きい。単に実務だけの人間が彼自身の経験から逸脱すれば、どれだけ困惑し、規則の適用にも不確実になるかは容易にわかるであろうと説き、彼は、これらのことを考えて、当該論文を執筆し出版したと述べている (Malcolm [1718], Preface to the Reader)。

このような理論と実務との融合を強調する Malcolm の視点は、いうまでもなく、*New Treatise*……での簿記の解説にあたっても貫徹されている。その背景には、18世紀前半のスコットランドにあって、理論と実務との乖離が、簿記書の側面においては、理論的ないし教科書的簿記書と実践的簿記書という二つの流れの対立として現れていたことが考えられる。例えば、Malcolm の *New Treatise*……と同じ1718年に

の教示にあたっては、個別的な仕訳規則と取引例示の暗誦・暗記に依拠していた従来の教授法から脱却した、理論的ないし学究的接近を試みたものとして高く評価されている⁵⁶。それゆえに、以下、本節では、Malcolm の *New Treatise* ……を取り上げ、標題からも明らかなように、そこで展開されている算術と簿記についての解説のうち、当然のことながら、後者、殊にその教示の側面に見出される特徴に主たる焦点をあてながら分析することにした⁵⁷。

出版された、先に掲げた書物の著者達のうち、MacGhie と Lundin が、従来のイタリア式貸借簿記の枠内での理論的展開を図ったのに対して、実務家であった Drummond は日常取引の記帳・計算の便宜・工夫に重点を置いた実践的簿記を説き、そこには、学校の教師達による、従来の簿記法を中心とした、いわゆる理論的立場と、実務家による実践的立場とが混流していたのである。そして、簿記書をめぐるとこのような二つの流れの存在は、理論と実務との融合を図ろうとした Malcolm のような例が認められるものの、その後においても、一方でイタリア式貸借簿記の系譜上にある教科書的簿記書の典型と考えられる Mair の *Book-keeping Methodiz'd* (1736) や、その改訂版である *Book-keeping Moderniz'd* (1773) を生み出すとともに、他方で、これに対置される実践的簿記書の代表例とみられる Benjamin Booth の *Complete System of Book-keeping* (1789) の登場をもたらし、さらに、19世紀に入っては、これら二つの流れを総合・止揚しようと企図した Patrick Kelly の *Elements of Book-keeping* (1801) や Frederick W. Cronhelm の *Double Entry by Single* (1818) の出現へと展開してゆく。Booth や Cronhelm の簿記書については、Ⅲで改めて検討するので参照されたい(小島 [1987], 335頁; cf. [1987], 第15章第2節)。

56) Cf. 小島 [1987], 335頁; Mephram [1988c], pp.61, 110.

57) なお、Malcolm は、*New Treatise*……において、簿記を数学と併せて解説しているが、このようなことはその当時決して珍しい例ではなく、I. 3. で取り上げた Edward Hatton の *Merchant's Magazine* (1695) などにおいても、簿記を数学とともに解説するという形態が採られていた。このように、簿記は、教育上は、広い意味での数学の一部門として取り扱われてきており、このことは、複式簿記に関する世界最初の印刷教本、つまり、Luca Pacioli の簿記論が、彼の数学百科全書 *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* (1494) の中に包含されていたことから明かであろう。Paciolo にみられるような数学の教師が簿記についても教示する例は、その後も、市井の数学教師のみならず、高名な数学者である Gerolamo Cardano, Simon Stevin, さらに、Charles Hutton, Augustus de Morgan, Arthur Cayley などが簿記を単独の書物、あるいは、自己の数学書の一部を割く形で取り上げるといったことに見出され、この点を捉えて、Henry R. Hatfield は、簿記のもつ尊厳性を高く強調している (Hatfield [1924]; cf. Littleton [1933], Chap. 1 (片野訳 [1978], 第1章))。

Malcolm は、同書の「読書への序文」(Preface to the Reader)において、簿記に関しては既に多くの書物が存在しているが、同一の思想を表現したり、同一の教科に関する論文を構成するにはきわめて多様な方法があり、しかも、そのすべてが未だ利用し尽されたわけではないので、古くからある教科についても新しい書物の著書が十分にその正当性を主張できる余地は残されているとして、以下のような手順に従って簿記の解説を進めるという⁵⁸。

すなわち、彼は、まず最初に、構想と基本原理・原則 (Design and fundamental Principles and Rules) によって簿記の全般的見通しを与え、さらに、これらを個別規則 (particular Rules) を通じて応用し、できるだけ明確かつ適切な方法で説明するというのである。しかも、Malcolm によれば、簿記が依拠している基本原理はごく少数であり、難しいものではないが、しかし、大切なことは、これらを正しく説明し、かかる技法に関する主要な一般規則 (general Rules) を明確かつ明瞭な表現で示すことにかかっていると述べて、個別規則はこれら一般規則の応用以外の何ものでもないとする。そして、このような応用はきわめて多様に行われうるが、そこに一般規則がなお観察され

58) Malcolm [1718], Preface to the Reader.

Malcolm は、同じ「読者への序文」において、それまでに英語で印刷されているものにみた簿記の教示方法に完全には満足していないと述べるとともに、本文中にあって、Peele の *Pathwaye to Perfectnes* (1569) や、Dafforne の *Merchants Mirrour* (1635) にみられるような問答形式、つまり、設問とこれに対する解答を通じて複式簿記を教示しようとする手法に批判を加えている (Malcolm [1718], Preface to the Reader, p.127 ; cf. [1731], p.34)。

なお、Malcolm は、*New Treatise*……で取り上げた数学と簿記に関して、彼以前に現れた書物のうち、前者については、Hatton の *Merchant's Magazine* に一定の評価を与えているようであり、他方、後者については、Roger North (A Person of Honour) の執筆になると考えられている *Gentleman Accomptant* を評価しており、彼自身、この簿記書から大きな影響を受けたことが「読者への序文」からもうかがうことができる (Malcolm [1718], Preface to the Reader ; cf. [1731], pp.iii-iv ; Bywater and Yamey [1982], p.148)。

るとき、Malcolm は、一般規則を簿記の固定部分 (fixt Part)、その応用たる個別規則を不定部分 (arbitrary Part) と名づける。もちろん、ここで教示される簿記法のすべてが不定部分になるのではなく、真の簿記によって企図されるすべての有益な目的を満たすように勘定記入を行うもっとも簡明で規則的な方法が示されるとき、それがある意味で固定的部分になるとされる。そして、彼は、このような簿記の固定部分と不定部分との違いを学習者に認識させることが非常に重要であると説く。なぜなら、そうすることによって、学習者は固定部分にあたる少数の簡単な一般的概念と規則 (general Notions and Rules) の中に簿記の全体を捉えることになり、結果的に学習者の記憶に負担をかけるものは何もなくなくなるとして、彼は、もっぱら基本 (Foundation) を説明し明確なものとし、実務を記憶よりは判断の作業とするように規則や指示 (Rules and Directions) を与えることに努めたと述べて、学習者の記憶に依存し、個々の取引に関する個別的な仕訳規則と記帳例示の暗誦・暗記を主体としていた従来の簿記教授法からの離脱を明確に示しているのである⁵⁹⁾。

では、具体的に、彼の説く簿記の新しい教授法がどのように展開されるのか、本文に相当する「簿記の教示」(Instructions for Book-keeping) における解説を概観することにしよう。

Malcolm によれば、規則性と秩序性は理性の産物であり、それらが、合理的な世界を非合理的な世界から識別するとされる。そして、人間は、社会的動物 (Creature designed for Society) であり、社会は商業によって支えられている。正義 (Justice) は社会にとって不可欠の美德である。われわれの記憶に過度の信頼を置き、業務にかかわるあらゆる取引を書きとめなかったり、あるいは、それらを無秩序に混乱した方法で書きとめることは、あらゆる人間の権利を正しく識別できずに、過大もしくは過少に請求することになる。こ

59) Malcolm [1718], Preface to the Reader ; cf. [1718], Title Page.

に、取引を秩序立てて明瞭に記録すべき明白な必要性が存するのであり、これを行う方法を発明するために用いられた努力が簿記を産み出したと説く。すなわち、Malcolm によれば、簿記とは、如何なるときにでも、できるだけ容易に素早く、業務の特定の部分ないし全体に関する事実かつ公正な状態 (true and just State of any particular Part of his Affairs, or of the whole) を知ることができるように、正確で規則正しい秩序に従って、業務にかかわる取引を記録する技法であると定義される⁶⁰。

このように、Malcolm は、簿記の根源を商業ないし商人の会計 (Merchants Accompts) に求めるのであるが、簿記の目的もまた、上記の定義に関連づけて、商人の業務にかかわる公平かつ真実な状態を知ることにあるとされる。もっとも、ここで把握されるべき業務の状態とは、先の定義からも明らかなように、業務の特定部分の状態、つまり、彼によって商人会計の本質的課題と規定される人間 (Men)、商品 (Goods)、および、貨幣 (Money) の状態、より具体的にいえば、商人が取引しているすべての人々との債権・債務の状態、取引しているすべての種類の商品についての仕入時の数量や価値、売上の状態、さらに、貨幣については出納の状態等と、これら特定部分の状態を調査することから得られる全体としての業務の状態とに分けて考えられている⁶¹。

いずれにせよ、かかる簿記の目的を満たすためには、その第一歩として、商人の資産 (Effects or Estate) と負債 (Debts) に関して完全な財産目録

60) Malcolm [1718], pp.113-114 ; cf. Mephram [1988c], pp.165-166.

Malcolm の *New Treatise*……にみられる簿記の定義は、同書に含まれた簿記の解説部分を改訂して、単独の書物として出版された *Treatise of Book-Keeping* でも、ほとんどそのままの内容で受け継がれている。すなわち、そこにおいては、簿記とは、できるだけ明瞭で素早く、部分ないし全体に関する真実な状態 (true State of any Part, or of the Whole) を知ることができるようなやり方で、業務を勘定に記入する (つまり、取引を記録する) ための技法であると定義されている (Malcolm [1731], p. 1)。

61) Malcolm [1718], pp.115, 178 ; cf. [1731], pp. 2-3.

(Inventory)を作成し、その後、実務に生じたすべての取引について適切で十分に記録するように注意を払わなければならない。そのためには、当然にいくつかの記録簿 (Books of Record) が必要になるが、Malcolm は、そのうちの主要なものとして、ひとまずイタリア式貸借簿記 (=ヴェネツィア式簿記)の通例にならって、日記帳 (Waste-Book)、仕訳帳 (Journal or Day-Book)、元帳 (Leger) という三種類の帳簿を挙げている⁶²。

取引の記録にあたっては、まず、取引日、取引相手の名前、商品の名称や数量、価格、支払期限その他のすべてについて、日付の順序に伴い、きわめて簡単な様式で、事実に関する正確な叙述によって記録しなければならない。これらの叙述的記録を包含するのが、上掲した諸帳簿のうちの日記帳である。日記帳には商人の業務に生じたすべての事柄の記録が含まれているので、これらの記録から、商人の業務にかかわる状態を知ることは不可能ではない。しかしながら、日記帳には、同一日付の事柄をまとめて記録しているという以外には何の秩序も存在しない。したがって、もし日記帳から商人の業務にかかわる状態を知ろうとすれば、日付を手がかりに、日記帳の中に分散している各々の部分に関連した取引を拾い集めるしかない。このような不備を補い、簿記の目的に応えるために、Malcolm は、発生したすべての取引を日記帳から別の帳簿へ適宜転記して、業務の特定部分がすべて明確に一見できるように、同じ項目に属するものはすべてそれにふさわしい名称の下に整序しなければならないと説く。かかる転記先の帳簿、つまり、簿記の目的にとってもっとも重要な意味をもつ会計帳簿 (Book of Accompts) が、元帳と呼称される帳簿である。元帳の同一のフォリオに属する左右の頁は等しく一定のスペースに分割され、これらのスペースの一つずつが商人のあらゆる取引相手や取扱商品等に対して割り当てられるとともに、それぞれの名称が各スペースの頭部に記される。これが

62) Malcolm [1718], p. 115.

勘定 (Accompt) と呼ばれる形式であり、勘定を形成する左側の頁を借方 (Debtor)、右側の頁を貸方 (Creditor) と呼んでいる。彼は、かかる構造をもつ元帳にあらゆる取引を記入する方法にこそ、簿記の核心が存すると説いている⁶³。

他方、仕訳帳について、Malcolm は、それは異なった様式を採る日記帳にすぎないとする。すなわち、仕訳帳もあらゆる事柄を日付順に包含している点では同様であるが、日記帳が単なる叙述的記録にとどまるのに対して、仕訳帳はあらゆる事柄を借方と貸方とに分析することによって、元帳への準備をなす。つまり、仕訳帳の企図された用途は、当該帳簿上で借方と貸方とを識別し、そこから元帳に転記することにより、元帳への誤記入を防止することにあるとされる。したがって、それは、非常に有用ではあるが、絶対的に不可欠のものではないとして、日記帳——元帳の系列に対して、仕訳帳を補助的な関係に位置づけており⁶⁴、さらに、彼は、取引の貸借分析という本来仕訳帳に課せられた機能を日記帳に付加することによって、独立の帳簿としての仕訳帳を排除する方途についても示している⁶⁵。

63) Malcolm [1718], pp. 115-117.

元帳の勘定形式は、Malcolm の段階にあっても、なお、本文中でも述べたように、同一のフォリオに属する相対応した左右の頁を借方と貸方の記入スペースとして用いているが、これが、一つの頁のうちに借方と貸方とを対立させ、勘定科目名を両者の中央に表示させるという現代的な様式に移行するのは、注55)でも言及した Booth の簿記書を待たねばならないといわれる (小島 [1987], 376頁)。

なお、Malcolm は、「勘定」に相当する単語として、*New Treatise*……では、“accomp”を用いているが、*Treatise of Book-keeping* では、今日と同様な綴りに変更された“account”が用いられるようになっている。

64) Malcolm [1718], p. 126.

65) Malcolm もまた、従来の簿記書と同様に、教示の本文に続けて、各種帳簿の記帳例示を提示している。その第一組では、日記帳——仕訳帳——元帳からなる伝統的な三帳簿制に従っての記帳例示が示されているが、第二組では、これと対比させる形で、本来仕訳帳の課題となるべき取引の貸借分析、つまり、仕訳の記録を日記帳に包含した形態での、彼の説く日記帳——元帳からなる二帳簿制に拠る場合の例示を示している。そして、かかる二帳簿制への試みは *New Treatise*……の段階では、取引の貸借

このように、Malcolm は、帳簿組織において、イタリア式貸借簿記の伝統的な帳制、つまり、日記帳——仕訳帳——元帳からなる三帳簿制から、元帳を中心に、これと日記帳から構成される二帳簿制への実質的な移行を説いている⁶⁶。そして、このことは、教示の側面にあっても、従来みられた、仕訳帳を帳簿組織の機軸にすえ、当該帳簿での取引の貸借分析に教示の重点を置いたアプローチ、いわゆる仕訳帳アプローチから、元帳を教示の中心にすえた新しい手法、つまり、元帳アプローチ (ledger approach) への転換として示されている⁶⁷。では、従来の仕訳帳アプローチにおいて、仕訳規則と取引例示を通じてもっぱら個別的に教示されてきた取引の貸借分析と、これを通じての元帳勘定への貸借記入の方法について、彼は、新しいアプローチの下で、どのように教示するのであろうか。

分析の記録が日記帳本来の叙述的記録の下に続けて記載されていたものが、*Treatise of Book-keeping* では、日記帳の記入スペースを左右二欄に分割し、左側の欄に貸借分析の記録、右側の欄に叙述的記録を記入するということに、より一層工夫されるに至っている (Malcolm [1718], *Waste-Book N°. II (With the Journal subjoined—Waste and Journal-Books)*; cf. [1731], pp. 30-33; *Waste-Book N°. 2*)。

- 66) 二帳簿制への移行は、*Treatise of Book-keeping* では明確に示されており、ここでは、仕訳帳は元帳に従属するものにすぎず、主要な帳簿は日記帳と元帳に限られるということが明言されている (Malcolm [1731], p. 3)。

もっとも、古典的な三帳簿制 (単一仕訳帳制) からの離脱といっても、Malcolm の場合には、Ⅲ. 1. で取り上げる Booth 簿記書にみられるような、多数の補助簿を日記帳として用いる分割日記帳制 (特殊仕訳帳制) の展開という段階には未だ到達していない。

- 67) 注13)でも言及したように、簿記教授法の発展は、Littleton によれば、仕訳帳アプローチ→元帳アプローチ→貸借対照表アプローチへの変遷として把握される。このうち、元帳アプローチは、19世紀半ば頃から、従来の仕訳帳アプローチに代わって本格的に展開されるようになるといわれるが、その嚆矢は、既に18世紀はじめのスコットランドの簿記書、例えば、ここで取り上げている Malcolm の *New Treatise*……や *Treatise of Book-keeping*,あるいは、Lundin の *Reason of Accompting*……に見出される (Littleton [1931], pp. 33-34; [1961], pp. 567-568; cf. Jackson [1956], pp. 303-306; Mephram [1988c], pp. 108, 112, 121, 184-185)。

Malcolm は、借方 (Debtor) と貸方 (Creditor) という語句について、これらは相関連した用語であり、一方の存在は常に他方を想起させる。つまり、貸方を伴わない借方、借方を伴わない貸方は存しないと説く。そして、かかる語句の一般的意味に関して、彼は、擬人的受渡説に拠っていた従来の説明方法を採らず、借方と貸方という語句は、厳密に言えば、単なる様式 (Stile) 以外の何ものでもないことを明言したうえで、次のように説明する。すなわち、これらの語句はごく一般的な用語であり、それが人間に適用されるときには、誰もがその意味するところを理解できる。しかし、商品や現金といった人間以外のものに適用されるときには説明を要するという⁶⁸。

彼によれば、商人の元帳に見出される債権と債務のすべては、元帳の所有者たる商人に対して借りているものないし所有者によって支払われるものと解される。しかし、商人の元帳には彼の名前や商号を示す場所はないので、債権・債務は彼の取引相手の人間の勘定の上で示されることになる。また、ある人間が商人の債権者または債務者となるときには、かかる債権または債務の真の根拠や基礎 (Ground and Foundation) が存するはずである。あらゆる事柄は元帳に場所を設けて、それに関連した勘定に記録しなければならないので、このような債権・債務の根拠となるものについても勘定を設けることによって、かかる勘定が商人ないし所有者の役割を演じることになり、貸方を伴わない借方、あるいは、借方を伴わない貸方という不条理を避けることができるとする⁶⁹。

68) Malcolm [1718], p. 118.

Malcolm は、*Treatise of Book-keeping* においても、借方と貸方は、厳密かつ本来的な意味では人名勘定に対してのみ適用できる用語であり、実在勘定（ここでは物財勘定の意味——注72）を参照のこと）に対しては、人名勘定から借用し、擬制的かつ非本来的な意味で適用されるにすぎないと述べるとともに、このような借方・貸方の適用、殊に実在勘定へのそれは、この簿記法の恣意的で擬制的な部分であるとも述べている (Malcolm [1718], pp. 12-13)。

69) Malcolm [1718], p. 118-119.

例えば、私がA. B. からブドウ酒を3か月後払いの掛けで購入したと仮定する。当然のことながら、私はA. B. に支払わなければならない、つまり、A. B. は私に対して債権者（＝貸主）となり、私の元帳に設けられたA. B. 勘定に貸方記入される。他方、かかるA. B. の債権、換言すれば、私の債務の根拠を示すために、元帳にブドウ酒勘定を設ける。このとき、私はA. B. に対して債務者となるが、私はブドウ酒に対して支払っている、つまり、ブドウ酒は私に対して借りていることになり、ブドウ酒勘定には借方記入される。すなわち、ブドウ酒勘定はA. B. に対して借方、あるいは、A. B. はブドウ酒勘定に対して貸方になると説明されるのである⁷⁰。

さらに、Malcolm は、物々交換のような真の債権・債務が存しないような場合でも、借方・貸方という語句は、様式の統一性を維持するために用いられると説く。すなわち、簿記にあっては、借方・貸方の用語は、人間に限定されることなく、債権・債務の根拠となるあらゆる実在物（real Thing）にも適用される。これによって、帳簿全体を通じての統一性ととも、勘定相互間の明瞭な照合関係が存することになる。かかる勘定の連続的な関連と相互依存とが貸借平均をもたらし、帳簿全体を通じて借方合計と貸方合計とを如何なるときにも一致させ、記録の真実性や正当性を確かめるよい方法、つまり、今日的に言うならば、試算表的な検証方法を提供すると説いている⁷¹。

70) Malcolm [1718], p. 119.

71) Malcolm [1718], pp. 119-120 ; cf. 小島 [1987], 338頁。

ただし、Malcolm は、「試算表」、つまり、“Trial Balance” という用語は用いていない。しかしながら、彼はまた、帳簿の締切にあたって、借方と貸方の本質から、元帳はそれ自体に諸勘定の永続的な貸借平均（perpetual Balance of Accompts）を有していると説き、すべての勘定の借方と貸方とをそれぞれ合計すれば、借方全体の合計額は貸方のそれに等しくなるとして、かかる「試算」（Trial）を元帳について行うべきことを説いている（Malcolm [1718], p. 181 ; cf. [1731], p. 78）。

なお、試算表の生成過程に関する史的分析については、渡邊 [1983], 第I部第5章を参照されたい。

このように、Malcolm は、仕訳規則と取引の例示に拠っていた従来の教授法に対して、借方と貸方に関する一般規則に基づき、取引の貸借仕訳を理論的に取り扱い、元帳全体の統一性を維持しようとするのである。そして、彼はこのような貸借記入の原則に従って記入が行われる元帳勘定を、(1)人間の勘定 (Mens-Accompts), つまり、人名勘定 (Personal Accompts) と、(2)商品や現金にかかわる实在勘定 (Real Accompts) とに大きく分類する⁷²。

しかしながら、彼はまた、これら二つの勘定群に加えて、第三の勘定群として、仮想勘定 (Imaginary Accompts) を付け加える。すなわち、Malcolm によれば、先に述べたように、取引されたすべての事柄は借方・貸方の様式に従って記録されなければならないが、実際に受渡しがないか、ある人間に絶対的債務を生じないというような、つまり、一方において人名勘定や实在勘定に借方記入ないし貸方記入されるにもかかわらず、他方でこれに符合する貸方ないし借方の勘定が存しない場合が起こりうる。貸方を伴わない借方、あるいは、借方を伴わない貸方は複式簿記の基本原則にそぐわないものであることは明白であり、Malcolm は、商人の業務の全体的状態に変化を生じさせる取引はすべて正しく記録しなければ、簿記の構想に應えることはできないと説き、かかる理由のゆえに設けられる勘定、つまり、人名勘定や实在勘定の相手方勘定の欠如を補うものとして、仮想勘定、具体的には、航海勘定や損益勘定などを示している⁷³。

72) Malcolm [1718], p.121 ; cf. [1731], pp.7-12.

Malcolm の *New Treatise*……, あるいは、後述する Mair の *Book-keeping Methodiz'd* などにおいて「实在勘定」と記されている場合には、物財勘定のみに相当するもの、つまり、狭義の意味で用いられている。ただし、彼らからやや遅れて1800年に *British-Indian Book-keeping* を著した John Williamson Fulton は、今日と同様な意味で、つまり、「实在勘定」を人名勘定をも包含した広義の用法で使用しており、簿記書において、同じ「实在勘定」という用語が用いられていても、著者により、時代によって、その意味する範囲が異なるので注意されたい (Cf. Fulton [1800], p.11)。

73) Malcolm [1718], pp.121-122 ; cf. 1731, pp.18-19.

例えば、損益勘定の役割についてみれば、私がある人間に対して£20の債務を負っているとき、現金£18の支払によって当該債務を完済できたとする。このとき、債権者の人名勘定は£20につき借方記入されるとともに、現金勘定には£18について貸方記入されるが、私が割引を受けた£2についても何らかの勘定に貸方記入される必要がある。彼は、かかる場合に、仮想勘定である損益勘定 (Accompt of Profit and Loss) に貸方記入されると説くのである⁷⁴。

このように、Malcolm は、従来は取引の貸借分析の解説にあたって個別的にしか取り扱われてこなかった元帳勘定について、これを、上記のように、人名勘定、実在勘定 (物財勘定)、さらに、仮想勘定 (名目勘定) という三つの勘定群に大別・整理することによって、三勘定分類の構想を明確に提示しているのであり、かかる元帳勘定三分類の体系は、爾後のイギリスの簿記書にも大きな影響を及ぼし、18世紀から19世紀はじめにかけてかなり一般的に教示されることになる⁷⁵。

74) Malcolm [1718], p. 122

75) 元帳勘定を三分類するという構想は、Malcolm の簿記書よりも早く、フランスの Matthieu de la Porte の *La science des negocians et teneurs de livres* (1704) に見出されるといわれ、de la Portet は、その中で、勘定を、企業主勘定 (資本や損益の勘定)、物の勘定、人の勘定に分類していた。かかる勘定三分類の教示は、イギリスの簿記書では、Malcolm の *New Treatise*……と同じ1718年に出版された、MacGhie の *Principles of Book-keeping Explain'd* にも見出され、彼は、元帳勘定を、人名勘定 (Personal Accompts), 実在勘定 (Real Accompts), 擬制ないし名目勘定 (Fictitious or Nominal Accompts) に分類するとともに、擬制勘定を、他の人名勘定や実在勘定の相手方となる借方ないし貸方の欠如を補うために考案されたものと説明している。そして、このような人名勘定・実在勘定・名目勘定という勘定三分類の教示は、次節で検討するように、19世紀初頭に Cronhelm などによる資本主義理論的観点からの批判が提起されるにもかかわらず、18世紀から19世紀はじめにかけて一般的なものとなり、その影響は、例えば、James Bennett の *American System of Practical Book-keeping* (1820) のような初期のアメリカ簿記書にも認めることができる (Yamey [1974], pp. 156-157 ; cf. 岸 [1975], 324頁; MacGhie [1718], p. 9 ; Bennett [1820], pp. ix-xi)。

なお、de la Porte の *La science*……の詳細については、岸 [1975], 第17章を参照されたい。

次に、Malcolm は、日記帳——元帳への記入方法に移って行く。日記帳は商人の資産と負債に関する財産目録からはじめられるが、彼は、これらの項目を元帳に記入する際の相手方勘定として、つまり、先の仮想勘定の一種として、資本勘定 (Accompt of Stock) を位置づけている。すなわち、元帳には、商人や所有主の名前を明示的に付された勘定は存せず、これは資本勘定によって提供されると説くのである。すなわち、資本勘定は根基 (Root) とみなされ、かかる勘定から帳簿上の他のすべての勘定が派生する。取引の過程を通じて、増加、減少、均衡の状態が生じるが、これらはもちろん資本の状態の変化、つまり、価値の増加ないし減少、あるいは、価値は不変のままでの単なる構成要素の変化をもたらすが、これらを適切に記録するために、つまり、資本勘定における記帳上の混乱を避けるために、彼は、別個に損益勘定を用いるのが便宜で適当であるとして、損益勘定を資本勘定の明細勘定として位置づける見解を提示している⁷⁶。

Malcolm はまた、勘定処理の総括化への動きを示している。例えば、手形取引について、元帳に相手方の勘定がない場合、あるいは、小口の取引先の場合には、個別に勘定を設けずに、一般的名称を付された受取手形勘定 (Accompt of Bills payable to me) ないし支払手形勘定 (Accompt of Bills payable by me) の設定を説いたりしている⁷⁷。

76) Malcolm [1718], p. 132 ; cf. [1731], pp. 37-38.

Hamilton もまた、*Introduction to Merchandise* において、元帳勘定を、人名勘定 (Personal Accompts) と実在勘定 (Real Accompts) という二つの勘定群に大きく分類するとともに、さらに、第三の勘定群として、資本勘定、損益勘定、および、利息勘定や手数料勘定などの補助的勘定からなる擬制勘定 (Fictitious Accompts) を挙げている。このような彼の教示からも、資本勘定が擬制勘定 (名目勘定) に分類され、かつ、損益の勘定がその明細勘定として位置づけられている関係が明らかにされている (Hamilton [1788], pp. 267-268)。

77) Malcolm [1718], p. 138 ; cf. [1731], pp. 41-42.

特に商品勘定については、既に Malcolm 以前においても、例えば、Peele や Dafforne の簿記書などに、副次的な取扱商品について「諸商品勘定」の利用を説くケースがみられるが⁷⁸、彼は、これをさらに一步進めて、主要な取扱商品についても、各種の商品をまとめて総括的に処理する方法を教示している。例えば、従来、多くの特定商品勘定で処理されていたブドウ酒について、その種類に応じた金額を示す内訳欄を設けることによって、ただ一つのブドウ酒勘定で、あるいは、赤ブドウ酒勘定と白ブドウ酒勘定の二つの勘定で処理するという、主要な取扱商品に対する総括的勘定処理の方途を示しているのである⁷⁹。このような Malcolm の教示は、今日の簿記教科書にみられるような、すべての商品をただ一つの勘定で処理するという「一般商品勘定」の段階には未だ到達していないが、業務の部分的ないし全体的状態をできるだけ容易に素

78) I. 2. で言及した Peele の *Pathway to Perfecthes* (1569)、あるいは、この Peele の簿記書に先行して出版された John Weddington の *Brefe Instruction* (1567) においては、原則として商品名が付された特定商品勘定が用いられていたが、一部の雑商品については、「諸商品勘定」(Marchaundies of diuers sortes, or Marchandize of dyuers sortis accompt) に混記されており、Dafforne の *Merchants Mirrour* (1635) では、少量扱いの諸商品に関して、それらの性質にふさわしい勘定の下で一括して処理すべき旨の教示が行われており、副次的な取扱商品に対する総括的勘定処理の試みが見出される (Weddington [1567], *The Great Boke or lidger A*, fol. 6, 16, 19, 24 ; Peele [1569], *The Journall or daylie Booke A*, examples 93, 96 ; *The Leager or Greate Booke A*, fol. 43, 44 ; Dafforne [1635], *An Introduction to Merchants Accompts*, pp. 11, 21 ; cf. 茂木 [1969], 第3章 ; 小島 [1973] ; 渡邊 [1983], 第4章)。

79) Malcolm [1718], pp. 138-139.

Malcolm は、主要商品に対する勘定処理総括化に関して、*New Treatise*……の段階では、本文や元帳の記帳例示において具体的な事例を示すには至っていないが、*Treatise of Book-keeping* の段階では、このような総括的商品勘定を「概括勘定」(General Accounts) と称するとともに、本文中では、赤・白の別と、フランスとスペインとの産地別に内訳の金額欄を設けた「概括勘定」としてのブドウ酒勘定の例を示し、元帳の記帳例示でも、白とクラレット(赤)の別に内訳金額欄を設けたブドウ酒勘定を掲げている (Malcolm [1731], pp. 44-45 ; *Leger-Book N° 1*, fol. 2 ; *Leger-Book N° 2*, fol. 2)。

早く把握できるように、主要取扱商品に限ってではあるが、総括的勘定処理を図ることによって、記帳の明瞭さと迅速さをもたらそうとする実践的配慮に裏づけられていたものと考えられる⁸⁰。

彼はまた、このような商人の業務に関する真実な状態を知るという簿記の目的に関連して、これを、既述のように、特定の勘定から把握される部分的な業務の状態と、全体としての業務の状態とに分けて考察しているが、後者の全体的状態も各勘定の状態を調査することによってのみ把握できるとして、業務にかかわる記録を包含する元帳諸勘定の締切について論及している。彼によれば、元帳に含まれたすべての勘定を締め切り、貸借平均することが、商人の全体としての業務の真実な状態を知ることになり、それは結局のところ資産と負債に関する財産目録を作成することにあるという。すなわち、資産と負債にかかわる諸勘定の現在の状態を調査し、これらの残高から新しい財産目録を作成するが、このとき、損益を生じている勘定については、これを損益勘定に集合する必要があると説く。例えば、先の商品勘定の締切に際しては、当該勘定の商品のすべてが未販売の場合、逆に、すべての商品が販売済みの場合、そして、一部の商品のみが販売されている場合に分け、特に最後のケースについては、損益を把握する上での重要な構成要素である売れ残り部分の価値 (Value of the remaining Part) の計算、つまり、評価の問題に関して、これに要する労力を避けるために、各種商品の「最初原価」(first Cost) を考慮すべきこと

80) Cf. Malcolm [1731], p. 44.

ただし、Malcolm は、商人の業務の状態は、帳簿上に、明瞭さと迅速さ (Clearness and Readiness) をもって現れるべきであるが、あまりに概括的な勘定は、あまりに多くの詳細な勘定を設けるのと同様に、これらに反するとして、取引の状況に応じた各種商品に対する適度な総括的処理を求めている (Malcolm [1731], p. 44)。

なお、MacGhie も、仕訳帳における作業や元帳上の勘定の数を減らすという、記帳業務簡略化の観点から、例えば、大麦やからす麦、小麦などについて、穀物という一般的名称を付された勘定で総括的に処理するといった、Malcolm にみられるのと同様な、商品勘定の種類別総括化の方途を示している (MacGhie [1718], p. 13)。

を教示している⁸¹。そして、全勘定を通じての正味の利益ないし損失が、彼

81) Malcolm [1718], pp. 182-184.

おそらく16~18世紀のイギリスの簿記書にあっては、Hamiltonのように、在庫商品について、その価格の上下に即応して損益を計上するという観点から、原価 (prime cost) よりも時価 (current prices) による評価の方が適当であるとする見解も見受けられるが、大多数は、Malcolm や、後述の Mair のように、原価に基礎を置く評価を教示することにより、在庫商品の評価にかかわる問題を解決していたように思われる。特に Malcolm は、*Treatise of Book-keeping* において、在庫商品に関して、原価で評価してもよいが、時価 (current Rates) で評価してもよいと述べる一方で、ただし、時価で評価することは、未だ商品を売却していないので、実際に生じるかどうかかわからない利益ないし損失を勘定に持ち込むことになるとして、原価で評価の方が合理的であるように思われると説き、今日でいう取得原価—収益実現アプローチ (historical cost—revenue realization approach) に拠った形での原価評価について明確に言及しているのである (Malcolm [1731], p. 89 ; Hamilton [1788], p. 285 ; cf. Winjum [1972], p. 75 ; Yamey [1977], pp. 23-24 ; Edwards (J) [1989], p. 86)。

なお、建物や船舶といった固定資産についても、Malcolm は、*New Treatise*……では、該当する勘定の借方側にこの種の資産の価値 (原価) と修繕費・公課その他の費用を記入し、貸方側には賃貸料や運賃等の収益を記入するとともに、もし売却したときにはその価値を貸方記入すべしとする処理方法を教示しているが、*Treatise of Book-keeping* では、これを、さらに展開して、三つの方法に分けて詳述している。すなわち、(1) 勘定の締切時には、該当の固定資産は原価のままで繰り越し、損益勘定には、当該勘定に借方記入された修繕費等の費用と、貸方記入された賃貸料や運賃等の収益の差額のみが振り替えられる方法、(2) 借方側に記入された資産の原価や費用と、貸方側に記入された収益との算術的な貸借差額が、勘定締切時に、新しい勘定に繰り越されてゆく (したがって、損益勘定への損益の振替は行われない) 方法、(3) 実際に値打ちがあると思われる価値で資産を再評価し、再評価に伴う損益は、他の費用や収益と併せて、損益勘定に振り替えられる方法である。Malcolm 自身は、これらの方法のうち、(1) の方法がベストであると述べているが、その当時の会計実務の中では、これらの方法のいずれも見出されるといわれる。すなわち、そこにあつては、何ら標準的とみなされる方法は存在せず、同一の元帳の中でも、種類を異にする資産には異なった方法が適用され、同一の資産についてでさえ、異なった締切の時点で異なった方法が適用されることがあったといわれるのである (Malcolm [1718], pp. 147-148, 185 ; Leger N°. 1, fol. 14 ; Leger N°. 2, fol. 3 ; [1731], p. 90 ; Leger-Book N°. 1, fol. 14, 15 ; Leger N°. 2, fol. 3 ; cf. Yamey, Edey and Thomson [1963], p. 110 (footnote 59) ; Yamey [1960], pp. 5-6 ; [1963b], pp. 197-199 ; [1977], p. 23 ; Edwards (J) [1989], pp. 81-85)。

がすべての勘定の根拠と規定する資本勘定の増加ないし減少と一致するとき、すべての勘定が正しく記帳されていたことが証明されるとして、財産計算を損益計算の側面から確証づける方策を提示しているのである⁸²。

なお、Malcolm は、商人が彼の資本の状態を知ろうと望むときにはしばしば元帳を締め切ることができるというのが、同時にまた、商人は一般に一年に一度これを行っているとも述べており、かつてのイタリア式貸借簿記（＝ヴェネツィア式簿記）で説かれていたような不規則的な帳簿の締切から、一年に一度という年次締切への移行が、その当時の会計実務においてほぼ定着しかかりつつあったことが示唆されている⁸³。

このように、Malcolm は、理論と実務との融合を唱え、従来の仕訳規則と記帳例示の機械的な暗誦・暗記主体の教示方法から脱却し、より理論的な教

82) Malcolm [1718], p. 182 ; [1731], p. 82 ; cf. 小島 [1987], 344頁。

Malcolm は、具体的な勘定処理の上では、元帳全体の完全かつ組織的な締切のためには、実質的に新しい財産目録を包含する残高勘定 (Accompt of Ballance) の残高と、損益勘定の残高とを、資本勘定に振り替え、かかる資本勘定の借方合計額と貸方合計額とが一致すれば、もっとも適切な確証が得られると述べている。ただし、彼は、残高勘定や損益勘定上の諸残高を別の紙葉 (separate Paper) の上で集計し、試算 (Trial) して、そのすべてが正しいということを確認した後でなければ、元帳の諸勘定に記入すべきではないとも述べており、残高勘定と損益勘定という集合勘定とは別に、検証目的のための計算表の作成を説いている (Malcolm [1718], pp. 193-194 ; [1731], p. 87 ; cf. 渡邊 [1983], 109-110, 140頁 ; 小島 [1987], 345頁)。

なお、Malcolm の簿記書において、このような検証目的をもった計算表の作成が特に教示されていた背景には、帳簿の締切時に、人名勘定や実在勘定から残高勘定への振替が、仕訳帳を経由することなく、勘定間で直接的に行われていたという事情が存するように思われる (Cf. 久野 (秀) [1979b], 71-72頁)。

83) Malcolm [1718], p. 178.

MacGhie も、*Principles of Book-keeping Explain'd* において、商人は、新しい財産目録を作成し、新しい帳簿をはじめるために、望むときにいつでも元帳を締め切ってよいと述べる一方で、ある人達は帳簿を一年あるいは半年毎の定められたときにこれを行っているとも述べている (MacGhie [1718], p. 52)。

なお、Malcolm は、本文中でも明らかにしたように、*New Treatise*……では、一年に一度という元帳の年次締切について言及しているが、*Treatise of Book-keeping* では、帳簿の年次締切に関する言及は行われていない。

示、つまり、簿記の基本たる貸借記入の一般規則から解き明かすことにより、論理的に教示を進めてゆこうとしたのである。このとき、彼の教示の中心になったのは、かつての簿記書にみられるような仕訳帳ではなく、簿記の目的である商人の業務の部分ないし全体を知らしめるという機能を担う元帳であったのであり、彼は、この点において、Luca Pacioli の簿記論（1494）に代表されるイタリア式貸借簿記（＝ヴェネツィア式簿記）の伝統の一つであった日記帳——仕訳帳——元帳からなる三帳簿制から離脱し、仕訳帳を主要簿の系列から排除した、日記帳——元帳から構成される二帳簿制への実質的な移行を示しているのである。そして、彼は、かかる二帳簿制の下で展開される新しい教授上のアプローチ、つまり、元帳アプローチの機軸となるべき帳簿である元帳に収容される諸勘定を、人名勘定・実在勘定・仮想勘定という三つの勘定群に分類するとともに、資本勘定を、商人の資産や負債を表す人名勘定ないし実在勘定の相手方勘定、換言すれば、これら二つの勘定群に相対する仮想勘定の一種として位置づけている。しかも、彼は、この資本勘定を他の諸勘定の根基、つまり、帳簿上のあらゆる勘定は資本勘定から派生するとして、損益の勘定も、資本勘定に従属する明細勘定として位置づけている。このような Malcolm の説く教示内容は、彼の *New Treatise*……の出版から丁度100年が経過した1818年に登場する Frederick W. Cronhelm の簿記書 *Double Entry by Single* で展開される資本主理論的簿記論の萌芽ないし原型とも考えられるのである。

かかる理論化・近代化の傾向は、既にみてきたように、Malcolm の他の教示の側面にも見出される。すなわち、上記の三帳簿制と並んで、ヴェネツィア式簿記の古典的特徴として指摘される特定商品勘定形態での商品勘定の利用や、不規則的な帳簿の締切という点に関しても、彼は、主要取扱商品に対する総括的勘定処理の試みや、帳簿の年次締切の教示といった点において、従来の簿記書から一歩進んだ内容を示しており、それゆえに、彼は、その当時における

「理論的先覚者」⁸⁴という評価を与えられている。ただし、反面において、彼の教示は、簿記処理上における実践的改良への意図を包含しながらも、おそらくはその教示の基本において理論的であろうとしたがゆえに、仕訳規則や記帳例示の機械的暗誦・暗記を主たる教示内容とした従来からの教科書に慣れた当時の読者にとってかなり難解なものであったのではなかろうかと想像される。したがって、上記のような積極的評価とは別に、彼のことを“Philo Dogmaticus”⁸⁵と名づけるような評価もまた下されているのである。いずれにせよ、Malcolm によって企図されたイタリア式貸借簿記の近代化と理論化への試みは、彼に続く Mair によって、従来からの簿記教授上の一般的手法であった仕訳帳アプローチと総合され、ここに伝統的なイタリア式貸借簿記の系譜上にある教科書としての体系化が一応完成されることになるが、この点については、次節に検討を委ねようと思う。

II. 3. イタリア式貸借簿記の標準的教科書の出現

—メイア簿記書を中心として—

Malcolm の *New Treatise of Arithmetick and Book-keeping* の出版からほぼ20年が経過した1736年に、刊行の当初から19世紀初頭にかけて、イギリスの国内・国外を問わず、広く読者を獲得した複式簿記の有名な解説書が現れた。すなわち、Mair の *Book-keeping Methodiz'd* である。この簿記書は、初版の出版以来、好評を博して、しばしば増補・改訂が繰り返され、1773年に

84) 小島 [1987], 335頁。

85) Mephram [1988b], p. 153 ; [1988c], pp. 61, 451 (note (1)) .

残念ながら、Malcolm の簿記書は、その優れた内容にもかかわらず、次節で取り上げる Mair の簿記書のように版を重ねることがなく、イングランド・ウェールズ勅許会計士協会の文献目録 *Historical Accounting Literature* によれば、*New Treatise*……は初版のみ、また、*Treatise of Book-keeping* も、1743年に第二版が出版されたとどまっている (Institute of Chartered Accountants in England and Wales [1975], pp. 78, 79, 316)。

は標題も *Book-keeping Moderniz'd* と改められ、両書合わせておよそ70年の長きにわたって多くの版を重ねている⁸⁶。この Mair の簿記書は、著者自身

86) Mair (1702/1703~1769) は、セント・アンドリュース大学を卒業した後、エア・グラマー・スクールに勤め、数学や簿記その他の教科を担当しながら、1746年には校長に任命され、スコットランドにおける実学教育の必要性に対応した、同校の一種のアカデミー化を図った教育プログラムの抜本的な改革に携わっている。その後、彼は、注48)でも言及したように、1761年に新設されたバース・アカデミーに校長として招聘され、在職のまま1769年に死亡している。彼は、長年にわたる教師としての生活の中で、数学や簿記、ラテン語、歴史などにかかわる多数の著作を著しているが、特に1736年に公刊された *Book-keeping Methodiz'd* は、イギリス本国の読者に好評をもって受け入れられ、第三版(1749)では、イングランドとの合併後、スコットランド商業資本、特にグラスゴウの商業資本にとって対アメリカ植民地貿易の活路を見出す起点になった「タバコ植民地」と称されていたヴァージニアやメリーランドとのタバコ貿易に関連した“The produce and commerce of the Tobacco Colonies;…”と題された章を補論に加え、さらに、第五版(1757)では、西インド諸島との砂糖貿易に関連した“The produce and commerce of the Sugar Colonies;……”を補論に付け加えるなど、増改訂を繰り返しながら、1765年には第八版が出版されている。さらに、彼は、これに徹底した改訂・増補を施し、標題も *Book-keeping Moderniz'd* と改めたものを1768年に完成していた。この簿記書が公刊されたのは、残念ながら、彼が死亡した後の1773年になってからのことであるが、これもまた好評を博して、死後40年近くが経過した1807年に第九版が出版されている。また、Mair の簿記書は、イギリス国外でも多数の読者を獲得しており、*Book-keeping Methodiz'd* は、初版が出版された翌年の1737年にはアイルランドのダブリンで刊行され、同地でも版を重ねている。また、1775年には *Book-keeping Methodiz'd* の第六版(1760)をベースにノルウェー語訳が出版されており、これはノルウェー語で印刷された最初の簿記書となっている。他方、北アメリカでは、アイルランドにみられたような Mair 簿記書そのものの現地出版は行われていないが、それは18世紀後半に同地で入手できるもっとも広く読まれた簿記書であったのであり、*Book-keeping Moderniz'd* は、奴隷主的プランターでもあった George Washington が彼の蔵書の中でもっとも熟読した書物の一つであったといわれる (Mephram and Stone [1977], pp.128-134; Bywater and Yamey [1982], p.164; Mephram [1988c], pp.68-75, 78-79, 129; cf. Institute of Chartered Accountants in England and Wales [1975], pp.138-141, 144-145, 316; Chandler [1977], p.521 (note (57)) (鳥羽・小林訳 [1979], 88頁(注57)); Previts and Merino [1979], pp.11-12, 18-19 (大野他訳 [1983], 13-14, 20-21頁); Mephram [1988c], Chaps.12・13)。

なお、Mair の伝記的叙述については、Mephram [1988c], Chap. 4を参照されたい。

また、彼の *Book-keeping Methodiz'd* と *Book-keeping Moderniz'd* の詳細については、渡邊 [1983], 第Ⅱ部第2章・第4章を参照されたい (Cf. 小島 [1987], 第15章第3節の2; Mephram [1988c], Chap. 7 (7.13, 7.20))。

が、“The Elaborate Mair”⁸⁷と称されていることからもうかがえるように、きわめて詳細かつ完全な解説を特徴としており、前節で検討した Malcolm の影響を受けながらも、従来の教授法も併せて取り入れ、中庸を得た、いわばその当時の簿記教科書の標準版ないし決定版ともいべきものであった⁸⁸。以下、この Mair の簿記書、殊に *Book-keeping Methodiz'd* に焦点をあてつつ、そこに見出される簿記教授法とその教示内容の特徴について、先の Malcolm 簿記書と対比しながら、概観することにしよう。

Mair は、*Book-keeping Methodiz'd* の「序文」(Preface)において、次のように述べている。「イタリア式簿記」(Italian Book-keeping)⁸⁹の有用性は非常によく知れ渡っている。当時に利用されていた他の会計記録法と比べてのその優れた長所は明白になっており、この方法の声価は今や十分に定着し確立

87) Mephram [1988b], p.155 ; [1988c], pp.68, 454 (note (1))。

88) Cf. Bywater and Yamey [1982], p.164 ; Mephram [1988c], p.77.

89) Mair は、*Book-keeping Methodiz'd* においては、彼以前の著者達と同様に、今日的な「複式簿記」(double entry bookkeeping)という用語は用いておらず、先にみたように、「イタリア式簿記」、あるいは、標題においても *Book-keeping Methodiz'd: or, A Methodical Treatise of Merchant-Accompts, According to The Italian Form.* ……というように、「イタリアの様式に従った……」という表現を採っている。ただし、彼はまた、かかる簿記法の特徴が、一方での借方記入、他方での貸方記入という、少なくとも二つの記入が元帳に行われることにありとして、「イタリア式簿記」を「複式記入により勘定を記録する方法」(a Method of keeping Accompts by double Entry)とも呼称している。そして、後の改訂版では、標題中に「複式記入」の用語を挿入して、*Book-keeping Moderniz'd ; or, Merchant-Accounts by Double Entry, according to the Italian form.* ……へと変更している (Mair [1736], Title Page, p.14 ; cf. [1773], Title Page, p.15)。

なお、これら二つの簿記書の標題を比較することからも明らかなように、Mair は、「勘定」に相当する単語として、*Book-keeping Methodiz'd* の段階では“accompt”を用いているが、*Book-keeping Moderniz'd* では、今日と同様な“account”という綴りに改めている。注63)で言及したように、Malcolm もまた、*New Treatise* …と *Treatise of Book-keeping* とでは、「勘定」に相当する単語の綴りが異なっており、丁度この18世紀が、“accompt”から“account”へと綴りが変化し、後者の綴りが定着してゆく過渡期にあたっていたものと考えられる。

されているとする。しかしながら、彼はまた、この方法に関してより一層の改善を行いうる余地が残されているように思われるという。なぜなら、既に非常に多くの著者達が簿記に関する書物を著しているが、その大多数は、適切な基礎 (Foundation) を定めずに、学習者の判断力を啓発することなく、彼の記憶力に依存することにより教示を行っている。逆に、このような教条的な傾向を避けようとするごく少数の人達は、他の極にあまりにも走り過ぎ、抽象的な理論をうんざりするほどまでに主張し、読者をしばしば困惑させていると説き、かかる状況が彼をして簿記書の執筆に向かわせたと述べている。すなわち、Mair は、一方において、従来の大多数の簿記書にみられるような仕訳規則や記帳例示の機械的な暗誦・暗記に依存する教授法を批判するとともに、他方で、Malcolm の簿記書にみられる欠点、つまり、理論と実務との融合を目指しながらも、ややもすれば教示の理論化の方向に流され、読者にとって難解で抽象的な議論を展開しがちであった点についても批判を加えているのである⁹⁰。

では、具体的に、Mair は、「イタリア式簿記」について、どのように教示を進めてゆくのであろうか。

彼は、本文の冒頭で、簿記を、事業のあらゆる部分、および、全体に関する真実な状態 (the true State of every Part, and of the whole) を容易かつ明瞭に知ることができるように、事業の勘定を記録し処理する方法を教示するための技法であると定義する⁹¹。このような定義は、先に Malcolm によって示された簿記の定義ときわめて類似した内容のものであるが、Mair はまた、簿記の対象や目的に関連して、次のように述べている。すなわち、簿記が取り扱う対象ないし事柄とは、事業家 (a Man of Business) が、彼自身の記憶の

90) Mair [1736], Preface, pp. v-vii.

91) Mair [1736], p. 1.

Mair は、*Book-keeping Moderniz'd* においても、簿記に関してまったく同一の定義を記述している (Mair [1773], p. 1)。

ために、あるいは、関係者 (Persons concerned) に対して彼の行動や経営についての満足のゆく報告を提供するために、記録し書きとめる必要があるような業務、取引または売買 (Affairs, Transactions or Dealings) であると説き、さらに、簿記に課せられた目的とは、彼の業務に関する真実な状態を明瞭に表示すること、つまり、諸帳簿が事業のそれぞれの部分の状態や状況に関して簡潔で十分かつ正確な報告を提示できるように、売買や取引を記録するとともに、勘定を整理し処理すること、そして、それによって、彼が、業務の状態や状況について、如何なるときにも彼自身と他の人達を満足させることにあると説いている。このように、Mair にあっては、事業家本人のみならず、関係者もまた、簿記に基づく会計報告の対象として意識されているのである⁹²。

上記のような簿記の目的を達成するために必要な帳簿に関して、Mair は、日記帳——元帳から構成される二帳簿制への実質的な移行を示していた Malcolm と異なり、主要簿として、日記帳、仕訳帳、元帳という三種類の帳簿を挙げており、イタリア式貸借簿記 (=ヴェネツィア式簿記) の伝統を継承した三帳簿制に基づく帳簿組織を教示している。彼は、まず、発生順に従っての取引の正確な記録が不可欠であり、かかる機能を担うのが日記帳であると説く。そして、このような日記帳の記録によって、事業の真実の状態を知ることは不可能ではないが、おびただしい時間と労力を費やすことになる。それゆえに、工夫に富む人達は、日記帳に含まれている記録を別の形式に整理し直し、新しい帳簿を作成するという。すなわち、さまざまな取引や売買を、日記帳におけるような取引の発生順に従った単純な叙事的記録ではなく、同じ性質の事柄はひとまとめに分類し、同じ項目に属するすべての個別的事項を集め結合する、端的に言えば、勘定に対する貸借記入の形式に書き改めるのである。この種の機能を果たすのが、元帳と呼ばれる帳簿である。しかしながら、彼はまた、日記帳か

92) Mair [1736], pp. 1-2 ; cf. [1773], p. 1.

ら元帳へ直接的に転記することは誤りを犯す大きな危険を伴うので、商人は、このような問題を容易にし、元帳に忍び込む誤りをできるだけ防止するために、第三の帳簿を導入すると述べ、かかる機能を担う帳簿、つまり、仕訳帳において、日記帳での記録を再度簡潔に叙述するとともに、適切な借方と貸方とを確定するという⁹³。

このように、Mair にあっても、先の Malcolm の教示と同様に、仕訳帳は、取引を借方と貸方とに分析し、元帳への転記に際しての誤記入を防止するという機能を与えられているのであるが⁹⁴、彼は、Malcolm のように、これを主要簿の系列から排除し、日記帳—元帳からなる二帳簿制への移行を背景に、元帳を中心に簿記の教示を進めてゆこうとする、いわゆる元帳アプローチには抛らず、むしろ仕訳帳にも第一次的重要性を認めて、Peele 以来のイギリス簿記書の伝統になっている仕訳帳アプローチ、つまり、仕訳帳を帳簿組織の機軸に定め、当該帳簿における取引の貸借分析の教示に重点を置いて簿記の解説を進めてゆくという手法を採っている。すなわち、Mair によれば、「イタリア式

93) Mair [1736], pp. 2-4 ; cf. [1773], pp. 2-4.

Mair は、三帳簿制に拠るといっても、日記帳や仕訳帳、元帳のみを教示していたわけではなく、現金出納帳 (Cash-book) や、商業経費帳 (Book of Charges of Merchandize), 家計費帳 (Book of House Expences), 売上帳 (Book of Sales), 手形記入帳 (Bill-book) など、多くの補助簿についても説明を加えているが、これらの解説はすべて本論ではなく補論に収容されている (Mair [1736], Appendix, Chap. 1 ; cf. [1773], Appendix, Chap. 1)

94) Mair はまた、仕訳帳に関して、日記帳から元帳への転記にあたっての誤記入を防止するという機能に加えて、商人の取引を適切に記録するという機能の重要性についても指摘している。すなわち、日記帳が営業の渦中に複数の人達によって記帳されるために形式が定まらず不正確なことがあるので、単に借方と貸方のリストないしカテゴリーというだけでなく、商人の事業にかかわる適切な記録を日記帳とは別に保持するというのも仕訳帳の機能に含意されており、それゆえに、仕訳帳は、商人と取引相手との間に争いが生じた場合に、民事の判事 (Civil Judge) から通常要求され検査される帳簿になっていると述べている (Mair [1736], p. 9 ; cf. [1773], pp. 8-9)。

簿記」の最大の課題は、日記帳の記録を元帳の形式に整理するためのもっとも容易で最善の方法を教示することにあるとされ、かかる見地からは、仕訳帳の役割はきわめて重視されるからである⁹⁵。

彼は、仕訳帳における取引の貸借分析に関する解説に先立って、借方と貸方という用語の本質について、次のように述べている。すなわち、日記帳に記録されている取引は、二つの部分 (two Parts) から構成されており、それらは、同じように二つの部分からなる元帳勘定の相対立する側にそれぞれ記入されるとする。例えば、ある商人が、A. B. から砂糖を掛けて購入したと仮定する。このとき、商人の名前は彼自身の帳簿の上には現れないので、商人は、商品を彼自身に見立てる。その場合に、商品は、これらの買入先である人物に対して借りている、つまり、砂糖は A. B. に対して借方になると説明される。逆に、もし砂糖を A. B. に掛けて売却したとすれば、A. B. は、商人自身に対してではなく、商品である砂糖に対して借りている、つまり、A. B. は砂糖に対して借方になると説明するのである⁹⁶。しかも、Mair にあっては、このような擬人的説明に加えて、借方と貸方の用語は、取引の異なる部分に付された符号 (Marks or Characteristicks) 以外の何ものでもないとされる。さらにまた、彼は、借方と貸方とは、相対立するものではなく、一方は他方の根拠、条件な

95) Mair [1736], p. 3 ; cf. [1773], p. 3.

Mairも、注65) で言及した Malcolm の場合と同様に、日記帳と仕訳帳の二つの機能を統合した性格の帳簿について教示している。すなわち *Book-keeping Methodiz'd* では、帳簿上の各頁を左右二欄に分割し、右側の欄に日記帳が担う取引に関する叙述的記録を、また、左側の欄に仕訳帳が担う取引の貸借分析の記録を並記する形式を簡単な例示と併せて示すとともに、叙述的記録の下に貸借分析の記録を記載する形式についても提示している。ただし、*Book-keeping Moderniz'd* では、叙述的記録と貸借分析の記録とを並記する形式において、両者の記入欄が、*Book-keeping Mothodiz'd* の場合とは左右逆転した例示が示されている (Mair [1736], pp. 11-12 ; cf. [1773], pp. 12-13 ; Journal B (Waste-Book and journal))。

96) Mair [1736], pp. 12-13, 15 ; cf. [1773], pp. 14, 16.

いし原因 (Ground, Condition or Cause) になるという。すなわち、先の例でみれば、砂糖という商品の受取りは、A. B. に対する債務発生の原因であり、逆に、かかる債務の発生が商品を受け取る条件になっていると述べ、借方と貸方とを相互に関連し相互に依存する関係にあるものとして捉える見方を提示している⁹⁷。そして、「イタリア式簿記」とは、結局のところ、取引を、そこに本来的に内在する相互関連的で相互依存的な二つの部分に着目して分析し、かかる取引の二面的分析に基づき、元帳諸勘定の相対立する側、つまり借方側と貸方側に対して行う、少なくとも二つの記入 (two Entrances) — 複式記入 (double Entry) — によって勘定に記録する方法であると説くのである⁹⁸。

Mair はまた、商人の営む事業を、自分自身のために活動するケース、他者の代理人として活動するケース、組合企業 (partnership) を結成して活動するケースに分け、それぞれについて生じる各種多様な取引形態にかかわる詳細な貸借分析の解説を展開するのであるが、その前にまず、彼は、上述のような、借方・貸方に関する一般的教示のまとめとして、「I. 信用で受け取った物は、それを引き渡した人に対して借方である。II. 信用で物を受け取った人は、引き渡した物に対して借方である。……」という、合計6項目にわたる仕訳規則を提示している。すなわち、

I. A Thing received upon Trust, is Dr. to the Person of whom it is received.

II. The Person to whom a Thing is delivered upon Trust, is Dr. to the Thing delivered.

III. A Thing received is Dr. to the Thing given for it.

97) Mair [1736], pp.13-14 ; cf. [1773], pp.14-15.

98) Cf. Mair [1736], p.14 ; [1773], p.15.

IV. In antecedent and subsequent Cases, Parts that are the Reverse of one another in the Nature of the Thing, are also opposed in respect of Terms.

V. In Cases where personal and real Drs. or Crs. are wanting, the Defect must be supplied by fictitious ones.

VI. In complex Cases, the sundry Drs. or Crs. are to be made out from the preceeding Rules jointly taken ⁹⁹.

このような仕訳規則は、元帳アプローチを採る Malcolm の簿記書にはまったく見出されないのであるが、既述のように、仕訳帳アプローチに依拠する Mair の *Book-keeping Methodiz'd* にあっては、おそらくは初学者への複式簿記の教授を念頭においた教科書という観点から、複式簿記学習の上でもっとも困難さを伴う問題と考えられる取引の貸借分析にあたって、この種の規則を学習者に暗誦・暗記させ、具体的な仕訳処理の練習に際して援用させることの有用性を認めたがゆえに、これを提示したものと思量される。

また、上記の仕訳規則のVからも明らかなように、彼は、Malcolm と同様に、元帳勘定を、人名勘定・実在勘定・擬制勘定 (fictitious accounts) という三つの勘定群に分類し、特に最後の擬制勘定については、人名勘定や実在勘定の相手方となる借方ないし貸方の欠如を補うための勘定とし、その具体例として、これまた、Malcolm と同様に、損益勘定や航海勘定を挙げている ¹⁰⁰。

元帳の締切に関する Mair の教示についてみれば、彼は、商人は一般に一年に一度これを行っているとして述べており、先の Malcolm の簿記書でみたのと同様に、帳簿の年次締切がその当時のイギリス商人の間でほぼ定着しつつあったことを示している ¹⁰¹。ただし、かかる元帳の年次締切の目的に関して、Mair

99) Mair [1736], p. 19 ; cf. [1773], pp. 20-21.

100) Mair [1736], pp. 16-17, 19 ; cf. [1773], pp. 17-21.

101) Mair [1736], p. 75 ; cf. [1773], p. 67.

は、*Book-keeping Methodiz'd* では、次年度の新しい帳簿に対する財産目録 (Inventory) の資料を集めるためとして、帳簿更新という簿記技術的側面のみを記述していたのに対して¹⁰²、後年の *Book-keeping Moderniz'd* では、上記の側面に加えて、帳簿の締切と、期間損益計算制度—定期決算との結びつきについて明確に言及している。すなわち、元帳の年次締切は、単に勘定に割り当てられたスペースが年度末までにほとんど一杯になると想像されるからではなく、もっぱら昨年度の取引からどれだけの利益を得たか、あるいは、損失を被ったかを見出すという意図をもってのことであると明言しているのである¹⁰³。このような Mair の教示、特に *Book-keeping Moderniz'd* にみられる教示は、Paciolo の簿記論に代表されるイタリア式貸借簿記 (= ヴェネツィア式簿記) の解説書で従來說かれていたような、帳簿の更新その他の理由からもっぱら不

Mair, あるいは、彼と相前後して優れた簿記書を著していた Malcolm や MacGhie, Hamilton のいずれもが、その当時の商人が一般に一年に一度元帳を締め切っていると述べている。このような帳簿の年次締切の実務は、17~18世紀当時のイギリス商人の帳簿の一部にも見出され、また、1600年設立当初の当座制企業の段階から次第に近代的な株式会社企業としての体制を整えてきたイギリス東インド会社の帳簿においても、丁度18世紀半ば頃から、具体的には、合同東インド会社 (United Company of Merchants of England trading into the East Indies) の元帳 K (1756~1763) から、元帳諸勘定に対する年次締切の手続が現れるといわれる (MacGhie [1718], p. 52 ; Malcolm [1718], p. 178 ; Hamilton [1788], p. 284 ; cf. Yamey [1963b], pp. 186-193 ; [1977], pp. 20-22 ; 茂木 [1974], 348頁 ; [1975], 99-102頁)。

102) Mair [1736], p. 75.

103) Mair [1773], p. 67.

Mairの *Book-keeping Moderniz'd* よりも少し前に出版されていた William Gordon の *Universal Accountant and Complete Merchant* (1765) においても、帳簿の締切に関して、上記の Mair に類似した内容の教示が見出される。すなわち、彼は、商人は一般に一年に一度元帳を締め切っているが、それは、勘定に割り当てられたスペースがほとんど一杯になるという理由だけでなく、商人に対して、彼の業務の真実な状態と、彼の資本が昨年度の取引によってどの程度増加ないし減少したかを示すことにあると述べているのである (Gordon [1765], p. 50)。

規則的に行われていた、つまり、期間損益計算とは直接的な関連をもつものではなかった帳簿の締切が、この段階に至って、期間損益計算制度の下での定期決算の一環としてその手続中に組み込まれ、今日的な意味での「帳簿決算」の確立をみたことが、簿記書の上で明文をもって教示されたものとして高く評価されている¹⁰⁴。

最後に、具体的な帳簿の締切手続にみられる特徴について言及しておこう。Mair は、帳簿の締切にあたって、試算表による検証に加えて¹⁰⁵、損益表 (Profit and Loss Sheet) と残高表 (Ballance Sheet) という二つの計算表の作成を説いている。彼によれば、これら二つの計算表に、現金勘定をはじめとして、損益勘定と資本勘定を除くすべての勘定の残高を移記する。次に、損益表と損益勘定の借方の合計額を算出し、同様に、損益表と損益勘定の貸方の合計額を算出する。そして、これらの貸借差額を資本勘定に振り替え、資本勘定の貸借差額を残高勘定に振り替えれば、もし帳簿に誤りがなく、貸借平均の作

104) 小島 [1987], 352頁 ; cf. 渡邊 [1983], 163, 206, 214-215頁。

Hamilton もまた、*Introduction to Merchandise* において、帳簿の年次締切とその目的について明言している。すなわち、彼によれば、商人は一般に一年に一度彼らの帳簿を締め切っているとされ、その目的が、諸帳簿に散在している彼らの事業のさまざまな部分を簡潔な要約に集計すること、前回の締切以降に生じた損益を確定すること、そして、彼らの資金 (funds) の現在の状態を示すことにある点が明確に指摘されているのである (Hamilton [1788], pp. 284-285)。

なお、Hamilton 簿記書の詳細については、渡邊 [1983], 第Ⅱ部第5章を参照されたい (Cf. Mephram [1983] ; [1988a] ; [1988c], Chaps. 4, 7 (7.22), 16, 17 ; 小島 [1987], 第15章第3節の3)。

105) Mair [1736], p. 72.

Mair は、*Book-keeping Methodiz'd* では、試算表的な帳簿記入の検証方法、つまり、元帳全体の借方合計額と貸方合計額との一致から帳簿記入の正確さを検証する方法について言及しているが、“Trial Balance” という用語は特に用いていない。ただし、後年の *Book-keeping Moderniz'd* においては、かかる用語を用いるとともに、帳簿の記帳例示の中に、合計試算表の具体例も併せて掲げている (Mair [1773], pp. 64, 79 ; cf. [1773], pp. 247-249, 310)。

業が正しく行われていれば、残高表の借方合計額と貸方合計額とは一致すると
して、元帳勘定の締切にあたり、損益勘定と残高勘定への記入に先立って、こ
れら二つの計算表を作成し、締切の過程が誤りなく正確に行われているかどう
かを検証する方策を説いている¹⁰⁶。なお、彼の提示する損益表と残高表は、
その名称からは、今日的な財務諸表の萌芽ともみなされうるが、しかし、その
実態は、損益勘定と残高勘定とは独立して、帳簿の締切過程を検証する目的を
もって帳簿の外で作成される決算の運算表ともいうべきものであった¹⁰⁷。

上述してきたように、Mair の簿記書は、元帳の年次締切を期間損益計算と
のかかわりの中で捉え、これを明確に教示するなど、きわめて近代的な内容を
含んでいる。反面、彼は、帳簿組織においては、Malcolm にみられるような
二帳簿制への移行は示さず、従来からの多くの簿記書がそうであったように、
イタリア式貸借簿記(=ヴェネツィア式簿記)の伝統ともいえる三帳簿制に依

106) Mair [1736], p. 87 ; cf. [1773], p. 79.

107) Mair は、損益表と残高表の機能について、*Book-keeping Methodiz'd* では必
ずしも明確に言及していないが、*Book-keeping Moderniz'd* では、ある人達は、
元帳諸勘定を締め切るとき、損益勘定と残高勘定とを同時に締め切っているが、しか
し、彼は、まず損益表と残高表に締切記入を行い、その後に諸勘定を締め切った方が、
より確実でより良い方法であるように思われると説き、これら二つの計算表が、帳簿
締切時に記帳上の誤りを検証する目的をもって作成される運算表であることを明らか
にしている (Mair [1773], p. 80 ; cf. 渡邊 [1983], 111-112頁)。

なお、Mair, あるいは、彼と同様な計算表を教示していた MacGhie や Malcolm
の場合にあっては、そのいずれもが解説のみで具体的な例示を掲げていなかった。こ
れに対して、彼らに続く Hamilton は、具体的な損益表と残高表の例示を、その計
算過程を明らかにした付表とともに示している。さらに、Hamilton は、残高表の借
方側が商人のあらゆる種類の財産 (property) を、また、貸方側がすべての負債を含
むので、その貸借差額が純財産 (nett estate) を示し、他方、損益表の貸方側が商人
の獲得したすべてのものを、借方側が失ったすべてのものを含むので、その貸借差額
は純損益 (nett gain or loss) を示すということを指摘して、これら二つの計算表
が、決算に際しての記帳の検証機能のみならず、財産と損益の表示機能をも併せもつ
ことを明らかにしている (MacGhie [1718], pp. 53-54 ; Malcolm [1718], pp. 193-
194 ; [1731], p. 87 ; Hamilton [1788], pp. 285-286, 318-319)。

抛し、具体的な簿記の教示にあたっては、仕訳帳を機軸にすえたアプローチを採用している。しかも、彼は、仕訳帳アプローチの下で、おそらくは学習上の便宜を考えてのことであろうが、Malcolm の簿記書では排除されていた仕訳規則を改めて提示しているのである。かかる仕訳帳の提示は、Malcolm の *New Treatise* ……と同年に出版されている MacGhie の *Principles of Book-keeping Explain'd* にも¹⁰⁸、あるいは、Mair の後を継いだ Hamilton の *Introduction to Merchandise* (1788: ただし、初版は1777/1779) にも見出されるのであり¹⁰⁹、このことから、仕訳規則、あるいは、これを援用しての簿記教授法である仕訳帳アプローチが、イギリスの簿記書においては、18世紀

108) MacGhie は *Principles of Book-keeping Explain'd* の本文第1章において、複式簿記に関する種々な定義を教示する中で、Peele 簿記書以来の擬人的受渡説に基づく仕訳規則を、次のように示すとともに、第2章でも、ほぼ同一表現による仕訳規則を改めて提示している (MacGhie [1718], p. 2 ; cf. [1718], p. 13)。

…Whatever the Merchant (or any for his Account) receives, I say, the Thing so received, is made Debitor to the Person from whom, or to the Thing for which it is received. And on the other Hand, whatever is delivered, of goes out from the Merchant, upon any Account whatsoever, the Thing so delivered is made Creditor by the Person to whom, or the Thing for which the same is delivered.

109) Hamilton は、仕訳規則を、本文中でみたような Mair のような形態でもなければ、上記の MacGhie のような形態でもなく、以下に示すような二重構造の形で教示している。すなわち、仕訳記入に関する一般規則として、まず、次のような概括的な規則を提示し、

I. Every thing received, or person accountable to us, Dr.

II. Every thing delivered, or person to whom we are accountable, is Cr.

さらに、これら二つの一般規則を基に、取引の例示を交えながら、以下に掲げる八つの項目に及ぶ、より詳細な仕訳規則を示しているのである (Hamilton [1788], pp. 271-276)。

Rule I. The person to whom any thing delivered is Dr. to the thing

全般を通じてなお根強く採用され、その影響の大きかったことが示されている。

いずれにせよ、Mair の簿記書は、理論化・近代化の方向でその当時の簿記書に比して一步進んだ内容を有していた Malcolm 簿記書の影響を受けながらも、そこに見出される欠点、つまり、複式簿記をできるだけ論理的に教示しようとする意識がかなり強く働いていたがゆえに、解説が難解でわかりにくかったという側面を、当時の多くの読者が慣れていた、イギリス簿記書の教授上の伝統的手法ともいえる仕訳帳アプローチを採ることによって解消し、従来から

delivered, when nothing is received in return.

Rule II. A thing received is Dr. to the person from whom it is received, when nothing is delivered in return.

Rule III. A thing received is Dr. to the thing given for it.

Rule IV. Goods and other real accompts are Dr. for all charges laid out on them. If money be laid out, they are Dr. to Cash : If any thing else be delivered, they are Dr. to the thing delivered : If the charge be taken on trust, they are Dr. to the person to whom it is due.

Rule V. When rents of houses or lands, freight of ships, bounties on goods, or any other profits from real accompts are received, Cash is Dr. to the accmpt from which the profit arises ; If any thing besides money be received, the article received is Dr. ; If they remain unpaid, the person who owes them is Dr.

Rule VI. When an article of loss occurs, Profit and Loss, or some subsidiary accompts, is Dr. If the loss be paid in ready money, it is Dr. to Cash : If it be paid in any thing else, it is Dr. to the thing delivered. If it remain unpaid, it is Dr. to the person to whom it is owing.

Rule VII. When an article of gain occurs, Cash, the article received, or the person accountable for it, is Dr. to Profit and Loss, or to some subsidiary accmpt.

Rule VIII. When one person pays money, or delivers any thing else to another on our accmpt, the person who receives it is Dr. to the person who pays it.

のイタリア式貸借簿記の教示内容を、18世紀当時のイギリスの経済情勢にあわせて近代化を図りながら、しかも、初心者にとって学習し理解しやすいようにうまく整序し体系化したものと考えられる。ここに、Paciolo 以来のイタリア式貸借簿記の伝統を継承した教科書としての簿記書の体系化がひとまず完成したものと考えられる¹¹⁰。そして、かかる教科書としての完成度の高さのゆえに、Mair の簿記書は、*Book-keeping Methodiz'd* の初版の出版以来、その改訂版にあたる *Book-keeping Moderniz'd* を含めて、約 3 / 4 世紀の間、イギリスにおける標準的な複式簿記の教科書として好評をもって受け入れられることになったのである。

さらに、このような Mair、あるいは、Malcolm や MacGhie、Hamilton らによって著された一群のスコットランドの簿記書は、既述のように、イギリスの簿記史において、「スコットランドの優越」と称されるような一時期を画するのであるが、これらはまた、18世紀当時のイギリス、特にエディンバラにおける高等常識の集成とその普及を目指して公刊された *Encyclopaedia Britannica* で取り扱われたほどの知的領域の広がりはないが¹¹¹、しかし、簿記・会計という

110) Cf. 久野 (秀) [1979b], 23-24, 201頁。

次の III で検討する Cronhelm も、*Double Entry by Single* に含まれた「簿記発展の概要」の中で、Mair の簿記書について、「古きイタリア式簿記」(old Italian Method) のもっとも完全で精緻な解説書であるとの評価を与えている (Cronhelm [1818], p. xiii)。

111) 近代的意味における百科辞典は、フランスの Jean le Rond d'Alembert や Denis Diderot ら、いわゆる百科全書派によって刊行された *L'Encyclopédie* (1751~1780) の例を挙げるまでもなく、啓蒙思想の産物とみなされている。スコットランドでも同様に、今日、イギリスのみならず、わが国でもよく知られている百科辞典 *Encyclopaedia Britannica* の初版が、エディンバラで「スコットランドの紳士の一団」によって編集され、同じエディンバラで1768年から分冊形式で刊行が開始され、1771年に三冊本として完成している。また、1773年には、まったく同一の形式

狭い領域に限ってではあるが、その当時の人達に複式簿記という有用な知識を伝え、これを普及させることに大きな貢献があったのであり、その意味において、II. I. で言及した「スコットランド啓蒙」という、18世紀、それも主として後半以降のスコットランドにみられるめざましい社会的・経済的興隆を背景に、突然の輝きのように現れた文化的黄金時代を反映した知的所産の一つであったと考えられる¹¹²。

ただし、Mair の簿記書をはじめとして、当時のスコットランドの簿記書の多くにみられる共通した性格、つまり、アカデミーやグラマー・スクール等の学校で用いられることを想定した教科書としての性格は、教師達がこれをどのように体系化し精緻化していったとしても、特に1760年代以降、イギリスに生じた、一般に「産業革命」と呼ばれる、急速な経済的・社会的変革運動の中で、大規模化し、多様化してゆくイギリスの商業、殊にその中で複雑化してゆく日々の取引活動を会計処理する上で必要とされる実務的指針を求める声には十分に対応できないという限界をもたらし、ここに、学校向けの教科書ではない、現実の会計実務への直接的適用可能性ないし実践性を考慮した新たな簿記書への要求と、これに対応したイタリア式貸借簿記革新の動きが18世紀末頃から現れてくるのである。この点については、次のIIIで検討することにしよう。

と内容でロンドン版が出版されている（水田 [1968], 239, 313-318頁）。

なお、本節で取り上げた Mair も *Encyclopaedia Britannica* の執筆を担当しており、彼は、初版における「算術」と「簿記」の項目を分担していた。また、Hamilton も、Mair に代わって、同辞典の第二版から第七版にかけて「簿記」の項目を分担・執筆していた（Mephram [1988c], pp. 80, 99-100）。

112) Cf. Mephram [1988b], pp. 165-169 ; [1988c], pp. 382-383.

Ⅲ. 資本主理論的簿記論の登場

—— クロンヘルム簿記論の解明 ——

Ⅲ. 1. 産業革命とイタリア式貸借簿記の革新

—— ブース簿記書を中心として ——

ステュアート家の跡を襲ったハノーヴァー家の国王達、特に George Ⅲの即位 (1760) から、その子 William Ⅳの即位 (1830) に至る短い年月の間に、イギリスは、紡績機や織機、蒸気機関の発明・改良に端を発した一連の生産技術の革新が、たちまちあらゆる産業分野に波及し、現代の工業生産の基本的形態である工場制生産を支配的なものとして確立していった。すなわち、近代社会のもっとも基礎的な過程をなす「工業化」(Industrialization) を大きく進展させたのである。しかも、ここでいう「工業化」とは、あらゆる時代や地域に存在しうる単なる工業の発達ではなく、不断に改良される機械、不断に大規模化する集中、不断に増大する投資によって特徴づけられるダイナミックな工業生産の長期にわたる持続的増大を意味している。そして、その開始こそが、農業を生産の基本としていた伝統的な農業社会から、工業生産をその存立の前提とする近代的な工業社会への質的な転換であり、この転換のプロセスを、われわれは一般に「産業革命」(Industrial Revolution) と呼んでいる¹¹³。

イギリスが、このような「工業化」の過程を機軸とした経済的・社会的変革の運動を、他国に先駆けて、しかも、自主的ないし自然発生的に展開させた重要な要因として、例えば、イギリス固有の農業革命が工業人口を支える農業生産力の拡大、自由な工業労働力の創出、資本の蓄積機構の整備といった基礎的条件を生み出していたこと、また、18世紀前半のイギリスにみられる工業経

113) 柴田 [1970], 5-6頁; cf. 大河内 [1977], 162頁; 村岡・川北編著 [1986], 55-56頁。

なお、イギリスの「産業革命」の詳細については、例えば、Ashton [1986] (中川訳 [1953]) ; Mantoux [1959] (徳増他訳 [1964]) 等を参照されたい。

営が著しく成熟したマニュファクチャーの段階に到達しており、かかるマニュファクチャーの成長に照応して国内の商品流通網の形成と組織化が図られ、広汎な社会的分業に基づく成熟した国内市場が成立していたことなどが挙げられる。さらに、これらに加えて、圧倒的な海軍力と商船隊の存在を背景に、西インドや北アメリカ、東インドなどの植民地を含む広大な地域を自国の貿易圏とした海外貿易の発展が挙げられる。すなわち、天然資源に必ずしも恵まれていなかったイギリスは、工業と商業の活動が活発化するにつれて、国内では十分に供給できない原材料について輸入に頼らざる得なくなっていた。しかも、当時の重商主義的政策の下では、かかる原材料の輸入を確保するためには、対価としての輸出もまた確実に行う必要があった。その結果として、産業革命直前の18世紀半ば頃のイギリスには、マニュファクチャーの形態を採って急速に成長しつつある各種工業製品の輸出、および、商工業活動を維持するために必要な原材料の輸入、そして、重商主義的観点に立つ貿易差額の獲得という基本命題に即して、広大な海外貿易のネットワークが確立されていた¹¹⁴⁾。

イギリスの産業革命を初期に主導した産業、つまり、綿工業の急速な成長にとっても、かかる海外貿易のネットワークの存在は、紡績機や織機、蒸気機関

114) 柴田 [1970], 8-9頁; 大河内 [1977], 164-178頁。

なお、イギリスにおける「産業革命」の要因、特にその経済的要因として掲げたマニュファクチャーの成長や国内市場の成熟、海外貿易の発展等に加えて、政治的要因として、II.1.で論及したイングランドとスコットランドとの合併が挙げられる。すなわち、イングランドとの合併により、スコットランドは、既述のように、アメリカ植民地貿易などに飛躍的な近代化の基礎を与えられ、イングランドの資本や技術を導入して、封建的残滓の多い農業の近代化、造船業の発達等に非常な刺激を与えられたのであるが、他方、イングランドも、注38)で述べたように、かかる合併によって、敵国フランスと結ぶ可能性のある裏口を閉ざすことができ、また、18世紀に入り伝統になれて沈滞気味のイングランドに、スコットランド人の活力を経済の担い手として加えることにより、その後のイギリスの強大・富強に大いに付加することができたのである。その意味で、両国の合併の第一次的意義は、60~70年後に到来する産業革命の政治的前提条件になったという点にあると評価されている(天川 [1966], 188頁)。

の発明・改良といった生産技術の革新や、工場制の採用といった経営形態の革新とともにきわめて重要な役割を果たした。すなわち、綿工業の原料となる綿花は、初期にはカリブ海地域で奴隷制砂糖生産を補完する作物として作られていたので、作付地でも労働力の面でも当面無制限に供給された。また、市場からみても、綿布は雑工業製品の典型として、ヨーロッパよりは、イギリスとアフリカ、アメリカとを結ぶルート、つまり、奴隷と砂糖やタバコを媒介とする三角貿易のルートを中心に全世界的に受容されたのであり、国際商業の覇権を握っての広大な植民地帝国の形成と、これらを結ぶ海外貿易のネットワークの確立こそが、綿工業の急速な成長の大前提であったのである¹¹⁵。

1760年代頃から上記の綿工業にはじまり、ほぼ1830年代までに全産業分野を技術革新の波に巻き込んでいった産業革命の大きなうねりは、それを展開せしめる基本的前提を創出した国内商業と海外貿易に対しても一層の発展の機会をもたらした。すなわち、国内で生産される工業製品の著しい増加が従来とは異なった新たな流通組織の形成に刺激を与えるとともに、産業革命期を通じてみられる人口の増加と都市化の進行が取引商品の種類の多様化や供給品の拡大をさらに求めるに至るという、供給と需要の両面からの要因が国内での旺盛な商業活動を呼び起こした。他方、かつての重商主義政策に代わって、高度に発達した工業生産力に基礎づけられた自由貿易政策を推進することにより、「世界の工場」と化したイギリスを中軸に、世界各地をその原材料や農産物の供給地、かつ、その工業製品の販売地とする形で世界市場を再編する中で、イギリスの海外貿易は輸出入とも大きく拡大し、国際商業における優位を不動のものにしていった¹¹⁶。

そして、このような内外ともに著しい発展を遂げたイギリスの商業、特にその担い手となった商人にとって、Luca Pacioli の簿記論（1494）以来、イタ

115) 村岡・川北編著 [1986], 58-60頁。

116) 石坂他 [1980], 166頁; 石坂他 [1985], 197-208頁。

リア式貸借簿記（＝ヴェネツィア式簿記）の伝統を基本的に受け継いできた複式簿記の解説書からでは、たとえそれが、IIで論じたように、教科書的に如何に体系化され精緻化されていたとしても、大規模化、かつ、多様化・複雑化してゆく彼らの取引活動を会計処理する上で必要とされる実務的指針を見出すことができなくなっていた。すなわち、簿記の教師達が複式簿記の理論的指導に努力している間に、産業革命の大きなうねりは、簿記・会計の分野においても、新たな革新ないし展開を要求するに至ったのである¹¹⁷。

まさに、このような時期に、アメリカ帰りの商人 Benjamin Booth¹¹⁸によって、アカデミーやグラマー・スクールその他の学校で利用される教科書としての色彩が色濃く現れてきていたその当時の大多数の簿記書と大きく異なった、現実の会計実務への直接的適用可能性ないし実践性を念頭に置いた革新的な簿記書 *Complete System of Book-keeping* (1789) が出版された。

Booth は、当該簿記書の序文において、イギリスのような商業国において大規模経営に適用可能な簿記書が一冊も存在しないのは驚くべきことであり、しかも、これまでにみた簿記書はその仕事を引き受けるのに十分な能力を持たない人達か、自己の理論を経験によって試す機会を一度も持たなかった人達によって著述されていたように思われる。それゆえに、彼らの指導に従った人々は常々戸惑わされてきたと指摘して、従来の簿記書の著者達、特に実務にあまりかかわりを持たなかった簿記の教師達を批判した上で、彼の説く簿記法は、

117) Cf. 小島 [1987], 367頁。

118) Booth は、もっぱらアメリカで活動していたイギリス商人であり、アメリカ合衆国独立前の1770年にはニューヨーク商業会議所 (New York Chamber of Commerce)の一員にも選出されている。しかし、彼は、独立戦争の際にイギリス支持派 (Loyalist) の側に属して積極的な役割を果たしたため、財産を革命派である愛国派 (Patriot) により没収され、1779年にはイギリスへの帰国を余議なくされた。ここで取り上げる *Complete System of Book-keeping* も、彼がイギリスに帰国した後の晩年に、それまでのアメリカでの商人としての長い経験をふまえて著述されたものである (Bywater and Yamey [1982], pp. 189-191)。

30年にわたる経験をふまえて、商人にも製造業者にも複式簿記の利用が可能なようにあらゆる障害を取り除くように工夫されており、複式簿記の便宜とともに、単式簿記の簡便さを併せもっていると述べている¹¹⁹。

この *Complete System of Book-keeping* の中で Booth が展開している教示内容を具体的にみれば、そこには、John Mair の *Book-keeping Methodiz'd* (1736) をその代表例とする、イタリア式貸借簿記の伝統を継承した在来の簿記書と比較して、次に掲げる三つの大きな特徴が見出される¹²⁰。

第一の特徴は、帳簿組織において、Paciolo の簿記論以来、大多数の簿記書に受け継がれてきた日記帳——仕訳帳——元帳からなる単純な三帳簿制（単一仕訳帳制）から大きく離脱している点である。すなわち、Booth は、実務の経験からは日記帳（Waste-Book）以外のさまざまな補助的帳簿（subsidiary books）が必要であることが明らかであるにもかかわらず、「イタリア式簿記」（Italian method of Book-keeping）は単一の日記帳のみで事業上のあらゆる取引を原初記入するのに十分であるとみている点でプリミティブな形態をとどめていると批判する¹²¹。そして、単一の日記帳を排し、現金出納帳（Cash-Book）や手形記入帳（Bill-Book）といった各種の補助的帳簿（＝分割日記帳）

119) Booth [1789], pp. 5-6.

なお、Booth の簿記書の詳細については、渡邊 [1984] ; [1985b], III; 小島 [1987], 第16章第1節を参照されたい。

120) Booth の説く実践的簿記法と対比されるイタリア式貸借簿記（＝ヴェネツィア簿記）が有する特徴として、注4)でも述べたように、(1)三帳簿制（単一仕訳帳制）の採用、(2)特定商品勘定や航海勘定といった個別的商品勘定（＝冒険商業勘定）の利用、(3)帳簿の不規則な締切が挙げられる。しかし、これらの古典的特徴は、もちろん Booth の時代までの簿記書に恒常的にみられたというわけではなく、既に II. 2., 3.でも言及したように、Booth 以前の18世紀スコットランドの簿記書においても、例えば、二帳簿制への移行、商品勘定の総括的処理の試み、帳簿の年次締切などが論じられており、社会的・経済的環境の変化の下で、複式簿記の技術的側面での近代化の過程が進行していたということはいうまでもない。

121) Booth [1789], p. 24.

に原初記入を行い、そこから仕訳帳における月次総括仕訳を介して元帳へ一括的に合計転記するという、今日の簿記教科書で説かれている特殊仕訳帳制（複合仕訳帳制ないし分割仕訳帳制）に近似した手法——より正確に言えば分割日記帳制——を教示することによって、その当時の大規模商業経営において日々に増大する記帳計算業務の分割・分業等の実務的要求に対応できるような実践的帳簿組織の展開を図ったのである¹²²。

Booth はまた、商品売買の処理にあたって、これも従来から多くの簿記書で説かれてきた取扱商品の商品名を付した特定商品勘定など複数の個別的な商品勘定（＝冒険商業勘定）を用いて処理する方法を批判して、ただ一つの商品勘定のみでこれを総括的に処理する方法を教示している¹²³。II. 2. でも論及したように、既に James Peele の *Pathewaye to Perfectnes* (1569) や Richard

122) Booth [1789], "General Principles, of the Cash-book, of the Bill-Book, etc. "

イギリスにおいて分割日記帳制（特殊仕訳帳制）を説いた最初期の例は、Hugh Oldcastle, Jan Ympyn, James Peele の各簿記書に次ぐ第四番目の簿記書とされる John Weddington の *Brefe Instruction* (1567) である。ただし、この Weddington の説く分割日記帳制は、Booth のそれと異なり、仕訳帳が全く排除され、分割日記帳から元帳への転記にあたっては、Booth のような月次総括仕訳は採用されず、ほとんどの場合に取引毎の個別転記の形で行われていた。しかも、この Weddington 簿記書のもっとも革新的な教示部分であった分割日記帳制はその後のイギリス簿記書の中に追従者を見出すことがなく、結局のところ、月次総括仕訳と組み合わされた形での分割日記帳制（特殊仕訳帳制）が本格的に教示されるのは、18世紀末の Booth 簿記書の登場を待たなければならなかったのである（Cf. 小島 [1971], 173-181, 190-191頁; Yamey [1963a], pp. 163-164; Bywater and Yamey [1982], pp. 58-60）。

なお、Weddington の簿記書の詳細については、小島 [1971]、第6章を参照にされたい（Cf. Yamey [1958]）。

123) Booth [1789], pp. 21, 28 (cf. Booth [1789], p. 102).

Booth は、その当時のほとんどの簿記書がきわめて多数の商品勘定の導入を教示している点で実践的な有用性を相当の程度失っていると指摘し、大多数の商人は、このような実務に容易に適用できない理論のすべてを拒絶して、平易で簡単な単式簿記を選好する結果になっていると述べている（Booth [1789], p. 21 (footnote)）。

Dafforne の *Merchants Mirrour* (1635) などに副次的な取扱商品に対する総括的勘定処理の試みが見出され、また、Alexander Malcolm の *New Treatise of Arithmetick and Book-keeping* (1718) では主要取扱商品に対する種類別総括化が試みられていた¹²⁴。Booth は、このような商品売買における勘定処理総括化の動きをさらに押し進め、大規模取引に従事している商人がその取扱商品の各々について特定商品勘定を設けることは、元帳における名目勘定を増殖させ、不必要な困難と混乱を招くとして、総括的な一般商品勘定の設定とその利用を説いている。このような一般商品勘定の唱導が、彼の簿記書の第二の特徴を構成する¹²⁵。

第三の特徴は、帳簿の締切に見出される。すなわち、Booth は、帳簿の締切に関して、Malcolm や Mair の簿記書などで当時の商人達の一般的実務であると説かれていた一年に一度の締切に代えて¹²⁶、あらゆる商人が一年に二度

124) Peele [1569], *The Journall or dailye Booke A*, examples 93, 96 ; *The Leager or Greate Boke A*, fol. 43, 44 ; Dafforne [1635], *An Introduction to Merchants Accompts*, pp. 11, 21 ; Malcolm [1718], pp. 138-139 ; [1731], pp. 44-45 ; cf. Weddington [1567], *The Great Boke or lidge A*, fol. 6, 16, 19, 24.

なお、商品勘定の利用形態面での歴史的返遷の概要については、例えば、茂木 [1969], 第3章 ; 小島 [1973a] ; 渡邊 [1983], 第I部第4章を参照されたい。

125) Booth [1789], p. 28.

なお、Booth は、商品売買の処理にあたって、元帳に統括勘定としての商品勘定(＝一般商品勘定)のみしか設けないことの欠点、つまり、特定商品勘定を利用する場合のように取扱商品毎に損益を個別的に把握できないという点について、元帳はそのような見積りを行うのに適当な場所ではなく、商品毎の利益を個別的に突きとめるもっとも手とり早くて明確な方法は分割日記帳の一つである売上帳(*Sales-Book—Invoice-Book Outward*)を参照することであると教示している(Booth [1789], p. 21 (footnote))。

126) II. 2., 3. でも言及したように、Malcolm や Mair は、いずれも彼らの簿記書の中で、当時の商人達が一般に一年に一度彼らの帳簿を締め切っている旨を教示している。ただし、Alexander MacGhie は *Principles of Book-keeping Explained* において、ある人達は一年ないし半年毎の定められたときに帳簿を締め切っていると述べており、ここで Booth が教示するような半年毎の帳簿締切が既に18世紀初頭に一部の商人達の間で行われていた点について言及している(Malcolm [1718], p. 178 ; MacGhie [1718], p. 52 ; Mair [1736], p. 75 ; [1773], p. 67)。

これを行うように強く推奨している。彼によれば、事業におけるもっとも大きな誤りの一つは、あまり調査もせず、頻繁に締め切ったり比較することもなく、長く勘定を眠らせておくことであるとされ、特に当事者双方が海外にいるような場合は、たびたびその記憶をよみがえらせるためにも、12か月はあまりにも長すぎる期間であると述べて、6か月毎の帳簿の締切を求めている¹²⁷。

このように、Booth は、産業革命の大きなうねりの中で、イギリスの国内商業や海外貿易の著しい発展を眼前にして、イタリア式貸借簿記の伝統を受け継いだ在来の簿記書が教科書として理論化かつ定型化されることの反面、ややもすれば実践性を失いがちであったことに満足せず、月次総括仕訳と組み合わせられた体系的な帳簿組織の展開に基づく分割日記帳制（特殊仕訳帳制）の採用を中核とした、その当時の大規模商業経営の会計実務に照応する斬新で実用的な教示内容を備えた複式簿記の実践的解説書を提示したのである¹²⁸。

もっとも、Booth の簿記書は、上記のように、実践性、つまり、実務への直接的適用可能性を重視したがゆえに、その教示内容は帳簿組織を含めて必要

127) Booth [1789], p. 29.

なお、Basil S. Yamey は、上記の帳簿締切に関連して、Booth が、会計期間の末に帳簿が貸借平均される時の締切手続と、帳簿が物理的に記入で一杯になった時の締切手続とを区別していないという批判を加えている (Bywater and Yamey [1982], p. 193)。

128) Booth の簿記書について、例えば、Patrick Kelly は、自著の *Element of Book-keeping* (1801) において、明らかに経験の産物である Booth の精緻な著作は、よく考案された帳簿組織に関する種々の例示を含んでおり、初心者向きではないが、簿記書の著者が活用することのできる唯一の体系であると評している。同様に、次節で検討する Frederick W. Cronhelm も、その著書 *Double Entry by Single* (1818) の中で、Mair の簿記書を「古きイタリア式簿記」(old Italian Method) のもっとも完全で精緻な解説書と述べる一方で、Booth の簿記書を「近代的イタリア式簿記」(modern Italian Method) を説明したイギリスで最初の著作であると評している。このように、Booth の簿記書は、その優れた実践性のゆえに、彼とはほぼ同時代の簿記書の著者達からも高く評価されているのである (Kelly [1801], p. viii ; Cronhelm [1818], p. xiii)。

以上に複雑なものとなり、初心者に対する教科書としてみた場合には、かえってその有用性を著しく損なうことになったともいわれる¹²⁹。かかる状況の下で、Booth の *Complete System of Book-keeping* に代表される実践的簿記書の系統と、Mair の *Book-keeping Methodiz'd* に代表される教科書的簿記書の系統という、その当時の複式簿記の解説書に見出される二つの大きな流れを止揚し、両者の長所を兼ね備えた総合的な簿記書を著そうとする試みが現れる。その代表例が、19世紀に入った最初の年に出版された Patrick Kelly の *Elements of Book-keeping* (1801) であり¹³⁰、また、次節で検討しようとする

129) John W. Fultonは、その著書 *British-Indian Book-keeping* (1800) に含めた「序文に対する覚書」(Notes to the Introduction)の中で、彼以前の簿記書の著者達を大きく二つのグループに分類し、大多数を占める理論派 (theoretical class) の代表として Mair を挙げる一方で、小数の実務簿記家 (practical book-keepers) の代表として Booth を挙げている。そして、複式簿記に関する Boothの実践的な簿記書は、それまでに出版された中で最善のものであると評価する反面において、それが有する強い実践的性格のゆえに教科書としての妥当性については疑問を提起している。実際に、Booth の簿記書は、それが標準的なものとみなされ、権威あるものとしてあらゆる商人の会計事務所 (Counting-House) に受け入れられるように企図した彼の意気込みにもかかわらず、残念ながら初版のみで終わったのである。ただし、彼の影響は、Kelly や Cronhelm らのイギリスの簿記書のみならず、William Mitchell の *New and Complete System of Book-keeping* (1796) といったアメリカの簿記書にも見出すことができる (Fulton [1800], pp. 17-20 ; Booth [1789], p. 5 ; cf. Institute of Chartered Accountants in England and Wales [1975], pp. 84, 267 ; Bywater and Yamey [1982], pp. 193-194, 201)。

130) Cf. 久野 (秀) [1979b], 33-34, 37-38, 238頁。

Kelly もまた、*Elements of Book-keeping* の序文において、簿記に関する著者達を大きく二つの異なったグループに分けている。すなわち、第一の、しかも、はるかに多数のグループは、実務の発展的改良に言及することなく理論を説明してきた Mair や Hamilton らに代表される教師達であり、第二のグループは、原理を説明することなく実務の改良を提示してきた Booth のような商人達である。Kelly はこれら二つのグループの著者達の著作は非常に有用であり、それぞれの有用さを結合するのが、彼の著書の目的であると述べている。そして、具体的には、彼は、三組の記帳例示を用いて、簿記の教示を進めている。すなわち、第一の例示では、単式

る Frederick William Cronhelm の *Double Entry by Single* (1818) であった。

次節では, Peele の *Maner und Fourme* (1553) 以来のイギリス簿記書の発展の系譜上にあつて, 大多数を占める教科書的簿記書と, これに対置される実践的簿記書という二つの流れを総合・止揚しようとする試みの一つの集大成を示すと考えられる Cronhelm の簿記論を取り上げ, そこに見出される基本的特質を, 本稿の主要な検討課題である教示の理論化・体系化の側面を中心に明らかにすることにした¹³¹⁾。

簿記と複式簿記の基本が簡潔かつ平易な方法で説明されており, 第二の記帳例示では, 複式簿記のより進んだ学習が, 学校などで一般に教示されている理論, つまり, イタリア式貸借簿記における日記帳——仕訳帳——元帳からなる三帳簿制の上で展開されている。第三の記帳例示もまた複式簿記を扱っているが, それは実際の取引に基づいており, 例示の資料はさまざまな商人の帳簿から取られ, 商人の会計事務所でもっとも支持を得た実務, つまり, 日記帳——分割日記帳——仕訳帳——元帳という分割仕訳帳制(ただし, 原初記入のための単一の日記帳を排除していない点で Booth と異なる)を採る帳簿組織に従って展開されている。Kelly は, このような三組の記帳例示を用いて, 複式簿記の理論と実務を総合的に教示しようとしたのであり, 彼の簿記書は, Booth 簿記書がその複雑さのゆえに初版止まりであったのに対して, 教科書として初心者にも好評であったのであろう, 1801年から1847年にかけて12版を重ね, また, 1803年にはフィラデルフィアでアメリカ版が公刊されている。かかる Kelly の簿記書に関して, Cronhelm は, Boothによりはじめて説述された近代的簿記は, Kelly の好評を博した書物によって基本となる部分が溶出され, 学校向きにうまく適合されたと評している (Kelly [1801], pp. iii-iv, vii-x; cf. Institute of Chartered Accountants in England and Wales[1975], pp.86, 93, 307; McMickle and Jensen [1988], pp. 139-140; Cronhelm [1818], p. xiv)。

なお, Kelly の簿記書の詳細については, 渡邊 [1985a] ; [1985b] を参照されたい。

131) なお, Booth の簿記書と, Kelly や Cronhelm の簿記書との間にはさまれた

Ⅲ. 2. クロンヘルム簿記論の構造

——均衡の原理と二勘定分類——

1818年に公刊された Cronhelm¹³² の簿記書 *Double Entry by Single* は、彼自身の言葉に従うならば、実務にかかわりをもたない単なる理論上の産物ではなく、会計における長年の経験の成果として著されたものであり¹³³、旧来の

1796年に、Edward T. Jones によって、出版の当時に大きな議論を巻き起こした簿記書 *Jones's English System of Book-keeping, by Single or Double Entry* が公刊された。この簿記書は、日記帳——元帳からなる二帳簿制を採る、簡便さと正確さを特徴とした新式の簿記法、つまり、「ジョーンズのイギリス式簿記」(Jones's English System of Book-keeping)を説いたものであったが、それは、そこに盛り込まれたイタリア式簿記(=複式簿記)に対する痛烈な批判等と相まって、出版の当時センセーショナルな話題を集めた。もっとも、彼の説く新式の簿記法は結局のところ複式簿記の原理に基づいていたものであったがゆえに、イタリア式簿記に対する彼の批判は失敗し、複式簿記の完全性ないし優越性を再確認させる結果に終わっている。ただし、このような Jones の新簿記法への努力もまた、失敗に帰したとはいえ、産業革命期当時の商業活動の活発化に伴う取引規模の拡大や複雑化・煩雑化等に対応した記帳計算業務簡便化への工夫の現れの一つと解することができる(小島 [1987], 376-377, 387-388頁)。

なお、Jones の簿記論の詳細については、小島 [1962] ; [1987], 第16章第2節を参照されたい (Cf. Yamey [1944] ; [1956b] ; [1978b])。

132) Cronhelm の名前に関しては、*Double Entry by Single* のイングランド・ウェールズ勅許会計士協会蔵本のマイクロフィルム版を見る限り、タイトル・ページと、序文の末尾に“F. W. CRONHELM”と記されているのみで、そのフル・ネームの詳細な綴りは不明である。これに関して、同協会の文献目録 *Historical Accounting Literature* では“CRONHELM, Frederick William”と綴られており、また、Arno Press による Cronhelm 簿記書のリプリント版(1978)では、タイトル・ページに“F [rederic] W [illiam] Cronhelm”と綴られている。本書では、一応、前者の表記法に従って、“Frederick William Cronhelm”と表記しておくことにする (Institute of Chartered Accountants in England and Wales [1975], pp. 87, 277; Cronhelm, F. W., *Double Entry by Single*, reprinted ed., New York, 1978, Title Page)。

133) Cronhelm [1818], p. v.

イギリス簿記書に比して、教示上きわめて近代的なアプローチに基づく斬新な内容の簿記解説書であった¹³⁴。

本書は、次に示すように、大きく四つの部分から構成されている¹³⁵。すなわち、

ただし、Cronhelm 自身のプロフィールについてはほとんど何も知られておらず、*Double Entry by Single* の序文から、彼が会計の実務に長年にわたり携わっていたことが知られるのみである (Cronhelm [1818], p. v ; cf. Yamey [1978a], p. 1)。

なお、注132) で言及した Arno Press による Cronhelm 簿記書のリプリント版に付された Yamey の序文には頁数が全く表記されていないため、便宜上、序文の最初の頁から順に 1 から 6 までの頁番号を仮に与えておいた。上記の Yamey による序文からの引用にあたっては、この仮の頁番号によっているので御注意いただきたい。

134) Cronhelm の簿記書に関しては、既に Littleton による先駆的な研究があり、その後も、会計理論や原価計算の歴史にかかわる研究の中で取り上げられている。そのうち、本書の研究主題に関連した前者の歴史については、Littleton [1928] ; [1933], Chap. XI (片野訳 [1978], 第11章) ; [1961], Part One (Nineteenth Century Theory I) ; Jackson [1956] ; Yamey [1974] ; 久野 (秀) [1979b] , 第1部第1章第4節, 同第2部 ; Hain [1980], Chap. II 等を、また、後者の歴史に関連しては、Littleton [1933], Chap. XX (片野訳 [1978], 第20章) ; Edwards (R) [1937], III ; 宮上 [1952], 第1章第3節 ; Garner [1954], Chap. II (品田他訳 [1958], 第2章) ; 臼井 [1961], 第4章第III節等を参照されたい。

135) Cronhelm の簿記書は、本文中でも言及したように、大きく四つの部分に分かれている。すなわち、「序文」に続いて、「簿記発展の概要」で簿記の歴史が略述され、本文に相当する第1部では、簿記の定義や、簿記を支える諸原理を中心に、旧来の「イタリア式」(Italian Method) と彼の説く「新式」(New Method) の複式簿記の比較、勘定の分類や帳簿組織、損益の勘定、残高抽出表 (General Extract of the Balances — 繰越試算表) と記帳の検証、組合元帳、秘密元帳、誤謬・不正とその防止策、倉庫元帳などの解説が行われる。さらに、第2部の「範例」においては、第1部で論じられた教示内容を小売商人、卸売商人、製造業者、貿易商人、銀行業者の会計実務にそれぞれ適用する際に必要とされる帳簿の種類とその記帳例示が具体的に示されるという構成が採られている。

序文 (Preface)

簿記発展の概要 (Sketch of Progress of Book-keeping)¹³⁶第1部 簿記の理論 (Theory of Book-keeping)¹³⁷

第2部 範例 (Exemplifications)

Cronhelm は、まず、序文において、商業の世界で、簿記以上にその重要性が容易に認識され、一般に経験されるものは少ないと述べて、簿記の重要性を指摘する¹³⁸。そして、簿記の目的を、財産 (property) を記録することにより、所有主に対して、彼の資本全体の価値とその各構成部分の価値をいつ如何なる時にでも明示することにあると規定するとともに、簿記が常に「均衡の原理」(Principle of Equilibrium) に基づくものであることを強調している。すなわち、Cronhelmによれば、取引の過程にある財産の構成部分は絶え間ざる変形と変化の渦中にあるが、それらがどのような変化を被ろうと、また、資本全体が増減しようとして一定のままであろうと、資本の全体は常にその構成部分すべての総和に等しくなければならず、この均衡関係 (Equality)こそが簿記のもっとも本質的な原理であるとされる。しかるに、全体は部分の総和に等しいという明確で単純な原理がこれまで簿記の基礎として定められず、逆に、この原理

136) なお、Cronhelm 簿記書の「簿記発展の概要」にみられるのと同様な簿記の歴史に対する関心は、イギリスの簿記書では、例えば、Dafforne の *Merchants Mirrour* の中に既に認められ、また、先の注 (130) で論及した Kelly の簿記書にも見出される。このうち、Kelly 簿記書に含まれた「簿記小史」(A Short History of Book-keeping) は、わが国でも明治期に翻訳と紹介が行われている (Dafforne [1635], *Opinion of Book-keepings Antiquity*; Kelly [1801], pp. iv-x; 東 [1903], 583-596頁; cf. Yamey [1980a], pp. 84, 87, 89-90; 小島 [1973b], 209-216頁)。

137) なお、Cronhelm 簿記書の本文 (第1部「簿記の理論」) の核心部分を教示している第3章「均衡の原理」(Principles of Equilibrium) については、Yamey, Edey and Thomson [1963] (Extract 111) や、Brief (ed.) [1982] にリプリントの形で収録されているので参照されたい。

138) Cronhelm [1818], p. v.

を見落としていたことから、ほとんどすべての簿記書において、元帳勘定を人名勘定・実在勘定・擬制勘定に分類し、あたかも資本の全体とその構成部分の各々が等しく実在しないかのような、曖昧で混乱した教示がもたらされていたと批判を加えているのである¹³⁹。

このように、Cronhelm は、序文で、複式簿記の目的を資本主に対する財産の管理・報告手段と規定し、複式簿記の本質は、財産の全体がその構成部分の総和に等しいという、きわめて明解な原理に基づくものであることを指摘している。それゆえに、以下では、彼の簿記法教示の核心を成すともいえる「均衡の原理」と、これに基づく勘定分類に焦点をあてながら、彼の簿記論の理論的特質を分析してみよう¹⁴⁰。

本文にあたる第1部において、Cronhelm は、あらためて複式簿記を資本全体の価値と各構成部分の価値をいつ如何なる時にでも明示できるように財産を記録する技法であると定義している¹⁴¹。そして、全体がその部分の総和に等しいということは科学のもっとも根本的な公理であり、簿記のすべての上部構造

139) Cronhelm [1818], p. vi-vii; cf. [1818], p. 4, 10.

140) Cronhelm は、簿記のすべての体系が依拠する基本原理として、上記の「均衡の原理」に加えて、「加法の原理」(Principle of Additions)を挙げている。後者の原理は、連続的な差引計算に基づく階梯式計算法によるのでは誤りを生じやすいため、簿記においては加法的減算に基づく勘定式計算法を採るべしということを意味するが、Cronhelm にあっては、かかる「加法の原理」は「均衡の原理」に比してあくまでも二次的な重要性をもつものと位置づけられているにとどまる (Cronhelm [1818], pp. 10-12)。

141) Cronhelm [1818], p. 1.

なお、Cronhelm は全体としての財産とその構成部分のすべてについての記録を提供できるものを完全簿記 (Complete Book-keeping)、全体もしくは構成部分の一部の勘定が欠けているものを部分簿記 (Partial Book-keeping) と定義している。部分簿記の場合には、資本の大きさは実地棚卸によりその構成部分を集計する以外にこれを求めることができないが、完全簿記の場合には、構成部分の集計からとともに、資本勘定からも把握することができ、これら二つの結果の符合から帳簿の正確さが検証できるとされる。

もかかる基礎の上に立脚している。したがって、簿記にあっては財産をさまざまな部分から構成された全体とみて、資本勘定が資本の全体を記録し、現金勘定や商品勘定、人名勘定がその構成部分を記録するとすれば、完全な帳簿においては、必然的かつ不可避免的に、一方における資本勘定と、他方における残り

Cronhelm によれば、完全簿記は従来イタリア式簿記によってのみ充足されてきたが、しかし、この簿記法は記帳関係が煩雑で多くの時間と労力を必要とするので、これを改良して、イタリア式簿記の完全さと正確さ、および、単式簿記の簡便さを兼ね備えた新式の複式簿記として、既述の Booth や Kelly によって本格的に展開されるようになった分割仕訳帳制（特殊仕訳帳制）の採用を機軸とする簿記法を提示している。すなわち、そこにあるのは、従来のイタリア式簿記にみられる日記帳——仕訳帳——元帳という単純な三帳簿制は採られず、現金出納帳や受取手形記入帳、支払手形記入帳、商品有高帳といった複数の日記帳（＝分割日記帳）から元帳に直接的に転記されるのであり、売掛金の回収についてみれば、現金出納帳に借方記入されるとともに、同一金額が元帳に転記されるが、Cronhelm の場合には、現金出納帳それ自体が現金に関する元帳勘定として取り扱われるため、元帳においては相手方の人名勘定に対してのみ貸方記入され、帳簿全体の正確性は残高抽出表（＝繰越試算表）によって検証される。しかも、この残高抽出表は、かかる検証機能に加えて、各種の日記帳や元帳から独立して設けられた財産目録帳（Inventory）に収容されて、いわゆるイギリス式貸借対照表の体裁をもつ財産報告書としての機能をも担うというものであった。参考のために、Cronhelm が教示する残高抽出表（＝財産報告書）について、「範例」中に掲げられた各種帳簿の記帳例示から一例を選んで示せば、以下ようになる（Cronhelm [1818], pp. viii, 3-4, 12-23, 32-35, 64-65; cf. [1818], pp. 122-123, 214-215, 294-295, 374-375）。

Dr. THE ESTATE OF JOHN EVANS, WOOLLEN-DRAPER, HALIFAX, Cr.									
31st January 1817.									
L 1	To Johnson and Co. Balance due to them	107	3	6	M 2	By Merchandise, Balance as per Valuation	312	3	10
L 2	To Fraser and Son, Balance due to them	100	14	6	C 1	By Cash, Balance in hand	60	17	4
					L 1	By Wilson and Co. Balance due from them	360	11	8
		207	18	0					
L 1	To Stock, my net Capital	567	18	10	2	By Charles Green, Balance due from him	25	4	0
					2	By William Brown, Balance due from him	17	0	0
	£	775	16	10		£	775	16	10

の勘定すべてとの間に恒常的な均衡関係が存することになると説いている¹⁴²。

しかしながら、現実には資本の構成部分と同じ性質のもののみから成るのではなく、性質において相反する二種類の財産、つまり、商品や現金、受取手形、売掛金といった積極財産 (Positive Property) と、支払手形や買掛金といった消極財産 (Negative Property) が生じ、資本は、これら二種類の財産が相互に相殺された差額 (difference) に常に等しくなるとされる。ここに、全体としての資本ないし財産に三つの状態、つまり、「積極」 (Positive)、「中立」 (Neutral)、「消極」 (Negative) の各状態が生じるとして、その具体例を以下の〔事例1〕のように示している¹⁴³。

〔事例1〕

I. 積極財産

積極部分：商 品	£ 2000	
現 金	1000	
受取手形	500	
売 掛 金	1500	
		£ 5000

消極部分：支払手形	£ 800	
買 掛 金	1200	
		2000

資本、積極 £ 3000

(資本主は支払可能：£ 3000の剰余、つまり、純資本をもつ)

142) Cronhelm [1818], pp. 4-5.

143) Cronhelm [1818], pp. 5-6.

II. 中立財産

積極部分：商 品	£ 2000	
現 金	1000	
受取手形	500	
売 掛 金	1500	
		5000
消極部分：支払手形	1800	
買 掛 金	3200	
		5000
資本，中立		<u>£ 0</u>

(資本主は支払可能：ただし財産はなし)

III. 消極財産

消極部分：支払手形	£ 2000	
買 掛 金	4000	
		£ 6000
積極部分：商 品	2000	
現 金	1000	
受取手形	500	
売 掛 金	1500	
		5000
資本，消極		<u>£ 1000</u>

(資本主は支払不能：£1000の欠損をもつ)

このように、財産（資本）は積極部分と消極部分から構成された全体であり、それは常に構成部分の集計結果に等しいとみる観点から、Cronhelm は、勘定

記入にかかわる記帳原則を定立しようとする。すなわち、積極財産についてみれば、これを構成する部分はすべて資本主に対して同一の関係にあるはずであり、例えば、売掛金の勘定は借主との関係を担うがゆえに借方と定めれば、他の勘定も等しくこの関係を有することになるとして、積極部分は借方、消極部分は貸方というように、財産のすべての構成部分がきわめて機械的に借方と貸方に配分される。この場合に、全体としての資本も借方と貸方のいずれかに含まれる。なぜなら、資本主は、彼の財産のすべての積極部分に対して貸主、すべての消極部分に対して借主となるので、全体としての積極部分の超過額に対して貸方、あるいは、消極部分の超過額に対して借方となり、結果的に、帳簿を通じての借方と貸方との一般的均衡関係が成立すると説いている¹⁴⁴。

かかる関係を明らかにするために、Cronhelm は、先の〔事例1〕で示した事例を、以下のように、勘定形式に書き改めて再掲示している¹⁴⁵。すなわち、

〔事例2〕

I. 積極財産

積極部分、または借方		消極部分、または貸方	
商 品	£ 2000	支払手形	£ 800
現 金	1000	買 掛 金	1200
受取手形	500	資本(資本主の資本)	3000
売 掛 金	1500		
	<u>£ 5000</u>	——— 均 衡 ———	<u>£ 5000</u>

144) Cronhelm [1818], p. 6.

145) Cronhelm [1818], p. 7.

II. 中立財産

積極部分, または借方		消極部分, または貸方	
商 品	£2000	支払手形	£1800
現 金	1000	買 掛 金	3200
受取手形	500	資本(資本主の資本)	0
売 掛 金	1500		
	<u>£5000</u>	均 衡	<u>£5000</u>

III. 消極財産

積極部分, または借方		消極部分, または貸方	
商 品	£2000	支払手形	£2000
現 金	1000	買 掛 金	4000
受取手形	500		
売 掛 金	1500		
資本(資本主の資本)	1000		
	<u>£6000</u>	均 衡	<u>£6000</u>

彼は、上記の〔事例2〕において、資本が、財産が「積極」の状態の時に消極の側に現れ、財産が「消極」の状態の時に積極の側に現れるのは、結局、借方と貸方の一般的関係において、財産ないし企業それ自体が資本主から抽象化され、資本ないし資本主の勘定もその構成部分として取り扱われるからであると述べ、資本主の財産が積極的であれば、企業はその財産について他の人に対するのと同様に資本主に対しても借主となり、したがって、資本主は貸方項目の中に含まれることになる¹⁴⁶と述べている。

146) Cronhelm [1818], pp. 7-8.

さらに、Cronhelmは、議論を進めて、先の〔事例2〕のように、企業を資本主から抽象化して、資本勘定を財産の構成部分の中に位置づけるとすれば、企業それ自体は永続的かつ必然的均衡関係の中で絶えず中立の状態となり、かかる抽象化された企業は常に零（cypher）の状態となって、すべての構成部分は等しく相互に依存することになると説く。したがって、資本のみが他の勘定のすべてを集計した結果となるのではなく、あらゆる勘定もまた同様なやり方で求めることが可能になるという。例えば、〔事例2〕のIにおいて商品勘定の有高を求めようとすれば、それは、次の〔事例3〕に示すように、他のすべての勘定を集計することにより把握できるのである¹⁴⁷。

〔事例3〕

貸 方 :	支払手形	£ 800	
	買 掛 金	1200	
	資 本	<u>3000</u>	
			£5000
借 方 :	現 金	£1000	
	受取手形	500	
	売 掛 金	<u>1500</u>	<u>3000</u>
結 果 :	商 品		<u>£2000</u>

同様な過程を通じて、他の如何なる勘定も求めることができるとして、Cronhelm は、ここから、すべての勘定はそれを除く残余の勘定の総和に等しく、すべては相互に依存し調和していることが明らかになると述べ、かかる関係を代数式を用いてより簡潔に表現しようとする。

147) Cronhelm [1818], p. 8.

いま, $a, b, c, \&c.$ が積極部分ないし借方を, また, $l, m, n, \&c.$ が消極部分ないし貸方を表し, s が資本ないし資本主の正味財産を表すとすれば, 全体はその部分の総和に等しいということから, 次の等式が得られる。

$$a + b + c, \&c. - l - m - n, \&c. = \pm s \quad (1)$$

この等式 (1) こそ, 今日われわれが資本等式と呼んでいるものに他ならないのである。

さらに, Cronhelm は, 上記の等式 (1) の右辺にある s を左辺に移項することによって, 下記の等式を展開しており,

$$a + b + c, \&c. - l - m - n, \&c. \mp s = 0 \quad (2)$$

かかる等式 (2) ——彼はこれを「一般等式」(general equation) と名づけている ——からは, 資本主から抽象化された全体財産ないし企業が中立 (零) の状態にあり, 資本もまたその構成部分の一つとして含まれる関係が明らかにされていると説く。

そして, 例えば, 下記の等式 (3) ないし (4) のように, 等式 (2) の左辺にある任意の項 a , あるいは, l を右辺に移項することから得られる等式すなわち,

$$b + c, \&c. - l - m - n, \&c. \mp s = -a \quad (3)$$

$$a + b + c, \&c. - m - n -, \&c. \mp s = l \quad (4)$$

は, 財産の任意の構成部分 a ないし l が, s を含む他の構成部分を集計したものに等しい, つまり, より一般化していえば, 帳簿上の如何なる借方や貸方も他の借方と貸方の集計された結果に等しいという関係を明確に表していると述べている¹⁴⁸。

次に, Cronhelm は, これまで「均衡の原理」をもっぱら財産の静的状態において考察してきたが, 彼は, この均衡関係が動的な状況下においても等しく

148) Cronhelm [1818], pp. 8-9.

成立することを明らかにしようとする。すなわち、Cronhelm は、期首と期末という二つの静的な状態で企業に貸借の均衡が存在するとすれば、等しいものに等しいものを加えれば総和は等しく、逆に、等しいものから等しいものを控除すれば残余もまた等しいという数学の公理から導かれるように、期中のすべての事象に同じ均衡関係が存することは自明のことであるとする。同時にまた、財産にかかわる取引の性質からみても、取引の過程にある財産の構成部分は絶え間ざる変動と変化の渦中にあるが、例えば、仕入では現金が商品に転換し、販売では商品が再び現金に転換するというように、あらゆる取引において二つの勘定が影響を受け、一方は他方が与えるものを受け取り、与えた側の勘定は常に貸方、受け取った側は常に借方となるので、如何なる事象においても借方と貸方とは完全に均衡すると説いている¹⁴⁹。

149) Cronhelm [1818], p. 9.

1.2.でも論及したように、Peele の *Maner and Fourme* 以来、イギリス簿記書にみられる一つの伝統を形成してきた擬人的受渡説に従った仕訳規則の残滓は、上記の「与えた勘定は常に貸方、受け取った勘定は常に借方」という表現からもうかがえるように、資本等式説に基づくアプローチにより簿記教授法の近代化・理論化を図った Cronhelm の簿記書においてさえ見出すことができる。そしてまた、かかる擬人的受渡説の影響は、彼に先行する Kelly の簿記書により明確に認めることができる。すなわち、Kelly は、*Elements of Book-keeping* において、仕訳の一般規則を、次のように提示している。

What I receive is Dr. to what I give or part with.

さらに、Kelly は、元帳勘定を人名勘定・实在勘定・擬制勘定に三分類する中で、これらの勘定群に対する貸借記入の原則を学習者が記憶する一助にと、次のような韻文形式で、これを示しているのである。

By Journal Laws — what I receive
Is Debtor made, to what I give;
Stock for my Debts must Debtor be
And Creditor by Property;
Profit and Loss Accounts are plain,
I debit Loss, and credit Gain.

このことから、複式簿記の教示にあたり、19世紀に入ってもなお旧来の擬人的受渡説に拠った仕訳規則を提示する手法がイギリスの簿記書に残存し、むしろ、これをかなりの程度支配していたということが明らかになろう (Kelly [1801], pp. 6-7)。

さらにまた、彼は、借方と貸方との調和は、利益や損失、つまり、資本の増減によっても妨げられることがないと述べている。すなわち、全体における個々の変化はその構成部分における対応した変化によってのみ引き起こされ、例えば、原価を上回って商品が販売された時、利益相当部分は商品勘定（商品有高帳）に借方記入されるとともに、資本勘定に貸方記入されるというように、二つの勘定、つまり、資本勘定とその構成部分の勘定が常にかかる変化によって影響を及ぼされ、結果として貸借の均衡関係は維持されると説かれるのである¹⁵⁰。

このように、Cronhelm によれば、貸借の均衡は、取引の本質とともに、全体はその構成部分の総和に等しいという公理から根拠づけられ、かかる均衡関係は、動的・静的いずれの状態にあるにせよ、財産に本質的に内在するものであるとして、このような均衡関係をもって複式簿記の基本原則と定めているのである¹⁵¹。

そして、彼は、この「均衡の原理」に基づき、II. でみたような元帳勘定三分類の教示、つまり、Malcolm や Mair などの簿記書に見出される人名勘定・実在勘定・仮想または擬制勘定（名目勘定）という三つの勘定群からなる勘定分類の体系を批判し¹⁵²、かかる三勘定分類を超えて、次頁の（表1）に示

150) Cronhelm [1818], pp. 9-10 ; cf. [1818], pp. 19-23, 28-29.

151) Cronhelm [1818], p. 10 ; cf. [1818], p. vi.

152) Cronhelm は、人名勘定・実在勘定・擬制勘定という元帳勘定の三分類ほど滑稽なものはないとして、人名勘定は果たして実在しないのか、あるいは、実在もしないし擬制でもない別のものなのか、資本ないし資本主の勘定は単なる擬制なのか、損益の勘定も同じ空想的な性質のものかといった問いかけを行うとともに、資本主は彼の資本の勘定から何か実質的なものを見出すことを期待するであろうが、簿記の教師達はそれがすべて擬制ないし仮想上のものと断言しているとの批判を加えている（Cronhelm [1818], p. 27 ; cf. [1818], p. viii）。

すような、財産の部分と全体財産という、相対立する二つの勘定群からなる新たな勘定分類の体系を提示している¹⁵³。すなわち、

表1 Cronhelmによる勘定分類の体系

分 類	分 割	細 分 割
1. 財産の部分	1. 人 名	
	2. 貨 幣	{ 1. 現 金 2. 支払手形 3. 受取手形
	3. 物 財	{ 1. 商 品 2. 不 動 産 3. 約定公債
2. 全体財産	分 岐	分 枝
資 本	1. 利 益	{ 1. 手 数 料 2. 利 息 等
	2. 損 失	
	3. 個人勘定	

153) Cronhelm [1818], p. 27.

なお、Cronhelm 簿記書にみられる資本主理論的な二勘定分類の思考は、彼以前のイギリスの簿記書、例えば、先の注129) で言及した Fulton の *British-Indian Book-keeping* にも見出される。Fulton は、この簿記書の序文において、複式簿記の重要な目的を、資本勘定の真の状態を確認すること、および、資本勘定それ自体の残高を他のすべての勘定を集合した残高によって検証することと規定する。そして、かかる目的に照らして、實在勘定と人名勘定といった分類は重要でなく、資本勘定とその他の勘定との分類こそが不可欠であるとして、元帳勘定を、(1)理想勘定 (Ideal Accounts)、つまり、資本勘定とそれが分岐した利益や損失、費用などの勘定と、(2) 實在勘定 (Real Accounts—人名勘定を含む)、つまり、現金や商品その他の財産や債務などの勘定という、二つの勘定群に大別している (Fulton [1800], pp. 8-11)。

さらにまた、ネーデルラントの簿記書に目を転じれば、Fulton や Cronhelm の簿記書よりも1世紀余りも前に出版された Willem van Gezel の *Kort begryp van 'tbeschouwig onderwijs in't koopmans boekhouden* (1681) にも、同様な二勘定分類の先駆的思考が見出される。すなわち、van Gezel によれば、すぐれた勘定組織は、商人に対して、彼の「状態」(staat—position) に関する二種類の情

前掲した勘定分類の体系のうち、第二分類に属する全体財産の勘定群については、第一の分類におけるような上位の勘定から下位の勘定へという勘定の分割 (divisions) や細分割 (subdivisions) はみられず、あるのはただ分岐 (branches) ないし分枝 (ramifications) のみであるとされる。すなわち、利益と損失の勘定は資本勘定が単に分岐されたものに他ならず、その目的は資本勘定に多数の小口記入が行われるのを避け、資本の個々の増減を集計して資本勘定に一括して振り替えることにある。同様に、手数料や利息等の勘定も損益の勘定の分枝として、後者に小口の記入が行われるのを回避して、その個別の集計結果のみを利益または損失の勘定に一括的に振り替えることにあると述べて、Cronhelm は、これまで人名勘定や実在勘定の相手方勘定の欠如を補う仮想的ないし擬制的な勘定としてしか説明されてこなかった損益にかかわる勘定を、資本とその構成部分との均衡関係から、資本勘定の明細ないし内訳の勘定として明確に位置づけているのである¹⁵⁴。

供するとされる。つまり、「要約」(volstrekt—summary) の情報—取引の開始にあたっての資本の大きさと、折々の資本の増加ないし減少の程度と理由についての情報—、および、「個別」(opzichtelij—particular) の情報—あらゆる取引相手や、現金、取引商品についての情報—である。そして、van Gezel は、かかる二種類の情報を提供するという観点から、もっとも一般的レベルにおいて、すべての元帳勘定を、(1) 商人の状態に関する要約的信息を表示する「自身」(eigene—own) の勘定と、(2) 現金や商品、債権・債務に関する個別的信息を提供する「反対」(tegengestelde—contrary) の勘定という二つのクラスに分類する。しかも、これら二つの勘定群は残高勘定を作成する際に相互検証するものとされるのである。ただし、この van Gezel の簿記書は、その当時の大多数の簿記書と大きく異なっていたために、そこに盛り込まれた二勘定分類の思考も19世紀に至るまで広く受け入れられることはなかったといわれる (Yamey [1974], pp. 155-156; Bywater and Yamey [1982], pp. 123-124)。

154) Cronhelm [1818], pp. 10, 28.

なお、Cronhelm は、種々な源泉から生じる成果を明確に示すために、利益と損失が一つの勘定に収容される一般的な意味での損益勘定は用いず、利益と損失のそれぞれを集計する二つの勘定を個別に設けている (Cronhelm [1818], pp. 30-31)。

Ⅲ. 3. 簿記教授法の変遷と資本主理論的簿記論

——簿記教授法としての資本主理論の登場——

既に本稿のⅠ以降でみてきたように、イギリスの大多数の簿記書は、Peeleの *Maner and Fourme* 以来、Ⅱ. 2. で検討した Malcolm のような例外は認められるものの、概ね伝統的な仕訳帳アプローチに依拠しながら複式簿記の教示を進めてきた。すなわち、仕訳帳における取引の貸借分析に教示の重点を置き、これを援助するために、物の受渡しと人的関係とを絡めた擬人的受渡説に基づく仕訳規則を、取引例や帳簿の記帳例示とともに提示し、これらを学習者に暗誦・暗記させることによって、各種取引の仕訳パターンの認識を中心に、複式簿記を教授しようとする手法が採用されてきたのである。しかも、かかるアプローチは、当初はさまざまな形態を採る取引の貸借分析に共通する一般的で包括的な指針としてきわめて概括的な規則を示すものであったが、次第に、Defforne の *Merchants Mirrour* にみられるような、規則それ自体が半ば取引例化した、各種形態の取引に対応する具体的で詳細な仕訳処理上の指針を提示する方向へと変化していった。しかしながら、このような詳細かつ多岐にわたる多数の仕訳規則を、せいぜい一般規則と個別規則という程度に構造的に整序するのみで、何らの理論的根拠も示すことなく、ただ機械的な反復練習によって暗誦・暗記させようとすることは、複式簿記の習得を援助するという仕訳規則定立の本来の趣旨に反するばかりでなく、複式簿記の学習そのものをきわめて退屈で困難なものとしたに違いない。

このような状況の下で、18世紀に入り、例えば、Malcolm の *New Treatise of Arithmetick and Book-keeping* にみられるような、仕訳規則と記帳例示の暗誦・暗記を中心とする従来のアプローチから脱却し、教示の理論化・体系化を図ろうとする簿記教授法近代化の試みが企てられるようになる。しかしながら、Malcolm の試みはおそらくは従来の教科書に慣れた当時の読者にとっては難解にすぎて、必ずしも十分な支持を得られることがなかった。それゆえ

に、彼に続く Mair は、再びイギリス簿記書の伝統的な教授法であった仕訳帳アプローチに回帰し、かかるアプローチの下で教示内容の体系化・近代化を図るという手法を採ることによって、結果的に多数の読者を獲得し、彼の *Book-keeping Methodiz'd* は、その改訂版にあたる *Book-keeping Moderniz'd* と合わせて、彼の死後を含め、およそ70年の長きにわたって版を重ねるという、当時の簿記教科書の標準版ないし決定版ともいべき存在になった。ここに至って、Paciolo 以来のイタリア式貸借簿記（＝ヴェネツィア式簿記）の伝統を継承した教科書としての簿記書の体系化はひとまず完成の域に達したのである。他方、産業革命期にみられたイギリス経済の大きな変動、特に国内商業や海外貿易の著しい発展を背景に、Booth の *Complete System of Book-keeping* に代表されるような、必ずしも現実の会計実務の動きを十分に反映していない教科書の簿記書の教示内容に満足しない商人達によって著された、当時の大規模商業経営の会計実務に直接適用できることを目指した実践的簿記書も18世紀の末頃から現れるようになる。前節で検討した Cronhelm の *Double Entry by Single* は、このような18世紀当時のイギリスの簿記書にみられる二つの流れ、つまり、大多数を占める教科書の簿記書の系統と、これに対置される実践的簿記書の系統とを総合・止揚しようとする試みの中で出版されたものと位置づけられる。

この Cronhelm の簿記書は、Booth によってはじめて本格的に説かれた分割日記帳制（特殊仕訳帳制）の採用を中核とした実践的簿記書としての性格を有するとともに、複式簿記の理論的指導の側面においても、先の Malcolm 簿記書をも超えた、きわめて斬新なアプローチを採っている。すなわち、もっぱら取引例に基づく多数の個別的仕訳規則の集合から成っていたかつての簿記書の限界を認識し、ここから大きく離脱して、単なる取引の貸借分析に関する仕訳処理上の指針を超えた複式簿記全体の基本的計算原理を解明するための枠組みを与えるものとして、資本主理論に基づく資本等式を提示しているのである。

Cronhelm にあっては、簿記は、資本主に対して彼の資本全体の価値とその構成部分の価値とをいつ如何なる時にでも明示できるように財産を記録する技法であると定義され、かかる資本主に対する財産の管理・報告の手段として規定された簿記は、全体は部分の総和に等しい、つまり、財産の全体はその構成部分の総和に等しいという明解かつ単純な「均衡の原理」に依拠するものであることが明らかにされている。しかも、彼は、この関係をきわめて的確に、以下に示すような代数式を用いて表現している。

$$a + b + c, \& c. - l - m - n, \& c. = \pm s$$

この等式は、今日、われわれが〈資産－負債＝資本〉、あるいは、〈積極財産－消極財産＝純財産〉という形式で表現している資本等式に他ならず、Cronhelm は、かかる等式によって表される「均衡の原理」を見落としていたがゆえに、これまでの簿記書において曖昧で混乱・錯綜した教示がもたらされ、複式簿記の学習を困難なものたらしめていたと説く。

そして、彼は、この資本等式に従い、従来の簿記書にみられた元帳勘定の人名勘定・実在勘定・名目勘定への三分類を批判し、資本主理論ないし物的二勘定系統説（純財産学説）的な思考に基づく勘定分類の体系、つまり、資本とその構成部分とを相対立させた二つの勘定群から成る新たな勘定体系を提示しているのである¹⁵⁵。

155) アメリカ的な会計主体論における資本主理論と企業実体理論、およびドイツ的な勘定理論における物的二勘定系統説（純財産学説）と貸借対照表学説のそれぞれが主張する特徴点を捉えて、これらを、資本主理論—物的二勘定系統説と、企業実体理論—貸借対照表学説という二つのグループに整理し把握することについては検討の余地が残されているかもしれないが、ここでは、ドイツ語圏のみならず、広くイギリスやアメリカなどの文献を渉猟し、勘定学説の系統的分類を試みた Karl Käfer の所説に従っておくことにする（Käfer [1966], pp.18-30（安平訳[1972], 35-61 頁）；Vgl. Käfer [1974], S.52-57）。

このように、Cronhelm は、*Double Entry by Single* において、従来の擬人的受渡説的思考からの離脱を明確に示した資本主理論的観点に立っての簿記論の展開を図っており、そこにみられるアプローチや問題の取り上げ方はきわめて斬新かつ近代的なものであった。反面、これを教科書として用いるには当時の水準からみてあまりにも革新的な内容であったがゆえに、当該簿記書が出版の直後に出版元の火災のためにそのほとんどを焼失してしまったという事実と相まって、Cronhelm の影響はその後のイギリス簿記書にほとんど見出されず、したがってまた、彼の提示した資本主理論的思考も簿記法教示の基礎を成すものとしてイギリスで受け入れられるに至らなかった。むしろ19世紀の簿記書の大部分は、なお旧来の教則と多数の実践例による手法に依拠していたといわれるのである¹⁵⁶。

しかしながら、Cronhelm によって本格的な理論化の先鞭がつけられた資本主理論ないし物的二勘定系統説的思考は、その後、アメリカにおいて、Benjamin F. Foster や Thomas Jones を介して、19世紀末から20世紀はじめに Charles E. Sprague と Henry R. Hatfield によってその完成をみるのであり、同様に、ドイツ語圏でも、Franz Hautschl,あるいは、G. D. Auguspurg や George

156) Yamey [1978a], pp. 1, 4-5; Holmes [1985], p. 130; cf. Littleton [1933], p. 181 (片野訳 [1978], 227-278頁); Jackson [1956], pp. 311-312; Yamey [1974], p. 154.

ただし、Cronhelm の影響がその後のイギリス簿記書に全く見出されないというわけではない。例えば、Charles Hutton の *Complete Treatise on Practical Arithmetic and Book-keeping*, 特に彼の死後 J. Trotter によって改訂が施された1871年版においては、簿記の目的や、均衡の原理とこれに基づく勘定分類の体系など、きわめて Cronhelm の簿記書に類似した内容が盛り込まれており、しかも、この Hutton の簿記書が明治初期に『日用簿記法』として当時の大蔵省から抄訳・出版されていることは、わが国への複式簿記の導入過程を考えると、きわめて興味深い事実となっている(鈴木 [1986a], 25-28頁; [1986b], 150-169頁; cf. 西川 [1971], 199-200頁; [1982], 123-139頁)。

Kurzbauer を介して、やはり19世紀末から20世紀初頭に Friedrich Hügli と Johann F. Schär によってその理論的体系化が確立される¹⁵⁷⁾。

その後におけるこのような展開を勘案すれば、会計学の本格的な出現を前に、これらの人々から独立して、しかも、いち早く資本主関係に着目し、これを機軸に論理を展開させて、複式簿記の基本構造をきわめて明快に説明したという点で、Cronhelm 簿記論のもつ理論的先駆性はきわめて高く評価されるものと考えられる。

このような Cronhelm にみられる先駆的な理論展開の後を受けて、1830年代から20世紀初頭にかけてのアメリカにおいて、Foster や Jones,あるいは、Sprague や Hatfield らによって本格的に展開された、簿記ないし会計の説明理論としての資本主理論の理論的体系化の歴史については別稿に委ねることにして、ひとまず本稿を閉じることにしたい。

(1990.10.25)

157) ドイツ語圏で Auguspurg や Hügli, Schär などによって展開された物的二勘定系統説—資本主理論的思考については、もっぱら勘定理論ないし勘定学説の史的研究の中で分析されている。その詳細については、例えば、安平 [1976b]; [1986] を参照されたい (Cf. Littleton [1927]; 梶中 [1932]; Scheerer [1950] (安平訳 [1969]); Käfer [1966] (安平訳 [1972]); [1974])。

参考文献

- 天川潤次郎 [1966]『デフォー研究—資本主義経済思想の一元流—』未来社。
- 飯島啓二訳 [1987]『W. フェルガソン著 近代スコットランドの成立—18—20世紀スコットランド政治社会史—』未来社。
- 飯塚正朝 [1990]『『国富論』と18世紀スコットランド経済社会』九州大学出版会。
- 五十嵐喬 [1964]『イギリス商業史』御茶の水書房。
- 石坂昭雄・壽永欣三郎・諸田 實・山下幸夫 [1980]『商業史』有斐閣。
- 石坂昭雄・船山栄一・宮野啓二・諸田 實 [1985]『新版 西洋経済史』有斐閣。
- 伊藤 栄 [1971]『西洋商業史』東洋経済新報社。
- 大河内暁男 [1977]「イギリスの産業革命」, 大塚久雄編著『西洋経済史』(第二版 経済学全集4) 筑摩書房, 1977年, 162-203頁。
- [1978]『産業革命期経営史研究』岩波書店。
- 大塚久雄 [1969a]『株式会社発生史論』(大塚久雄著作集第一巻) 岩波書店。
- [1969b]『近代欧州経済史序説』(大塚久雄著作集第二巻) 岩波書店。
- 越智武臣 [1969]「ヨーロッパ経済の変動」, 『岩波講座 世界歴史14 近代1—近代世界の形成I—』岩波書店, 1969年, 107-172頁。
- 片岡泰彦 [1988]『イタリア簿記史論』, 森山書店。
- 訳 [1990]「B. S. ヤーメイ 会計学文献概観(1449年~1800年)」 会計, 第137巻第4号, 569-586頁。
- 川北 稔 [1990]『民衆の大英帝国—近代イギリス社会とアメリカ移民—』岩波書店。
- 岸 悦三 [1975]『会計生成史—フランス商事王令会計規定研究—』同文館。
- 北 政巳 [1974]「産業革命期スコットランドの教育組織に関する一考察」 創価経済論集, 第4巻第1号, 49-79頁。
- [1985]『近代スコットランド社会経済史研究』同文館。
- 久野光朗 [1985]『アメリカ簿記史—アメリカ会計史序説—』同文館。
- 栗原福也 [1969]「ネーデルラント連邦共和国」, 『岩波講座 世界歴史15 近代2—近代世界の形成II—』岩波書店, 1969年, 79-139頁。
- 小島男佐夫 [1962]「ジョーンズの英国式簿記」 商学論究, 第39号, 1-39頁。
- [1964]『簿記史論考』森山書店。
- [1971]『英国簿記発達史』森山書店。
- [1973a]「商品勘定の総括化と分割」 商学論究, 第20巻第1号, 1-24頁。
- [1973b]『簿記史』森山書店。

- [1974]「ダフォルネ第二の簿記書」, 大阪経済大学経営研究所編『経営経済学の基調』森山書店, 1974年, 107-123頁。
- [1977]「R. コリンソン『アイデア・ラチョナリア』—スコットランド最初の簿記書—」産業経理, 第37巻第5号, 42-48頁。
- [1978a]「スコットランド初期会計書の事情」産業経理, 第38巻第6号, 38-45頁。
- [1978b]『会計史資料研究』大学堂書店。
- [1979]「マクギー『簿記の諸原理』の研究」産業経理, 第39巻第11号, 48-58頁。
- [1980a]「マクギー簿記書詳解」商学論究, 第27巻第1・2・3・4号合併号, 221-243頁。
- [1980b]「ランディン簿記書研究」産業経理, 第40巻第8号, 27-36頁。
- [1987]『会計史入門』森山書店。
- [1988]「ビール簿記書考」商学論究, 第26巻第2号, 1-23頁。
- 編著 [1979]『会計史および会計学史』(体系近代会计学VI) 中央経済社。
- 小林照夫編著 [1985]『イギリス近代史研究の諸問題—重商主義時代から産業革命へ—』丸善。
- 小峰理介 [1985]「18世紀スコットランド・タバコ貿易に関する覚書」, 小林照夫照編著 [1985], 194-219頁。
- 柴田三千雄 [1970]「総説」, 『岩波講座 世界歴史17 近代4—近代世界の展開I—』岩波書店, 1970年, 3-26頁。
- 白井佐敏 [1961]『複式簿記の史的考察』森山書店。
- 鈴木 嘉 [1986a]「『日用簿記法』の原書について」日本簿記学会年報, 創刊第1号, 25-28頁。
- [1986b]「チャールズ・ハットンによる複式簿記—西洋式会計の源流について—」商学論集(福島大学), 第55巻第2号, 139-169頁。
- 田中敏弘編著 [1989]『スコットランド啓蒙と経済学の形成』日本経済評論社。
- 田中正司 [1988]『アダム・スミスの自然法学—スコットランド啓蒙と経済学の生誕—』御茶の水書房。
- 編著 [1988]『スコットランド啓蒙思想研究—スミス経済学の視界—』北樹出版。
- 遅塚忠躬 [1970]「経済史上の十八世紀」, 『岩波講座 世界歴史17 近代4—近代世界の展開I—』岩波書店, 1970年, 27-78頁。
- 中川敬一郎 [1986]『イギリス経営史』東京大学出版会。
- 中野常男 [1976]「16世紀英国会計事情の一側面」国民経済雑誌, 第134巻第3号, 71-90頁。
- [1977a]「17—18世紀英国会計事情の一考察」国民経済雑誌, 第135巻第1号, 70-90頁。

- [1977b] 「17世紀英国東インド会社の会計事情に関する一考察」 経営学・会計学
商学研究年報（神戸大学経営学部），XXIII，315-360頁。
- [1978] 「資産評価の系譜－評価学説研究序説－」 国民経済雑誌，第137巻第3号，
84-105頁。
- [1982] 「複式簿記の損益計算機能の関する一考察－16～18世紀の英国会計にお
ける冒險取引勘定の役割について－」 経営学・会計学・商学研究年報（神戸大学
経営学部），XXVIII，1-31頁。
- [1987] 『クロンヘルム簿記論（1818）の基本構造－簿記教授法の変遷と資本主
理論の形成－』 国民経済雑誌，第156巻第2号，51-78頁。
- [1989] 「フォスター簿記論（1836）の研究－アメリカへの資本主理論的簿記論
の移植過程について－」 国民経済雑誌，第159巻第6号，53-77頁。
- [1990a] 「『ヴェニス商人』と複式簿記－パチョーロ簿記論とヴェネツィア式
簿記－」 国民経済雑誌，第161巻第6号，35-58頁。
- [1990b] 「産業革命とイタリア式貸借簿記の革新－クロンヘルム簿記論（1818）
を中心として－」 会計，第138巻第2号，185-202頁。
- 西川孝治郎 [1982] 『文献解題 日本簿記学生成史』 雄松堂。
- 畠中福一 [1932] 『勘定學説研究』 森山書店。
- 東爽五郎 [1903] 『新案詳解 商業簿記』 大倉書店。
- 久野秀男 [1979a] 「イギリス会計史－英国簿記書の文献史的研究－」，小島編著 [1979]，
189-223頁。
- [1979b] 『英米（加）古典簿記書の発展史的研究』 学習院。
- [1984] 「資本等式（説）の系譜と課題」 経済論集（学習院大学），第20巻第3号，
1-56頁。
- 水田 洋 [1968] 『アダム・スミス研究』 未来社。
- 宮上一男 [1952] 『工業会計制度の研究』 山川出版社。
- 村岡健次・川北 稔編著 [1986] 『イギリス近代史－宗教改革から現代まで－』 ミネル
ヴァ書房。
- 茂木虎雄 [1969] 『近代会計成立史論』 未来社。
- [1974] 「イギリス東インド会社の会計帳簿」 立教経済学研究，第28巻第3・4
号，333-359頁。
- [1975] 「十七・八世紀イギリス会計史の研究」 立教経済学研究，第29巻第3号，
83-120頁。
- 安平昭二 [1979a] 「勘定学説史」，小島編著 [1979]，331-347頁。
- [1979b] 『簿記理論研究序説－スイス系学説を中心として－』 千倉書房。

- [1986]『簿記・会計学の基礎—シェアーの簿記・会計学を尋ねて—』同文館。
- 四元忠博 [1985]「産業革命と植民地貿易」, 小林照夫編著 [1985], 220-246頁。
- 渡邊 泉 [1983]『損益計算史論』森山書店。
- Ashton, T. S. [1948], *The Industrial Revolution, 1760-1830*, London (中川敬一郎訳 [1953]『アシュトン 産業革命』(岩波現代叢書) 岩波書店)。
- Bennett, J. [1820], *The American System of Practical Book-keeping, Adapted to the Commerce of the United States*, -----, New York.
- Booth, B. [1789], *A Complete System of Book-keeping, by an Improved Mode of Double-Entry*: -----, London.
- Brief, R. P. (ed.) [1982], *Four Classics on the Theory of Double-Entry Bookkeeping*, New York.
- Brown, R. (ed.) [1905], *A History of Accounting and Accountants*, Edinburgh.
- Bywater, M. F. and Yamey, B. S. [1982], *Historic Accounting Literature: a companion guide*, London.
- Campbell, R. H. [1985], *Scotland since 1707: The Rise of an Industrial Society*, 2nd ed., Edinburgh.
- Carpenter, J. [1632], *A Most Excellent Instruction for the Exact and perfect keeping Merchants Bookes of Accounts, by Way of Debitor and Creditor, after the Italian manner*: -----, London.
- Chandler, A. D., Jr. [1977], *The Visible Hand: The Managerial Revolution in American Business*, Cambridge, Massachusetts (鳥羽欽一郎・小林袈裟治訳 [1979]『経営者の時代(上・下)』東洋経済新報社)。
- Chatfield, M. [1977], *A History of Accounting Thought*, revised ed., Huntington, New York.
- Clapham, J. [1957], *A Concise Economic History of Britain: From the Earliest Times to 1750*, Cambridge (山村延昭訳 [1979/1981]『イギリス経済史概説(上巻・下巻)』未来社)。
- Colinson, R. [1683], *Idea Rationaria, or the Perfect Accomptant, Necessary for all Merchants and Trafficquers; Containing the True Forme or Book-keeping, According to the Italian Methode*: -----, Edindurgh.
- Connel-Smith, G. [1951], "The Ledger of Thomas Howell," *The Economic History Review*, Vol. III, No. 3, pp. 363-370.
- Coomber, R. R. [1956], "Pioneers in English Book-keeping Texts—Hugh Oldcastle and John Mellis," *Accounting Research*, Vol. VII, No. 2,

pp. 201-216.

- Court, W. H. B. [1954], *A Concise Economic History of Britain: From 1750 to Recent Times*, Cambridge (荒井政治・天川潤次郎訳 [1957]『W. コート イギリス近代経済史』ミネルヴァ書房).
- Cronhelm, F. W. [1818], *Double Entry by Single: a New Method of Book-keeping, Applicable to All Kinds of Business; -----*, London.
- Dafforne, R. [1635], *The Merchants Mirrour: or, Directions for the Perfect Ordering and Keeping of his Accounts; -----*, London.
- [1670], *The Apprentices Time-Entertainer Accomptantly: or A Methodical means to obtain the Exquisite Art of Accomptantship: -----*, 3rd ed., London (1st ed., London, 1640; reprinted ed., London, 1978).
- Dodson, J. [1750], *The Accountant, or the Method of Book-keeping, Deduced from Clear Principles, -----*, London.
- de Roover, R. [1937], "Something New about Jan Ympyn Christffels," *The Accountant*, Vol. XCVII, No. 3284, pp. 657-658.
- Edwards, J. R. [1989], *A History of Financial Accounting*, London.
- Edwards, R. S. [1937], "Some Notes on the Early Literature and Development of Cost Accounting in Great Britain - I ~ VI," *The Accountant*, Vol. XCVII, No. 3270, pp. 193-195; Vol. XCVII, No. 3271, pp. 225-231; Vol. XCVII, No. 3272, pp. 253-255; Vol. XCVII, No. 3273, pp. 283-287; Vol. XCVII, No. 3274, pp. 313-316; Vol. XCVII, No. 3275, pp. 343-344.
- Forrester, D. A. R. [1978], "Wether Malcolm's is Best or Old Charge & Discharge," *The Accounting Historians Journal*, Vol. V, No. 2, pp. 51-61.
- Foster, B. F. [1836], *A Concise Treatise on Commercial Book-keeping, Elucidating the Principles and Practice of Double Entry and the Modern Methods of Arranging Merchants' Accounts*, Boston.
- Fulton, J. W. [1800], *British-Indian Book-keeping: A New System of Double Entry and Progressive Adjustment: -----*, London.
- Garner, S. P. [1954], *Evolution of Cost Accounting to 1925*, University, Alabama (品田誠平・米田清貴・園田平三郎・敷田礼二訳 [1958]『原価計算の発展-1925年まで-』一粒社).
- Geijsbeek, J. B. [1914], *Ancient Double-Entry Bookkeeping: Lucas Pacioli's Treatise reproduced and translated with reproductions, notes and*

- abstracts from Manzoni, Pietra, Mainardi, Ympyn, Stevin and Dafforne, Denver, Colorado.
- Gordon, C. [1954], "The First English Books on Book-keeping" (*Accounting Research*, Vol. V, No. 3 (1954), pp.215-218), reprinted in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.202-205.
- Gordon, W. [1765], *The Universal Accountant, and Complete Merchant*, Vol. II, 2nd ed., Edingburgh.
- Hain, H. P. [1980], *Uniformity and Diversity: The Development of Classification Concepts in Double Entry Bookkeeping*, Vols. I & II, New York.
- Hamilton, R. [1788], *An Introduction to Merchandise. containing -----, Book-Keeping in Various Forms, -----*, 2nd ed., Edinburgh (1st ed., Edinburgh, 1777/1779).
- [1818], *An Inquiry concerning the Rise and Progress, the Redemption and Present State, and the Management, of the National Debt of the Great Britain and Ireland*, 3rd ed., Edingburgh (1st ed., Edinburgh, 1813).
- Hasson [1932], "The South Sea Bubble and Mr. Snell" (*The Journal of Accountancy*, Vol. LIV, No. 2 (1932), pp.128-137), reprinted in Chatfield, M. (ed.), *Contemporary Studies in the History of Accounting Thought*, Belmont, California, 1968, pp.86-94.
- Hatfield, H. R. [1924], "An Historical Defense of Bookkeeping," *The Journal of Accountancy*, Vol. XXXVII, No. 4, pp.241-253.
- Hatton, E. [1695], *The Merchant's Magazine: or, Trades-man's Treasury*. -----, London (reprinted ed., New York, 1982).
- Holmes, R. T., Jr. [1985], Book Review of: *Double Entry by Single*, by Cronhelm, F. W., *The Accounting Historians Journal*, Vol. XII, No. 2, pp.129-131.
- Institute of Chartered Accountants in England and Wales [1975], *Historical Accounting Literature*, London.
- Institute of Chartered Accountants of Scotland [1954], *A History of the Chartered Accountants of Scotland: From the Earliest Times to 1954*, Edinburgh (reprinted ed., New York, 1984).
- [1976], *Accountants' Book Collection 1494-1930*, 3rd ed., Edinburgh.

- Jackson, J.G.C. [1956], "The History of Methods of Expositions of Double-entry Book-keeping in England," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.288-312.
- Johnson, S. [1755/1756], *A Dictionary of the English Language: in which the Words are deduced from their Originals, and Illustrated in their Different Significations by Examples from the best Writers* ----, in Two Volumes, 2nd ed., London.
- Jones, E. T. [1796], *Jones's English System of Book-keeping, By Single or Double Entry*, ----, Bristol.
- Käfer, K. [1966], *Theory of Accounts in Double-Entry Bookkeeping*, Urbana, Illinois (安平昭二訳 [1972]『ケーファー複式簿記の原理』千倉書房).
- [1974], *Grundzüge der Buchhaltungs- und Kontentheorie*, Zürich.
- Kats, P. [1926a], "Double-Entry Book-keeping in England before Hugh Oldcastle," *The Accountant*, Vol. LXXIV, No.2667, pp.91-98.
- [1926b], "Hugh Oldcastle and John Mellis - I • II," *The Accountant*, Vol. LXXIV, No.2677, pp.483-487 ; Vol. LXXIV, No.2682, pp.641-648.
- [1927], "The 'Nouvelle Instruction' of Jehan Ympyn Christophle - I • II," *The Accountant*, Vol. LXXVII, No.2750, pp.261-269 ; Vol. LXXVII, No.2751, pp.287-296.
- [1930], "James Peele's 'Maner and Fourme'," *The Accountant*, Vol. LXXXII, No.2875, pp.41-44 ; Vol. LXXXII, No.2876, pp.88-91 ; Vol. LXXXII, No.2877, pp.119-122.
- Kelly, P. [1801], *The Elements of Book-keeping, both by Single and Double Entry: Comprising a System of Merchants Accounts, Founded on Real Business, Arranged according to Modern Practice, and Adapted to the Use of Schools*, London.
- Kojima, O. [1977], "Accounting Textbooks in Seventeenth Century England - Chiefly about Collins' Work -," *The Accounting Historians Journal*, Vol. IV, No. 1, pp.69-78.
- [1980], "Macghie's 'The Principles of Book-keeping' - The Second Scottish Book on Accounting," *Accounting and Business Research*, Vol. X, No.37A (Special Accounting History Issue), pp.102-108.
- Kulischer, J. [1965], *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit*, Bd. II, Die Neuzeit, 3., unveränderte Aufl. (諸田 實・

松尾展成・柳澤 治・渡辺 尚・小笠原 茂訳 [1982/1983]『クーリッシェル
ヨーロッパ近世経済史Ⅰ・Ⅱ』東洋経済新報社).

Lee, T. A. (ed.) [1986], *A Scottish Contribution to Accounting History*,
New York.

Littleton, A. C. [1931], "A Cost Approach to Elementary Bookkeeping,"
The Accounting Review, Vol. VI, No. 1, pp. 33-37.

—— [1933], *Accounting Evolution to 1900*, New York (片野一郎訳 [1978]
『リトルトン 会計発達史 (増補版)』同文館).

—— [1961], *Essays on Accountancy*, Urbana, Illinois.

Littleton, A. C. and Yamey, B. S. (eds.) [1956], *Studies in the History
of Accounting*, London.

MacGhie, A. [1718], *The Principles of Book-keeping Explain'd*, ---- ,
Edinburgh.

McMickle, P. J. and Jensen, P. [1988], *The Birth of American Accountancy*,
New York.

Mair, J. [1736], *Book-keeping Methodiz'd: or, a Methodical Treatise of
Merchant-Accompts. According to the Italian Form.* ----, Edinburgh.

—— [1773], *Book-keeping Moderniz'd: or, Merchant-Accounts by Double
Entry, According to the Italian Form.* ---- , Edinburgh.

—— [1793], *Book-keeping Moderniz'd: or, Merchant-Accounts by Double
Entry, According to the Italian Form.* ---- , 6th ed., Edinburgh
(reprinted ed., New York, 1978).

Malcolm, A. [1718], *A New Treatise of Arithmetick and Book-keeping*.
---- , Edinburgh.

—— [1731], *A Treatise of Book-keeping, or, Merchants Accounts ; in the
Italian Method of Debtor and Creditor*, ---- , London.

Mantoux, P. [1959], *La Révolution industrielle au XVIII^e siècle*, Editions
Génin, Paris (徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳 [1964]『ポール・マントゥ
産業革命』東洋経済新報社).

Mathias, P. [1969], *The First Industrial Nation: An Economic History of
Britain, 1700-1914*, London (2nd ed., London, 1983) (小松芳喬監訳
[1972]『最初の工業国家—イギリス経済史 1700-1914年—』日本評論社).

Mellis, J. [1588], *A Briefe Instruction and maner howv to keepe bookes of
Accompts after the order of Debtor and Creditor*, ---- , London.

- Mephram, M. J. [1983], "Robert Hamilton's Contribution to Accounting," *The Accounting Review*, Vol. LVIII, No. 1, pp. 43-57.
- [1988a], "The Eighteenth-Century Origins of Cost Accounting," *Abacus*, Vol. XXIV, No. 1, pp. 55-74.
- [1988b], "The Scottish Enlightenment and the Development of Accounting," *The Accounting Historians Journal*, Vol. XV, No. 2, pp. 151-176.
- [1988c], *Accounting in Eighteenth Century Scotland*, New York.
- Mephram, M. J. and Stone, W. E. [1977], "John Mair, M. A. : Author of the First Classic Book-keeping Series," *Accounting and Business Research*, Vol. VII, No. 26, pp. 128-134.
- Mitchell, R. J. and Leys, M. D. R. [1958], *A History of London Life*, London (松村 起訳 [1971] 『ロンドン庶民生活史』 みすず書房).
- Murray, D. [1930], *Chapters in the History of Bookkeeping, Accountancy & Commercial Arithmetic*, Glasgow.
- Nobes, C. W. [1982], "The Gallerani Account Book of 1305-1308," *The Accounting Review*, Vol. LVII, No. 2, pp. 303-310.
- North, R. [1714], *The Gentleman Accomptant: or, An Essay to unfold the Mystery of Accompts. By Way of Debtor and Creditor, -----*, by a Person of Honour, London.
- Parker, R. H. [1984], "The First Scottish Book on Accounting: Robert Colinson's *Idea Rationaria* (1683)," *The Accountant's Magazine*, Vol. LXXVIII, No. 819, pp. 358-361.
- [1983], "The Tercentenary of the First Scottish Book on Accounting," *The Accountant's Magazine*, Vol. LXXXVII, No. 929, p. 418.
- Peele, J. [1553], *The maner and fourme how to kepe a perfect reconyng, after the order of the moste worthie and notable accompte, of Debitour and Creditour -----*, London.
- [1569], *The Pathe waye to perfectnes, in th'accomtes of Debitour and Creditour. -----*, London.
- Penndorf, B [1933], *Luca Pacioli: Abhandlung über die Buchhaltung 1494*, Stuttgart.
- Pirenne, H. [1963], *Historie économique et sociale du moyen age*, Nouvelle éd., Paris.

- Previts, G. J. and Merino, B. D. [1979], *A History of Accounting in America : An Historical Interpretation of the Cultural Significance of Accounting*, New York (大野功一・岡村勝義・新谷典彦・中瀬忠和訳 [1983] 『プレヴィッツ＝メリノ アメリカ会計史—会計の文化的意義に関する史的解釈—』同文館).
- Pryce-Jones, J. E. and Parker, R. H. [1976], *Accounting in Scotland: A Historical Bibliography*, 2nd ed., Edinburgh.
- Ramsey, P. [1956], "Some Tudor Merchants' Accounts," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp.185-201.
- Scheerer, F. [1950], *Kontentheorien der doppelten Buchhaltung*, Zürich (安平昭二訳 [1969] 『F. シェーラー 複式簿記の基本理論』中央経済社).
- Sheldahl, T. K. (ed.) [1989], *Education for Mercantile Counting House: Critical and Constructive Essays by Nine British Writers, 1716-1794*, New York.
- Snell, C. [1701], *Rules for Book-keeping, According to the Italian Manner*: ----, London (reprinted ed., London, 1979).
- [1720], *Observations made upon Examining the Books of Sawbridge and Company*, London (reprinted ed., London, 1979).
- ten Have, O. [1976], *The History of Accountancy*, translated by van Seventer, A., Palo Alto, California (三代川正秀訳 [1987] 『O. テン・ハーヴェ著 会計史』税務経理協会).
- Thomson, H. W. [1963], "Bibliography: Books on Accounting in English, 1543-1800," in Yamey, Edey and Thomson [1963], pp.202-224.
- Trevelyan, G. M. [1958], *History of England*, 3rd ed., London (大野真弓監訳 [1973/1974/1975] 『トレヴェリアン イギリス史1～3』みすず書房).
- [1961], *English Social History: A Survey of Six Centuries: Chaucer to Queen Victoria*, 3rd ed., London (藤原 浩・松浦高嶺訳 [1971/1983] 『トレヴェリアン イギリス社会史1・2』みすず書房).
- Vanes, J. [1967], "Sixteenth-century Accounting: The Ledger of John Smythe, Merchant of Bristol," *The Accountant*, Vol.CXLII, No.4839, pp.357-361.
- Weddington, J. [1567], *A Breffe Instruction, and Manner, Howe to Kepe, Marchantes Bokes, of Accompts*. ----, Antwerp.
- Winjim, J. O. [1970], "Accounting in Its Age of Stagnation," *The Account-*

- ing Review, Vol. XLV, No. 4, pp. 743-761.
- [1971], "The Journal of Thomas Gresham," *The Accounting Review*, Vol. XLVI, No. 1, pp. 149-155.
- [1972], *The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500-1750*, Urbana, Illinois.
- Woolf, A. H. [1912], *A Short History of Accountants and Accountancy*, London (片岡義雄・片岡泰彦訳 [1977]『ウルフ 会計史』法政大学出版局).
- Yamey, B. S. [1944], "Edward Jones's English System of Book-keeping'," *The Accounting Review*, Vol. XIX, No. 4, pp. 407-416.
- [1956a], "Introduction," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp. 1-13.
- [1956b], "Edward Jones and the Reform of Book-keeping, 1795-1810," in Littleton and Yamey (eds.) [1956], pp. 313-324.
- [1957], "Early Books on Accounting: Carpenter's *Most Excellent Instruction* (1632) and Other Works," *The Accountant*, Vol. CXXXVII, No. 4330, pp. 683-684.
- [1958], "John Weddington's *A Breffe Instruction*, 1567," *Accounting Research*, Vol. IX, No. 2, pp. 124-133.
- [1960], "The Development of Company Accounting Conventions," *Three Banks Review*, No. 47, pp. 3-18.
- [1963a], "A Survey of Books on Accounting in English, 1543-1800," in Yamey, Edey and Thomson [1963], pp. 155-179.
- [1963b], "Double Entry in Practice in the Seventeenth and Eighteenth Centuries," in Yamey, Edey and Thomson [1963], pp. 180-201.
- [1967], "Fifteenth and Sixteenth Century Manuscripts on the Art of Book-keeping," *Journal of Accounting Research*, Vol. V, No. 1, pp. 51-76.
- [1974], "Pious Inscriptions Confused Accounts; Classification of Accounts: Three Historical Notes," in Edey, H. C. and Yamey, B. S. (eds.), *Debits, Credits, Finance and Profits*, London, 1974, pp. 143-160.
- [1975], "The Authorship and Sources of the 'Nieuwe Instructie'," in Ympyn, J., *A notable and very excellente woorke*, reprinted by Kojima, O. and Yamey, B. S., Daigakudo Books, Kyoto, 1975, Appendix II, pp. 60-73.

- [1977], "Some Topics in the History of Financial Accounting in England, 1500-1900," in Baxter, W. T. and Davidson, S. (eds.), *Studies in Accounting*, London, 1977, pp.11-34.
- [1978a], "Introduction," in Cronhelm, F. W., *Double Entry by Single*, reprinted ed., New York, 1978, pp. 1-6.
- [1978b], "Introduction," in Jones, E. T., *Jones's English System of Book-keeping*, reprinted ed., New York, 1978, pp. 1-15.
- [1978c], *Essays on the History of Accounting*, New York.
- [1979], "Oldcastle, Peele and Mellis: a Case of Plagiarism in the Sixteenth Century," *Accounting and Business Research*, Vol.IX, No. 35, pp. 209-216.
- [1980a], "Early Views on the Origin and Development of Bookkeeping and Accounting," *Accounting and Business Research*, Vol.X, No.37A (Special Accounting History Issue), pp.81-92.
- [1980b], "Peele's Two Treatises in Context," in Peele, J., *The Pathe waye to perfectnes*, reprinted by Kojima, O. and Yamey, B. S., Daigakudo Books, Kyoto, 1980, Appendix II, pp.81-112.
- [1982], *Further Essays on the History of Accounting*, New York.
- Yamey, B. S., Edey, H. C. and Thomson, H. W. [1963], *Accounting in England and Scotland : 1543-1800*, London.
- Ympyn, J. [1547], *A notable and very excellente woorke, expressing and declaryng the maner and forme how to kepe a boke of accoptes or reconynges, ---- . Translated with great diligence out of the Italian tounge into Dutche, and out of Dutche, into French, and now out of French into Englishe*, London.